

資料

(平成八年十月)

第四十一回「合宿教室」(阿蘇)感想文集

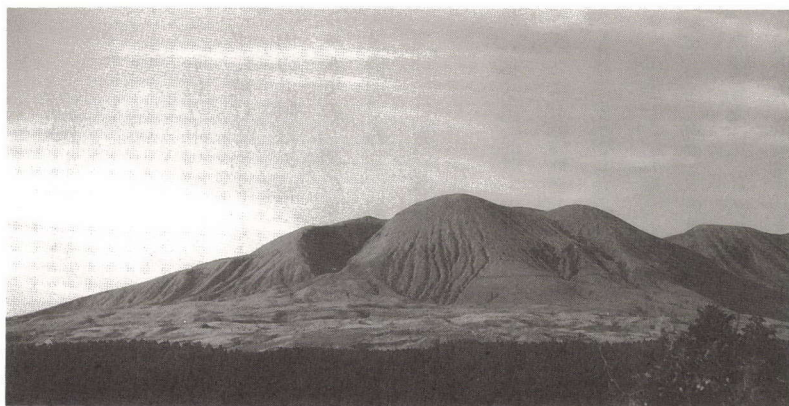
——日本人としての自覚をもとめて——

社団法人 国民文化研究会

—— “合宿教室” 41年の歩み ——

| 回数 | 年 度 | 開催地 | 参加 人員 | 主 要 講 師 |
|---------|-------|-----|----------|-------------------|
| 1 | 昭和31年 | 霧 島 | 92 | 広田洋二・日下藤吾・井川修治 |
| 2 | 〃 32年 | 福 岡 | 127 | 竹山道雄・高山岩男・浅野晃 |
| 3 | 〃 33年 | 佐 賀 | 72 | 勝部真長・木下彪・森三十郎 |
| 4 | 〃 34年 | 阿 蘇 | 160 | 花田大五郎・中山優・野口恒雄 |
| 5 | 〃 35年 | 雲 仙 | 200 | 木内信胤・花田大五郎・佐藤慎一郎 |
| 6 | 〃 36年 | 雲 仙 | 203 | 小林秀雄・木内信胤・津下正章 |
| 7 | 〃 37年 | 阿 蘇 | 215 | 福田恆存・木内信胤・黒岩一郎 |
| 8 | 〃 38年 | 雲 仙 | 202 | 竹山道雄・木内信胤・木下広居 |
| 9 | 〃 39年 | 桜 島 | 202 | 小林秀雄・広田洋二・木内信胤 |
| 10 | 〃 40年 | 大 分 | 215 | 岡潔・花見達二・木内信胤・夜久正雄 |
| 11 | 〃 41年 | 雲 仙 | 240 | 福田恆存・木内信胤・戸川尚 |
| 12 | 〃 42年 | 阿 蘇 | 336 | 林房雄・太田耕造・木内信胤 |
| 13 | 〃 43年 | 霧 島 | 353 | 竹山道雄・高谷覚蔵・木内信胤 |
| 14 | 〃 44年 | 阿 蘇 | 403 | 岡潔・木内信胤・木下道雄・奥田克巳 |
| 15 | 〃 45年 | 雲 仙 | 491 | 小林秀雄・木内信胤・桑原暁一 |
| 16 | 〃 46年 | 霧 島 | 302 | 村松剛・木内信胤・戸田義雄 |
| 17 | 〃 47年 | 阿 蘇 | 402 | 木内信胤・山本勝市・胡蘭成 |
| 18 | 〃 48年 | 雲 仙 | 433 | 村松剛・木内信胤・山口宗之 |
| 19 | 〃 49年 | 霧 島 | 528 | 小林秀雄・木内信胤・戸田義雄 |
| 20 | 〃 50年 | 阿 蘇 | 435 | 福田恆存・木内信胤・夜久正雄 |
| 21 | 〃 51年 | 佐世保 | 372 | 長谷川才次・村松剛・木内信胤 |
| 22 | 〃 52年 | 雲 仙 | 332 | 木内信胤・衛藤藩吉・高木尚一 |
| 23 | 〃 53年 | 阿 蘇 | 440 | 小林秀雄・木内信胤・松本唯一 |
| 24 | 〃 54年 | 霧 島 | 268 | 木内信胤・高山岩男・山田輝彦 |
| 25 | 〃 55年 | 雲 仙 | 431 | 福田恆存・法眼晋作・宝辺正久 |
| 26 | 〃 56年 | 阿 蘇 | 353 | 齋藤忠・村松剛・青砥宏一 |
| 27 | 〃 57年 | 霧 島 | 321 | 齋藤忠・黛敏郎・幡掛正浩 |
| 28 | 〃 58年 | 雲 仙 | 327 | 齋藤忠・小堀桂一郎・長内俊平 |
| 29 | 〃 59年 | 阿 蘇 | 302 | 吉岡一郎・小堀桂一郎・加納祐五 |
| 30 | 〃 60年 | 阿 蘇 | 249 | 市原豊太・高村坂彦・小田村四郎 |
| 31 | 〃 61年 | 島 原 | 294 | 江藤淳・村松剛・小柳陽太郎 |
| 32 | 〃 62年 | 阿 蘇 | 269 | 小堀桂一郎・鈴木一・関正臣 |
| 33 | 〃 63年 | 島 原 | 227 | 児島襄・小堀桂一郎・加納祐五 |
| 34 | 平成元年 | 島 原 | 204 | 村松剛・山田輝彦・国武忠彦 |
| 35 | 〃 2年 | 阿 蘇 | 204 | 黛敏郎・小柳陽太郎・占部賢志 |
| 36 | 〃 3年 | 厚 木 | 244 | 田久保忠衛・国武忠彦・山内健生 |
| 37 | 〃 4年 | 阿 蘇 | 257 | 松村剛・平川祐弘・奥富修一 |
| 38 | 〃 5年 | 厚 木 | 271 | 村松剛・佐伯彰一・白濱裕 |
| 39 | 〃 6年 | 阿 蘇 | 253 | 徳岡孝夫・小堀桂一郎・絹田洋一 |
| 40 | 〃 7年 | 厚 木 | 240 | 小川三夫・長谷川三千子・東中野修道 |
| 41 | 〃 8年 | 阿 蘇 | 171 | 竹本忠雄・伊藤哲夫・坂口秀俊 |
| 累計・参加人員 | | | 11,640名 | |

第四十一回 “合宿教室（阿蘇）” 全参加者の感想文と短歌詠草



とき 平成八年八月二日（金）から六日（火）まで四泊五日間
 ところ 熊本県・阿蘇国立公園「阿蘇の司」
 参加総数 一七一名

目次

| | | |
|---------------------------------|------------|-----|
| “はしがき”に代へて | 理事長・小田村寅二郎 | 2 |
| 大学別参加者数・その他の人数の内訳 | | 5 |
| “合宿教室”の日程表（四泊五日） | | 6 |
| 第41回“合宿教室”のあらまし | | 7 |
| 感想文と第二回目の“短歌詠草” | 参加者全員 | 27 |
| 短歌詠草 | 参加者全員 | 83 |
| あとがき | | 106 |
| カメラ・レポート27枚（29ページから81ページの左頁に掲載） | | |

“はしがき”に代へて

小田村寅二郎 (数へ八十三歳)

(本会理事長・元亜細亜大学教授)

昭和三十一年(一九五六年)の本会創立以来、毎年の八月に、主として九州各地または神奈川県厚木市で、一年も欠かさずに続けて来ましたこの「全国学生青年合宿教室」は、今年は第四十一回目といふ節目の年を迎へ、熊本県・阿蘇国立公園内の「阿蘇の司・ビラパークホテル」で、八月二日(金)から八月六日(火)までの四泊五日間で開催しました。このホテルでの「朝の集ひの広場」からは、雄大な阿蘇連山が間近く眺められ、特に朝の澄み切つた大氣を通しての連山の美しさは格別であり、参加者一同は、心のなごみ思ひ一入(ひとしほ)でした。宿舎側の設備も大變に使ひよく、この「合宿教室独自の日程の運び」にも、きはめて好都合な運営ができたことは喜ばしい限りでした。

北は北海道・青森をはじめ、全国津々浦々から馳せ参じてくださった参加者諸君(三九大学から、男女学生六五名、社会人および関係者一〇四名ほか合計一七一名)は、例年に比してやや少人数ではありましたが、少数精鋭の集りとなり、それなりに充実した合宿運営となつたことは、助言者一同の認める所でした。

全員は、旅装を解く間もなく、開会式(八月二日午後二時)に列席し、(福井工大・工学部三年・増村博文君)の力強い「開会宣言」、続いて国歌斉唱二回、ついで「祖国日本のために尊い生命を捧げられたすべての先人の御霊」に対し、一分間の黙禱を捧げ、私の「開会挨拶」(十五分間)のあと、今回の合宿運営委員長として既往一年間の準備に精励して来られた與島誠央氏(福岡県立春日高校教諭、数へ三十五歳)が、「我々がこの合宿教室に目指してきたものは何か。一言葉のいのちと国の姿」について述べたあと、参加者にこの四泊五日間を、「頭だけではなく心を精一杯働かせて過ごしていただきたい」旨を訴へられて、この合宿教室はスタートしました。

今回の「合宿教室」にお招きした講師のお二方は、第二日の午前が、日本政策研究センター所長の伊藤哲夫先生「演題―激動する東アジア情勢と日本―（副題）―日本国憲法を再検討する―」と、第三日の午前を担当された今お一人は、この春筑波大学を定年退職されて名誉教授となられ、新しく社倫理研究所客員教授になられたフランス文学御専攻の竹本忠雄先生であられた。竹本先生は、「日本の神聖と現代世界」と題されての御造詣深い思想を駆使されてのお話をされ、「神聖なるもの」を追求してきたわが日本民族の心奥に注目なさつて、「連綿たる歴史を持つ日本史の、世界史的意義を考へなければなりません」と訴へられ、天皇と伊勢神宮が冒すことのできない「神聖なるもの」であることを力説なさつて、深い感銘を一同に与へてくださった。伊藤・竹本両先生に対する参加者からの質疑も、実のあるものであつたし、それへの両先生の御応答も、懇切をきはめたものであつたことは、有難いことであつた。

さて、この「合宿教室」では、日本の歴史と伝統を軽視し続ける現代日本の社会風潮に鋭い眼を注がねばならぬことを強調すると共に、昨年の合宿につづいて、東京裁判史観から全国民が一日も早く脱皮しなければならぬことが、刻下の急務であることが合せて力説されました。それと並行して、大学内での「友だちづきあひ」は、上つらだけの遊び友だちではなく、お互ひに相手の心を許し合ふことのできる友だちを求め合つていくことこそ、「真の学問の友」「人生を通じての真実の友」が得られることを、合宿教室における先輩に当たる助言者たちが訴へてくださったことも有意義でした。「班別討論」「班別輪読」「各自が創作した和歌についての忌憚のない自由な班別相互批評」などの時間帯を通じて、参加者諸君はこの「合宿教室」ならではの数々の収穫を身につけてくださったことと思ひます。

ここに編んだ『感想文集』は、全参加者が「解散の間ぎは」に「走り書き」で提出してくださったものです。紙面の都合で全文をそのまま載せ得なかつたことは、お許しいただきたいと存じます。各人の文の最後に、小さい活字で載せてあるの

は、各人がこの合宿で第二回目に創作してくださった「和歌」です。合宿中の「短歌相互批評」を経て身につけられた力がかがはれる作品と申せませうか。また、この「文集」の編集作業には、藤井貢氏（本会々員、俳講談社校閲第三部部长）をはじめ、十名前後の方々（巻末のあとがきに人名記載）が、公務・社務の余暇をさいて取り組んでくださったことを、心から感謝申し上げます。

また、最後になりましたが、この「合宿教室事業」を行ふに当りまして、本年もまた、朝野からお寄せくださいました多
大の御支援・御激励に対しまして、会員一同と共に、心から厚く御礼申し上げる次第でございます。

来年（平成九年）の「第四十二回合宿教室」は、八月八日（金）～八月十二日（火）、四泊五日間、神奈川県厚
木市立「七沢自然教室」（七沢は）で開催することが決定し、「合宿教室運営委員長」には、東京近郊在住の内海勝彦氏（日
産自動車_株社員、数へ四十二歳）を煩はすことになりました。改めて会員各位に格段の御協力を御願ひ申し上げます。



「第41回合宿教室」記念撮影（参加者 171名） 於・阿蘇国立公園・「阿蘇の司」

参加者

（学生班 三九大学）（洋数字は参加学生数）

北海道大 1 東京大 1 横浜国立大 1 防衛大 1

京都大 1 島根大 2 九州大 1 福岡教育大 2

熊本大 1 長崎大 1 宮崎大 2 鹿児島大 3

新潟県立看護短大 1 東北女子大 4

東北女子短期大 3 早稲田大 4 慶応大 1

法政大 1 亜細亜大 6 拓殖大 1 日本大 3

成蹊大 1 東京工大 1 駒沢大 1 独協大 1

青山学院大 1 神奈川大 1 武蔵野音大 1

国立音大 1 桜美林大 1 実践女子大 1

東京法律専門学校 1 福井工業大 1

同志社大 1 中村学園大 2 福岡大 3

尚綱大 2 福岡ライセンスカレッジ 3 熊本学園大 1

計 六五名（うち女子二八名）

（社会人・教員参加者） 二七名

（招聘講師） 二名（国民文化研究会） 七七名

（事務局） 七名（写真） 一名

総計 一七一名

第41回(平成8年)全国学生青年合宿教室日程表

| | 8月2日(金) | 8月3日(土) | 8月4日(日) | 8月5日(月) | 8月6日(火) |
|-------|---|---|---|---|--|
| 6:30 | | (起床) 洗面・清掃 | (起床) 洗面・清掃 | (起床) 洗面・清掃 | (起床) 洗面・清掃 |
| 7:00 | | 朝の集ひ (国旗掲揚・体操) | 朝の集ひ (国旗掲揚・体操) | 朝の集ひ (国旗掲揚・体操) | 朝の集ひ (国旗掲揚・体操) |
| 8:00 | 朝食 (8:30) | 朝食 (8:30) | 朝食 (8:30) | 朝食 (8:00) 合宿を顧みて 合宿運営委員長 岡島健次氏 (8:30) | |
| 9:00 | 講義 日本政策研究センター所長 伊藤哲夫 先生 | 講義 コレージュ・ド・フランス 客員教授 前・筑波大学教授 竹本忠雄 先生 | 講義 元・日特金属工業㈱常務取締役 国民文化研究会・顧問 加納祐五 先生 | | 参加者による 全体感想自由発表 |
| 10:00 | 質疑応答 (10:00) (10:10) | 質疑応答 (10:00) (10:10) | 質疑応答 (10:00) (10:10) | | 感想文執筆 及び 第2回短歌創作 |
| 11:00 | 班別研修 (10:40) (10:50) | 記念写真撮影 (10:40) (11:00) | 班別研修 (10:40) (11:00) | | 班別懇談 (11:00) (11:30) |
| 12:00 | 随 時 受 付 | 昼食 (12:00) | 昼食 (12:00) | 昼食 (12:00) | 閉会式(挨拶) 国民文化研究会・副理事長 榎千代田コンサルタンツ 代表取締役専務 上村和男氏 (12:30) |
| 1:00 | | 歴史講義 神奈川県立百合丘高校校長 国民文化研究会・常務理事 国武志彦 先生 | 短歌創作導入講義 山口県立下松高校教諭 寶邊矢太郎 先生 | 創作短歌全体批評 熊本市区所保健衛生局課長補佐 折田豊生 先生 | 昼食後随時解散 |
| 2:00 | 開会式(挨拶) 国民文化研究会・理事長 小田村賢二郎氏 | | レクリエーション | | |
| 3:00 | オリエンテーション (合宿趣旨説明) 合宿運営委員長 岡島健次氏 (諸注意伝達) 合宿指揮班長 久保田真氏 | 班別研修 (14:30) (14:40) | 阿蘇賞 塚散策 | 短歌創作 | 班別短歌 相互批評 |
| 4:00 | 班別自己紹介 (18:00) | ビデオ上映 (18:20) (18:30) | | | |
| 5:00 | 事務連絡打ち合せ (17:00) | | | | |
| 6:00 | 夕食 | 夕食 | 夕食 | 地区別懇談会 (17:30) | 夕食 |
| 7:00 | 入浴 | 入浴 | 入浴 | 入浴 | 入浴 |
| 8:00 | 合宿導入講義 福岡県立門司高校教諭 坂口秀俊 先生 | 輪読導入講義 ㈱日本興業銀行 資本市場部第二課課長 小柳志乃夫 先生 | 講話 国民文化研究会・事務局長 長内俊平 先生 (20:00) 慰霊祭の説明 大成康政㈱ 山口秀範氏 (20:30) (20:40) | | 班別研修 (21:00) (21:10) |
| 9:00 | 班別研修 (22:30) | 班別輪読 (22:00) | 慰霊祭 (21:30) 班別懇談 (22:00) | | 夜の集ひ (22:30) 就床 |
| 10:00 | 就床 | 就床 | 就床 | | |

第四十一回「合宿教室」のあらまし

第一日

(八月二日・金曜日)

第四十一回全国学生青年合宿教室は、熊本県・阿蘇の「阿蘇の司・ピラパークホテル」において開催された。雄大な外輪山に囲まれた緑豊かな景勝地である。北は遠く北海道、南は鹿児島からと、まさに全国各地から集ひ来た参加者は、「友よと呼べば友は来たりぬ！」の垂れ幕によって迎へられた。受付を済ませ、各自の班室に入り、初めて会った班員たちと挨拶を交はし、開会式に備へた。

開会式

福井工業大学・工学部三年・増村博文君の力強い「開会宣言」により、合宿教室の幕は開かれた。参加者一同は高らかに国歌を二度唱和した後、戦時平時を問はず祖国日本のために貴い生命を捧げられた全ての祖先の御霊に対し、一分間の黙禱を捧げた。

次に主催者を代表して(社)国民文化研究会理事長・小田村寅二郎先生が登壇され、「この合宿教室の第一回は昭和三十一年に霧島で開催されました。合宿教室を開いたのは、三十歳前後の人々と個人主義の思想に染った大学生との間にできた『時代の断層』を乗り越えるためでした。イデオロギーを排除し、お互ひが心を開き合つて語り合ふことを目標としてやってきました。学校・学年差を除去して、一人の青年として対等に話し合ふことを大原則にして臨んで下さい」と語られた。また先生は西ドイツで一九四九年一


九六三年に政権を担当したキリスト教民主同盟の党首・アデナウアーがその総裁の部屋に『教育勅語』のドイツ語訳を掲げ、「父母ニ孝ニ」と「一旦緩急アレバ義勇公ニ奉ジ」の二箇所を特に太い字で記し、その精神を汲まうとしてゐたことを紹介され、「日本では戦後、この『教育勅語』は、上から押し付けられた教育訓示だったと批判され、顧みられなくなつてゐる。しかし『教育勅語』の本文を良く読めば、『朕、爾臣民ト俱ニ拳拳服膺シテ、咸其徳ヲ一ニセンコトヲ庶幾フ』とあるやうに、天皇も国民も同じく踏み行はむといふ教へなのです。この大切な日本文化の精華を国民が再び心の中心として求めるやうになるまで、この合宿教室は永遠に続けてほしい」と力強く訴へられた。

続いて参加者を代表して、京都大学・総合人間学部三年・庭本秀一郎君が「この合宿教室では、心を開いて語り合ひ本当に惚れることのできる人と出会ひませう」と参加者に呼びかけた。

開会式後のオリエンテーションでは、まづ合宿教室運営委員長の與島誠史氏（福岡県立春日高校教諭）が「四泊五日の合宿を過ごす中で、皆さん一人一人の心の中に、見失ひかけてゐた、あるいは意識せずにはゐた本当の心の故郷を感じて下さい。日本の国の歴史と祖先の足跡をしっかり見つけ合ひませう」と合宿の趣旨を説明された。続いて指揮班長の久保田真氏（熊本県立宇土高校教諭）によつて、合宿期間中の細部にわたる注意事項が伝達された。

合宿導入講義 「真の『生きる力』とは何か―歴史を正確に見直さう」

福岡県立門司高校教諭 坂口 秀俊 先生



先生は、現在と戦前の教育状況を比較する資料として、第十五期中央教育審議会の第一次答申と治安維持法で検挙され昭和九年に編集された左傾学生の手記を紹介された。両者は①詰め込み教育②大学生活は出世のため③歴史教育は観念的なもので重要なことは教へられてゐないことなどが共通してゐると指摘され、「自分がしっかりしたものゝを掴まなければ仕方がないのだといふことになり」と教示された。次に歴史認識について、「歴史は単純化して見るのは危険であり、複眼的に見る必要がある」として、高校日本史の教科書の記述に言及された。「戦前はファシズムの時代で戦

後は民主主義の明るい時代だといふ現在の一般的な風潮は大きな誤りである」としてファシズムの中心的な役割を果したとされる大政翼賛会の実態を明らかにし、歴史を単純化して見ることの危険を指摘された。更に誤った風潮を作り出した基として、徹底した言論統制のもと占領軍総司令部民間情報局の戦争犯罪宣伝計画により、わが国民に犯罪者意識が植えつけられていった実態を明らかにされた。この誤った風潮は、今日更にひどくなって来てゐるとして、金沢大学の入試問題を取り上げられた。そこでは『植民地支配と侵略』といふ言葉で戦前のアジア諸国に対する歴史は一括され、その実態については一顧もされてゐないことについて「出題者は本当に歴史の先生なのだらうか」と憂慮された。最後に「我々にとって国家とは何か」と問ひかけられ、我が国は、ポツダム宣言を『国体の護持』を条件として受諾し、それは日本国憲法第一条の『この（天皇の）地位は主権の存する日本国民の総意に基づく』といふ表現になつてゐることを指摘された。「この総意とは古くから日本の国を営々と守つてきた人々全てを指してをり、それによつて独立は保たれた。我々が生まれる前から国家はあつたし、国家は運命共同体であり、国家があつて個人があるといふことになる」と私達の中に息づいてゐる国家に注目し、『生きる力』とは自国の歴史、文化伝統への誇りを持つことから生まれてくるのではないかと訴へられた。そして、「正確に物を見る目を得ていただきたい」と結ばれた。

講義終了後、参加者は各班室に戻り、導入講義についての班別研修を行った。まづ皆で講義内容を確認し合ひ、その後講師が一番伝へたかったことは何か、どこが最も重要なことだったかといふことに留意して討論が進められた。

なほ、この班別研修は、以後の各講義の後に行はれていった。全国から集まつた見ず知らずの班友を前にして、最初はやはり緊張のためか意見も少なく、発言も限られてゐたが、班員がお互ひに打ち解けるに従ひ、次第に発言も多くなり、時には反論し、時には共感し合ひながら、班員相互の心の交流が深められていった。

合宿の日程は「朝の集ひ」から始まる。阿蘇の山並みを望む広場には、明治天皇御製「さしのぼる朝日のごとくさはやかにたまはしきはこころなりけり」の垂れ幕が掲げられた。国旗掲揚の後、体操を行ひ、一日の研修を心新たに迎へた。

講義 「激動する東アジア情勢と日本―日本国憲法を再点検する」

日本政策研究センター所長 伊藤 哲夫 先生



先生は始めに、現在の日本には本当の「言論の自由」はなく、自分の意見が主張できてゐないことを、従軍慰安婦の問題、PKO法案の審議を例に挙げられて訴へられ「固定観念を批判できず、眼前の事実を目を伏せる。まさに『裸の王様憲法議論』をしてゐる」と語られた。

本題に入られた先生は、まづ第一に日米安保共同宣言と朝鮮半島「有事」について「現在の北朝鮮は危機的な食糧不足にあり、社会主義体制の崩壊の日は近い。軍部強硬派による韓国攻撃の可能性がある。アメリカが参戦した場合、『日米安保共同宣言』下で日本は何を為すべきなのか。韓国在留邦人の救出、多数の難民収容、日本駐留米軍の支援、国内警備強化が考へらる。韓国の救出、多数の難民収容、日本駐留米軍の支援、国内警備強化が考へられるが、これらは全て憲法に違反してしまふ。軍事行動は集团的自衛権の行使にあたるためにできない。有事の際の最悪のシナリオを想定した対応がなく、それは国を守る理念がないからだ」と語られた。第二に「大国・中国」にどう向き合ふかといふテーマについて「二十一世紀の中国は、経済大国になると同時に軍事大国となる。石油の豊富な産出が見込まれる南沙諸島、尖閣列島を不可欠の生存空間として我が物にしようとするだらう。江沢民路線ではナシヨナリズムの仮面を被った軍国主義化が図られ、我が国に対して強力な圧力をかけてくるだらう。然るに『中国は脅威』と言はうとすると圧力がかか

る。日本は病的な『贖罪意識』を捨て、リアルな中国認識を持たねばならない」と訴へられた。第三になぜ、日本の外交や政治は「亡国的」なのかといふことについて「大東亜戦争は『侵略』戦争であったといふ戦争意識の問題があり、日本だけが戦争に係はる事をしなければ世界は平和になるといふ驚くべき国際感覚を持に致った。日本国憲法が『平和憲法』と呼ばれるのは、第九条による武装解除の状態が継続されてゐるからにすぎない。何もしないことは真の平和ではなく、不正に対しては断固たる態度を取ることが平和を守ることなのだ」と語られた。最後に先生は「自分の国の理想・信念を主張し、世界に広げなくてはならない。己れの使命を果すといふ勇氣によつて平和は保たれるのであり、勇氣ある行動を支へるものは勇氣ある言論であり、一人一人の決意である。正しい事を正しいと主張することから第一歩が始まる」と力強く語られ、御講義を終へられた。

講義 「明恵上人と現代の学問」

神奈川県立百合丘高校校長 国 武 忠 彦 先生



先生はまづ、幼くして孤児となり九歳で仏門に入った明恵上人(高弁)について「京都、高山寺での樹上坐禅図は有名だが、生きてゐるから様々の煩惱が湧くのだと自ら野犬に喰はれむと死人の傍らに身を横たへた程に自分自身に厳しい修行を課したことで有名である」と紹介され、「釈迦への懐ひは誠に強烈で、何度も天竺に渡らうとした。『在世の昔を恋慕し』とあるやうに、釈迦の在世に我が身を置いて釈迦が体験したやうに自らも行ずるといふのが明恵上人の学問であった」と語られた。そして現代の学問について「相手の魂の中まで分け入つて一体となることを避け、対象との間に一定の距離を保ち理性的に『理解する』ことを宜しとする。明恵上人の釈迦への傾倒ぶりは、今日の学問のあり方に対する大きな警鐘のやうな気がする」と訴へられた。

続いて先生は、明恵上人の自然観に触れ「幼き頃に親しんだ『鳥』や『桜の木』を懐かしみ、『傍らの友』として『恋慕の手紙』を書き送る人でもあった。何故なら国土も自然も、イザナギ・イザナミの二柱の神から生まれたもので、田夫・野人と同様に仏性があるからだと言ふ。ここから記紀万葉の世界に通じる伝統的な自然との一体的な生命感を豊かに湛へた人物であったことが分かる」と語られた。また現実を堅く信じ、己が身の「あるべき様」に背くことを戒めた上人は、当時の知識人が魅きつけられてゐた末法思想を斥け、万葉以来の日本人の伝統的生き方を貫いたことを指摘された。

最後に先生は「明恵上人は、対象と一つになる主客融和の学問を実践した。これは日本人の伝統的な学問姿勢であった。私達が和歌を詠んで感動することは、この主客融合を日常的に体験してゐるといふことなのだ。日本人の本当の学問とは何だったのかを考へながら、さらに勉強に励んでほしい」と語られ御講義を結ばれた。

ビデオ上映

今回の合宿教室では、シネジャーナル プロダクションの制作による『世界の中の日の丸・君が代』と題するビデオ（二十七分）が上映された。幕末から明治にかけ国際交流が始まるとともに、国旗「日の丸」・国歌「君が代」が制定されてゆくいきさつをたどり、そこにこめられた我が国の成り立ち、そして理想が鮮やかな映像とともに紹介された。参加者一同、国旗・国歌についての認識を深めることができた。

(株)日本興業銀行勤務 小柳 志乃夫 先生



先生は年譜をもとに松陰の足跡と時代背景を丹念に押へ乍ら講義を進めていかれた。先づ「東北遊日記」(嘉永五年)より七言の長い漢詩を紹介された。リズム感のある力強い言葉に若き日の潑刺とした松陰の姿が目には浮かぶやうであったが、先生は「艱を渉り阻を跋み奇を探らむと欲す」といふ松陰の思ひは皆さん一人一人の心の中にも屹度あるのでは」と語りかけられた。そしてその事は「講孟餘話」(告子上第八章)の二節「静処に於て本心を認むる固より善し。又動処に於て本心を認むる、更に善し」といふ文章の中で、若き日の奇を探る旅とは、本心即ち自分自身と出遇ふ旅でもあつたと松陰自身後に述懐してゐる事を指摘された。次に安政元年の書簡「父杉百合之助宛」を紹介され、開国を迫られた当時の日本人の様子について触れ、安政二年の「回顧録」より、その時松陰とその同志たちが何を考へ、何をやらうとしてゐたかを紹介された。そして下田踏海事件の後、入牢させられた松陰が妹千代に出した悲痛な書簡を示され、続いて獄中力強く活動を再開する様子を弟子の桂小五郎に与へた書簡などにより紹介された。また、幽因の身の松陰の下で弟子たちが次々に育っていく充実した日々を丁巳幽室文稿「口羽徳祐に復する書」より紹介された。最後に小説「宝島」の作者R・L・ステイヴンソンの「ヨシダ・トラジロー」といふ文章を紹介され、当時の外国人が松陰そして日本人をどのやうに見てゐたかを話されて講義を終へられた。

班別輪読

講義の後、参加者は各班に分かれて輪読を行った。小柳先生の講義を振り返りながら、紹介された吉田松陰の『東北遊日記』の中の

漢詩を、また父・杉百合之助や妹・千代に宛てられた書簡、そして獄中で他の囚人たちとともに孟子を考究した記録『講孟餘話』を、その一字一句の意味を押さへながら班員皆で声に出して読み、文に込められた吉田松陰の思ひを偲んでいった。

第三日

(八月四日・日曜日)

講義 「日本の神聖と現代世界」

筑波大学名誉教授・(社)倫理研究所客員教授 竹本忠雄先生



と述べられ、

「占領軍は、日本を抹殺する為には、天皇を廃止するか、『天皇』といふ呼称を変へるべきだったが、それができなかった。それは彼らが、日本人にとって、天皇と伊勢神宮が冒すことのできない『神聖なるもの』であることに気づいたからです。神州は不滅です。連綿たる歴史を持つ日本史の世界史的意義を考へなければなりません」と訴へられたあと、東西の宗教・文明あるいは「王」と「君主」および「皇帝」の違い等を、フランスの歴史をたどりつつ、とりわけフランス人の心の変遷

先生は、ご講義の冒頭に、「我々はいま、一九九一年のソ連の崩壊によって、マルクス・レーニン主義が織りあげて来た虹のやうな夢が幻覚であったことが明らかとなった時点に立っております。これからは、進歩主義的考へ方ではなく『神聖なるもの』と人間のかかはりはどうであつたかといふ視点に立って、近代史以前の歴史を見直す必要があるのではないか」とお話になつたあと「『神聖なるもの』は國によつて違ふが、人間誰しも『神聖なるもの』を持つてゐます。大東亞戦争における兵士たちは、生命を賭しても守りたい自分が愛する人々を、それと一体化した國を守らんがため戦つたのです。それが、我々日本人にとって『神聖なるもの』なのです」

を、今の日本人の心と比較しつつ、詳しくお話いただいた。更に、フランス人が、神と国民との絆を結ぶ仲介の役割を果たし、神靈力によって国民の身体を癒して来た「王」をギロチンにかけて、人間そのものを「神聖なるもの」となし、自分たちが齎した自由・平等・博愛の思想を世界に伝へようといふ使命感を持つに至ったことや、ナポレオンの時代に愛国心が芽生えたこと、第一次大戦後に戦死者に対する信仰が生れ、四百年前に祖国を累卵の危機から救った、ジャンヌ・ダルクを聖者として迎へることになった史実などを息もつかせずお話になったあと、

「現代のフランス人は、今の日本人と比べ、強い使命感と統一感を持つてゐることを認めざるを得ない。我々は最初はアメリカ、二度目は我々自身に負けたのです。今の日本人は、占領軍による鉄の輪のごとき毒化作用 (Intoxication) によって政治家の例に見られる如く、事態を真直ぐに見ることが出来なくなつてゐる。諸外国が日本に干渉して発生してゐる事態(教育・靖国神社)はまさにこれです。悲しいことながら今の日本は独立国ではない」と我々に覚醒を促され、さらに

「我が皇室は代々二つの道をとほして國民の心を癒してこられました。ひとつは歌です。それが二千年にわたつて続いてゐる。もうひとつは行幸です。昭和天皇が全国をあまねく行幸されて、あれほど多くの國民にお会ひになつた、さういふ例は世界にあります。『神聖なるもの』と國民との絆を断ち切つて日本に革命を起さうとしてゐる人々があるが、革命の結果がどういふことになるかは、二十世紀の歴史が証明したとほりです。私達は二度と同じ過ちを繰り返してはなりません」と話され、「日本人の使命感とは何か、統一感とは何か。どこにそれを求むべきか、どうしたらそれを再び見いだせるのかを、今こそ考へるべき時であらうと思ひます」と結ばれた。

山口県立下松高校教諭 宝 辺 矢太郎 先生



先生は始めに、高校の教諭である奥様がクラスの生徒に作らせた信州へのスキー実習の折りの短歌を紹介され「短歌は、自分の経験を題材にし、自分で作るものです。自分の経験をリズムを持った調べに残すのです」と指摘された。次に短歌創作の上では重要な推敲・添削について、腰折れの短歌は一首一文にすること、歴史的仮名遣ひ・文語表現をできる限り使ふこと等を教示され「心の動き、新鮮な感動を率直に、正確な言葉で詠んで下さい」と語られた。続いて連作短歌の意義を説明された後、「短歌には嘘は詠めません。日本人は自らの心を正すために短歌を作って来たのかも知れません」と「しきしまの道」の意味を話された。最後に先生は、これまでに非常に感動した短歌として、昭和天皇が敗戦後になされた八年半に渡る地方巡幸の折りの御製と明治・大正・昭和の三代を生きた歌人・川出麻須美の短歌を紹介され、御講義を終へられた。

レクリエーション

短歌創作導入講義の後、心待ちにしてゐた「贅塚にへつか散策」の時が来た。「贅塚」は、合宿地から歩いて二、三十分のところにある小高い丘で、晴れた日には頂上から阿蘇五岳が美しく見える。班ごとに、稲田の中の小道を赤トンボを追ひながら、楽しく語りひながら、「贅塚」を目指した。ちやうど頂上に到着する頃から小雨が降りだし、雨具を持たない参加者は雨に濡れてしまったが、記念撮影に歓声を上げる班もあった。阿蘇五岳にもあいにく雲が掛かってしまひ、その雄大な山容を眺めることはできなかったが、眼下に広がる青田に時折雲間から日が差す美しい眺めに、しばしはやかな一時を過ごした。合宿地に戻った参加者は、散策の折りに心にとどめた情

景を、またこれまでの日程の中で心揺さぶられたことを思ひ起こし、短歌創作に余念がなかった。

講話 「若き友らへ語りかける言葉——極く当り前の日本人に私はなりたい」

(社)国民文化研究会常務理事兼事務局長 長内俊平 先生



なのです」と語られた。

慰霊祭



山口秀範氏（大成建設勤務）は映像や音楽を用ひながら慰霊祭の意義と形式を説明された。その後参加者は屋外の広場に設けられた祭場に整列し、慰霊祭が厳粛に執り行はれた。三井甲之先生の和歌「ますらをのকাশきいのちつみかさねつみかさねまもるやまとしまねを」が朗詠され、お祓ひの後、警蹕の声と共に一同最敬礼にて御霊をお迎へした。献饌の後、澤部壽孫氏（日商岩井勤務）の祭文奏上、長内俊平先生の御製拝誦と続き、小田村寅二郎先生（本会理事長）の玉串奉奠と共に一同御霊に対し礼拝ののち、「海ゆかば」を斉唱した。撤饌の後、再び警蹕の声と共に、一同最敬礼を以て御霊をお送りした。英霊の涙雨であらうか、ほんの一時雨が落

ちてきたが、慰霊祭は滞りなく終了した。以下に、そのとき奏上された「祭文」と拝誦された「御製」掲げる。

祭文

われらここ火の国阿蘇の秀峰連山の麓に集ひ 第四十一回全国学生青年合宿教室を営みて中日の夜を迎へぬ 今し天つ日は沈みて 夕風そよぐこの合宿地のさやけき草原を祭場と定め きよめまつりて とこしへにみ国守ります遠つみ祖たち またみ国のために尊きいのちを捧げましし あまたのはらからのみ霊を招きまつりなくさめまつらむと み祭り仕へまつらむとす

願れば過ぎし大御軍の敗れし時に 米国の占領政策がもたらせし東京裁判史観による日本の文化伝統の否定の始りし時より 米国の行く末いよいよ激しく危ふき道を行かむとするに ひとへに 昭和天皇 今上天皇の御聖徳に導かれみ国の生命は守られて来ぬ

しかれどもまことに口惜しきことに おぞましき自虐史観は教育界を初めとして 官界 財界等全国津々浦々にまではびこり 日本の教育 外交 国防等に憂ふべき嘆かふべきこと打ち重なりみ国を危ふき道に立たしむる様に 胸ふたがれ憂ひかへりみしめらるる

さはあれど四十一年の年をかさねしこの合宿教室に集ひて 諸講義に耳を傾け 天皇の大御歌あるいは古典の言の葉を仰ぎ ひたすらにみ国の守りを乞ひのみまつり 老いも若きももろ共に心を鍛へ言葉を修め日本文化の良き伝統を学び共に世に立つべき友となりなむと 朝夕につとめはげむさまをみそなはし給へ

畏かれどもいましみこと達のみたまの大き導きにより 米国の行手を守らせ給へと この合宿教室参加者一同に代はり

謹み敬ひ恐み恐みも白す

澤部 壽孫

明治天皇御製

秋夜

いにしへの人のいさををかたりいでぬものしづかなる秋の夜長に

詞

言の葉のみにこころのすすむ日はひとりありてもたのしかりけり

学問

事しげき世にたたぬまに人は皆まなびの道に励めとぞ思ふ

をりにふれたる

思ふこと貫かむ世をまつほどの月日は畏きものにぞありける

くのためにたふれし人をきくたびにおやの心ぞおもひやらるる

くのために身をも心もくだきぬる人のいさををたづねもらすな

昭和天皇御製

日御碕にて

秋の果の碕みさきの浜のみやしろにをろがみ祈る世のたひらぎを

旅

遠つおやのしろしめしたる大和路の歴史をしのびけふも旅ゆく

木

わが國のたちなほり来し年々にあけぼの杉の木はのびにけり

伊豆須崎の春

みわたせば春の夜の海うつくしくいかつり舟のひかりかがやく

今上天皇御製

平和の礎いし

沖繩のいくさに失せし人の名をあまねく刻み碑は並み立てり

苗

山荒れし戦の後の年々に苗木植ゑこし人のしのばる

講義 「人の心を種として」

元・日特金属工業(株)常務取締役・国民文化研究会顧問 加納 祐五 先生



先生は、まづ、戦前から現在の合宿教室に至る本会の長い営みを貫く希ひは「心」を守らうといふことに外ならなかった、とされ、ドイツの学者L・クラージェスの所説に従って「精神(理知)」と対比しつつ「心」の特性を明かされた。即ち、「精神が自分と他者とを切り離し、他者を対象としてはつきりとつかまうとするのに対して、心は自分と他者を親しく結ぶものであり、心が通ひ合ったときに生きてゐるといふ実感—いのち—が感じられる。今日では精神が肥大し、心は失はれつつある」と指摘された。

先生は、心を中心に日本の伝統に話を進められ、「やまと歌は、人の心を種として、よろづの言の葉とぞなれりける」の一文に始まる紀貫之の「古今和歌集・假名序」を紹介されて、紀貫之の歌の道を興さうとする願ひもクラージェスの言ふ「心」を守り伝へんとする志に外ならなかったことを明らかにされた。

次いで、先生は、和歌を日本の道(しきしまの道)と認識された後鳥羽天皇を始めとして、歴代天皇の御製を次々に読み上げられ、国民を思はれる天皇の御心を偲ばれて、「御製に示される通り、日本の皇室は厳めしいものといふより、国民と密接に親しく結びついたものです。万葉集の『大君の辺にこそ死なぬ』といふ言葉は、天皇のために死ぬべきといふ道徳を説いたものではなく、天皇への親しみの感情を述べたものです。それが日本の心です」と述べられた。

さらに、先生は、小林秀雄氏の「文学と自分」の一節を引用され、「胸中の温気」とは心を働かせることだ。クラージェスが言ふやうに、精神とは彫刻家が持つ鑿のやうなもので、心に描いた姿がないまま鑿を振るっても大理石は粉々に砕け散る。

心があつてこそ精神も生きるのです」と語られた。

最後に、最近の日本を巡る問題に言及して「謝罪外交は困ったことだが、一方で戦争で支那の人に気の毒なことをしたといふ日本人の気持ちは尊いものであり、忘れるべきではない」と指摘され、「阪神大震災の時に現れたやうに、日本人の心を大切にする伝統は国民の中に必ず生きてゐる。我々だけが日本のことを考へてゐると思ふのは傲慢です」と締めくくられた。

創作短歌全体批評

熊本市役所 折田豊生 先生



先生はまづ、短歌をつくる上で何故批評が必要であるかを説明された。その中で、言葉を整へることが心を整へることにつながり、歌をつくるのと同じ様に批評することは大切だと話された。そして、各班から一首づつ取り上げられ、オーバーな表現や文法上の間違ひ等を、時には会場から笑ひを誘ふやうな冗談も交へながら、丁寧に添削していかれた。また、和歌をつくる上での留意点として、自然な話しぶりを文語体で詠むこと、漢語よりも大和言葉を使ふこと、和歌を詠むにふさはしい素材を選ぶこと等を、批評の中で具体的に説明していかれた。和やかな雰囲気の中にも、状況を端的に詠んでいかれる先生の批評に、身の引き締まる思ひがした。最後に、班別相互批評に当って、「お互ひに作者の気持ちを正しく汲み取る努力をしてほしい」、「作者の元の表現をできるだけ尊重してほしい」といふことを述べられ、心の通ひ合ふ相互批評を行つて下さいと話しを結ばれた。

全体批判の後、班別短歌相互批評が行はれた。各班毎に全員が班員一人一人の歌に心を寄せて思ひを述べ合ふ中から、自分の感動を

素直に正確に表現した素晴らしい短歌が生まれていった。お互ひの心が通ひ合ふ充実した一時であった。

夜の集ひ

厳しい日程を送ってきた合宿教室も最後の夜を迎へ、「夜の集ひ」の時間がやってきた。

最初に小田村寅二郎先生の音頭により、坂東一男先輩(株)アサヒビール飲料常務取締役)から今年も届けられたビールで乾杯し、班別・大学別に楽しい出し物が続いた。合宿期間中の出来事をユーモラスに演じたり、昔話を国の訛で演じた寸劇、「教育勅語」の暗誦、母校の校歌を学生・OB共に肩を組み高らかに歌ふグループなど、趣向を凝らした出し物に場内は時に爆笑に包まれた。最後に宝辺正久先生(社)国民文化研究会副理事長)より「神洲不滅」と「進めこの道」のご説明があり、国民文化研究会の会員が唱和し、宴が閉じられた。

第五日

(八月六日・火曜日)

合宿を顧みて

合宿運営委員長・福岡県立春日高校教諭 與 島 誠 央 氏

氏は「今年、特に体調を崩される方が少なく、夜の集ひも充実してゐたと思ひます。各班での生活や討論が生き生きしてゐたからだと思います。残された時間はわづかとなりましたが、話の内容よりも、話しぶりに注目してもう一度班員に向き合つてみて下さい」と語りかけられた。また合宿を通して、「自分の心が懐かしいところに帰つてゆきたくなる」と、お母さんとの思ひ出を語られた。そして、加納先生が引用された御製を読み上げられ、「わが子をいつくしむ親心に何と満ちあふれてゐるのでせうか」と語られた。最後に、合宿開催を参加者に感謝され、話を閉ぢられた。



参加者感想自由発表

参加者の合宿終了直前の思ひが披瀝された。講義から「自分は特別な人間だと思ふな、との加納先生のお話にも、自分にも存在する思ひを感じた。決着はしてゐないが今後も考へて行きたい」、和歌創作の体験より「作らうと思つてもできなくてあきらめかけたが、まはりの方々の声と班員のおかげでやつとできた」、短歌相互批評では「すごくショックを受けたが物事を頭で捕へる癖がついてゐる自分を発見した」、また、班別研修で「宝辺先生の涙ながらに戦友のことを話される姿に感動した」「頭・心・体の三つのわかり方を長内先生に教へていただいた。出発点は心でわかる事だと思つた」「普段では学べないことが学べ、発見できた。自分をさらけ出す事によつて心が通じあふ体験、聞かうとしてくれてゐる友があるといふ事、さういふ出会ひをまた求めたい」と次々に登壇され述べられていく。「先生方の御製を拝誦する姿に感銘を受けた」「まごころを学んだ」「極当り前の日本人になりたい」「出会へた友とは、生涯のつきあひである事を信じて疑はない。来年また会はう」など、うごめく心のままに二十名余の方々の発表がなされた。

閉会式

国歌斉唱の後、参加者を代表して早稲田大学教育学部四年の伊藤佳恵さんが「この合宿で日本の美しいものをたくさん学ばせていただき、日本が大好きになりました」と語つた。続いて主催者を代表して国民文化研究会副理事長の上村和男先生は、明治天皇御製「よき友にまじはりてこそおのづから人の心も高くなりけれ」を紹介され「合宿中に抱いた様々な疑問や思ひを心の中で育んで、友と心を開いて語り合ふ中から自分自身で説明していただく。それが国を存続させていく私達の務めだと思ふ」と挨拶された。

次に「神洲不滅」と「進めこの道」を全員で唱和した後、駒沢大学経済学部一年の小早川武徳君が「閉会宣言」を行ひ、合宿教室は無事全日程を終了した。

助言者の紹介

拓殖大学 総長

尚綱学園 監事

日商岩井(株) ガス・石炭本部 副本部長

(株)講談社 宣伝局次長兼宣伝企画部長

神奈川県立厚木南高等学校 教諭

中島法律事務所 弁護士

福岡県立嘉穂高等学校 教諭

亜細亜大学 教授(文学博士)

熊本県立第二高等学校 教諭

(株)中央塩ビ製作所 代表取締役会長

不動産鑑定士

舞岡八幡宮 宮司

福岡県民教育協議会 事務局長

高千穂商科大学 講師

元・佐賀県立佐賀商業高等学校 教諭

浄土真宗本願寺派 光隆寺 僧侶

元サンデン交通(株) 取締役

航空自衛隊航空教育隊生徒隊 教諭

乃木神社 宮司

拓殖大学外国語学部英米語学科 教授

(株)BBS金明 代表取締役

(社)福岡県中小企業経営者協会 副会長

亜細亜大学 就職課 就職課長

小田村四郎

徳永 正巳

澤部 壽孫

磯貝 保博

山内 健生

中島 繁樹

小野 吉宣

東中野修道

白濱 裕

星野 貢

松吉 基順

關 正臣

小林 國男

名越三荒之助

末次 祐司

岡棟 猛

加藤 善之

村上 寿彦

松吉 宣和

松本 幹男

中田 一義

小早川明德

山田 健一

(株)講談社 校閲局校閲第三部 部長

伊佐ホームズ(株) 取締役社長

熊本県立球磨農業高等学校 教諭

大牟田市立橋中学校 教諭

久留米大学附設高等学校 教諭

亜細亜大学 廣報課

福岡県立水産高等学校 海洋科 教諭

福岡大学医学部精神医学教室

北九州市立八幡病院 診療放射線技師

羽後信用金庫 湯沢支店 係長

日産自動車(株) 宇宙航空事業部営業部

拓殖大学 秘書室

(株)日立製作所 日立研究所 エネルギー第一部

日章工業(株) 専務取締役

出光興産(株) 店主室

タマポリ(株) ラミネート営業部

熊本製粉(株) 住宅事業部

尚綱高等学校 教諭

安信住宅販売(株) 新宿センター 係長

熊本県立菊池高等学校 教諭

熊本県立天草高等学校 教諭

鹿児島市役所 企画部企画調整課

(株)新井組 千葉営業所

熊本市立西原中学校 教諭

藤井 貢

伊佐 裕

田之上正明

西原 正博

名和 長泰

平楨 明人

菅原 亨二

古井 博明

森田 仁士

須田 清文

内海 勝彦

服部 朋秋

松井 哲也

藤新 成信

山田 幸治

吉川 理夫

吉村 浩之

大塚 千春

松吉 基光

川上 良尚

今村 武人

有村 浩明

垣迫 太市

山方富美子

神奈川県立津久井高等学校 教諭

熊本地方事務局 登記部門

千葉県庁環境部環境調整課

熊本県立宇土高等学校 教諭

八代郡泉村立泉中学校 教諭

慶応大学大学院 政策メディア研究所

(株)PKKコンピュータサービス

大牟田公共職業安定所 企画情報部門

尚綱短期大学 講師

中央大学大学院文学研究科

日本を守る愛知県民会議

(株)神戸製鋼所 資材部

(株)東芝 製造システム営業部

アプライド マテリアルズ ジャパン(株)

日本青年協議会 学生局

高知市立城北中学校 教諭

コロンビア学院

合宿運営委員 與島 誠央・吉村 浩之・北村 公一

指揮班 久保田 真・西山 博文・垣迫 太市

草野 直樹

事務局 徳田 恒稔・名和 長泰・西原 正博

古川 広治・秋山 信之・寺岡 伸純

蘇原 幸枝・大島 啓子(本会職員)

大日方 学

徳田 恒稔

秋山 信之

久保田 真

坂本 太郎

西山 博文

寺岡 伸純

古川 広治

武内 倫子

土井 郁磨

清水久仁子

北村 公一

丹羽冬紀子

草野 直樹

松岡 篤志

中川つぐみ

レイイン安希子

北岡 剛・青山 直篤

福岡県立三池高等学校二年 篠原喜美子

西原 葉子

放送・記録班 森田 仁士・松吉 基光

医務班 古井 博明

写真班 田上富実子

走り書きの感想文集

（各別
に収録）



これは閉会間ぎはの一時間余で参加者全員に、四泊五日間の感想を走り書きで書いてもらったものです。「仮名遣ひ」は原文のまま掲載してあります。

なほ、各人の感想文の末尾に小さい活字で載せられてゐる和歌は、この感想文とともに提出された第二回目のものです。

第一班—男子学生—

真心にいのちを感じた

(亜細亜大学 法 三年 黒須武士)

私は、今回は三度目の参加ですが、最も感じたことは真心です。合宿前入院してゐましたが「足の具合はどうですか」と皆様からお声を掛けて頂きました。その都度私は、心から有難い事だと思ひました。

加納先生は御講義の中で「心が通ひ合った時にいのちを感じる」とおっしゃいました。私には「いのちを感じる」といふ事が、その時はピンと来なかつたのですが、今思ひ返せば私を心配して下さった方々の真心の中に、私は「いのち」を感じてゐたのではないかと思ひます。

沢山の友と知り合へた事を心から嬉しく思ひます。私は生涯の付き合ひになる事を信じて疑ひません。

服部泰子さんに(全体感想発表)

壇上で涙ながらに嬉してふ君の胸内の喜びやいかに

生きていく姿勢を教えられた

(拓殖大学 外国語 四年 小林広幸)

私がこの合宿で一番強く感じたことは、社会に出て必要な生きていく姿勢を教えられたことです。

社会には、正しいことも間違つたこともあります。そこで、その選択を間違わず常に正しいことを見極めていこうとなければ、結局私達は間違つた、文化の退廃した世界を作つてしまふだらうと思ひます。

私は、この合宿で教えられた「心を働かす」ということを心に刻んで、これからの人生を歩んでいきたいと思ひます。

一生は人と人の出逢ひから新しいいのち始まる思ひす

歴代天皇に親しみを持つた

(獨協大学 外国語 三年 齋藤章浩)

私は、この合宿で心から発した言葉に多く出会つた。そして、自分が心を開いて話すことの大切さを学んだ。それは私にとつては難かしいことではあるが、心を開いていなければ何事も見えて来ないと思つた。

先生方の御講義を聞いて、合宿前よりも日本を自分に引き寄せて考えられるようになった。また、親しみをもちて見れるようになった。そして、歴代天皇の御製を拝読して天皇に今までにない親しみを持つことができるようになった。

私はこの合宿で学んだ生きた言葉を自分で育てていきたい。

大阿蘇の大なる自然を眺むれば疲れし心を癒さるる心地す

一人でも多くの人に伝えたい

(九州大学 経 一年 石井英俊)

私がこの合宿で最も良かったと感じているのは、多くの友ができたことです。又、先生方の講義はどれも大変すばらしいものでした。今、私が強く感じているのは、ここで聞いた話を、自分が感動したことを、一人でも多くの人に伝えていきたいということです。松陰先生の御言葉に「真に憂ふる者は必ず為す所あり」というのがありました。伊藤先生の語られた様に、本当に今日本は危機にあると思います。自分達には、いきなり国全体を動かすような事は出来ないけれど、今回学んだことを伝えていくという小さなことからでも、祖国の為に何かしていきたいと思います。私は信じています。小さなことかもしれないけれども、自分達がこの国を変えていくのだ、守っていくのだということを。

各地より集ひ来たりし友とちと共に励まむ別れし後も

第二班 男子学生

頭を使うだけではできないものがある

(亜細亜大学 法 二年 木内博一)

何もかもが新鮮で、何事に対しても本気で考えることができた五日間だった。今までの私は、既存の知識や観念で物事

カメラ・レポート1



開会式。主催者を代表して、社団法人文化研究会理事長・小田村寅二郎先生が「戦後に生じた“時代の断層”を乗り越え、日本の文化・伝統について己の内面を語り合へる場をつくることが、合宿教室の目標である」と挨拶された。

を客観視し、それ自体のもつ美しさやすばらしさを知ることができなかった。でも、世の中には、頭を使うだけではできないものがあることが分かった。それが日本の文化であり、伝統だ。特に短歌は“心”を使い、自分の感じたことを飾らず素直に表現しなければ決して良いものがない。

多くの先生方の御講義などを聞き、それについて友達と本気で語り合うことで、物事のすばらしさ、人の心の奥深さを知ることができた。また、その事から、今まで見えてこなかったものが見えてくるようになってきた。

阿蘇の地に集ひ語りし友どちの言葉を胸に我は帰らん

今の私はとても満ち足りている

(成蹊大学 文 一年 中西正史)

合宿に来て本当によかった。様々な先生方のお話が聞け、学校とは違った友達ができ、本当に得難い経験をした。

自分が一番感じたのは心ということである。心は我々が生まれつき有しているものであるが、我々は普段実感しない。または、その感情を押し殺している。人間は心というものがないと、本当の自分分らないで終わってしまう。

私の場合も、自分のちっぽけなプライドと知識に邪魔されて、本当の自分分らないでいた。だから自分独自の意見を持つて、一般的に差し障りのない言葉で話し、分かったよいうなふりをしてきた。そんな自分を振り返ると自分ってかわいそうだったのだなあと思った。今の私はとても満ち足りてい

て幸せです。これから生きる意志が湧いてきました。

全体感想発表にて

話さんと勇氣ふるひて演壇に登りて話せば心すがし

友となれた喜び

(福井工業大学 工 三年 増村博文)

今回で三度目の参加となった合宿教室だが、三度とも、それぞれ大きく感動を受け、又、考へさせられた。

特に、長内先生の御講話は、毎年、知ってゐるやうで知らない、出来てゐるやうで出来てゐないことをズバリと、御指摘され、情熱的に御話し下さる事に心を打たれ、自分自身を深く考へる事が出来た。

又、本年度は班長となり、非常に不安な日々を送った。身の引きしまる、それでゐて恐怖に似た何とも言へない感情で、数倍の力を使った気がした。しかしながら、班員の皆と班付の先生方のおかげで無事班長を勤め、友となれた事は、この上ない喜びであり、自身への成長の糧となったと信ずる。

感想を文に書かんと欲すれど気持ち表はず言葉浮かばず

ちよつとだけ自分が変わった

(ライセンススカレッジ 二年 江口信一郎)

合宿の初日、初めの講義を聞いたあとと班別で話をしていて大変だと思った。僕はそういうことをあまり知らないの、思っていることもいえなかった。その夜、明日になったら帰

ろうと思っていた。だけど一晩寝て、二日目の朝の講義はうけてみようかと思つてうけて、班別でも人の話を聞くだけでもいいかと思つてみると、なんだか自分がふっきれたような気がした。班の人もとてもいい人たちはばかりで頭もよかった。自分の思っていることをいえなくても、皆が聞いてくれるので話すことができた。すこしうれしかった。

この合宿にきて、自分がちよつとだけかわつたような気がしている。出会った友達にありがとうと言いたい。

合宿で出会ひし友がわがことをはげましくれるはうれしかりけり

素直に生きる事は本当に難しい

(早稲田大学 二文 一年 浦 義勝)

人に言われて気付いた事がある。「君、実は、本当の友が欲しいだけではないのか?」「……」心にズキンと突き刺さった。ずばりその通りだったのかもしれない。長い間、心の友と呼べる存在を見失つてしまつていた自分、孤立感に打ち拉^ひがれた浪人時代、大学の広いキャンパスの大隈侯の前でポツンと佇^{たず}むきのうまでの自分、……でも、それにもかかわらず実は、自分の方で心を閉ざしていたのだ。ひとは生きていく上において、自分の本心とは裏腹の事をしてしまつている事が多々あるものだ。素直に生きる事は本当に難しい。難しいけれど本来誰もが出来ていた事なのだ。

ありのままの心に返ればそれでいいのだ。この合宿に参加する条件は、その一つだけなのだ。



「心を開いて語り合ひ、本当に惚れることのできる人と出会ひませう」と参加者を代表して呼びかける京都大学総合人間学部三年・庭本秀一郎君。

友びとにあまた求めし我なれど心閉させしは我にてありき

第三班—男子学生—

これからも頑張つて勉強しようと思つた

(島根大学 理 二年 新宮 一)

二日目の伊藤先生の御講義の質疑応答時に、今何をすべきかという質問に対し先生の経験を話され、今の勉強をしつかりやつていつて、とにかく継続することが大切だと言われたことが印象に残つた。勉強を通じて正しいもの、信じられるものを自分のうちに貯えていくことだなと僕なりに思つた。

四日目は、加納先生のお話、和歌相互批評、最後の班別研修での班員の体験をふまえた意見を聞き、結局行き着く所は心や感動、喜びといった問題なんだなあとおぼろげながら感じ、ほっとしたというか、心が安らぐ心地になつた。御製を通し、天皇陛下の御心に近づくことができたのも良かったと思ふ。

他の合宿と違って、本当に全国各地から人が集まって、いろいろな人の存在を知り、考えを知ることができて本当に良かったと思う。この合宿が終わつてからが本当の自分としての合宿だと思う。だから頑張ろうと思う。

四日間共に過ごせし友らとの別れ近づき寂しき覚ゆ

人と人との繋がりを大切にしたい

(亜細亜大学 経 一年 岸上雅之)

この合宿で経験し学んだものはたくさんありました。中でも印象深いのは「人と人との繋がりを」のことでした。具体的に申しますと、私がこの合宿に参加しているのは学内で比較文化研究会に所属しているからであります、さかのほればこの大学に入学した御縁から来ているものと思います。この御縁を大切に合宿で班別研修をしてきたことは、自分にとって相手の話を聴くとか相手の意見に素直に答えるという努力をいっそう大切にする結果に繋がつたのではないかと思います。

この合宿では様々な本場に一言では言い尽くせないこと、特に今後の学生生活を送つてゆく中で真剣に考えていかなければならないことを心に刻みました。この四泊五日で学んだことをこれから自分のこととして考え、勉学に励み、自己を友をそして日本を高めてゆきたいと考えております。

来年もぜひ合宿で学びたい

(東京大学 文 三年 東中野多聞)

この合宿はたいへん楽しく、また勉強になりました。僕自身また来年参加したいし、多くの人に参加してもらいたいと思います。

第三班は問題意識の高い人達から成る班で、大変刺激を受け、どれ程自分にとってプラスになったかはかりしれません。

講義の方も楽しかったです。来年は渡部昇一、藤岡信勝、北岡伸一といった方の話が聞きたいです。

来年は東大生を何人か連れてこれる様努力します。

楽しかりし時を思へばいまま少し友との別れを引きのほしたし

班長として大変だったが貴重な体験をした

(京都大学 総合人間 三年 庭本秀一郎)

はじめの班長でした。予想外に大変でした。しかし、合宿中の生活や班別研修の際に、班員に助けられたことが大きな救いでした。何とかこの合宿を無事に終えようとしている今、ほっとしています。

今回の合宿では、自分でも驚くほど講義に対して集中力を欠いてしまいました。自分は心を磨く努力が足りなかったのだろうか、どうして講義中にこんなに睡魔がおそってくるのだろうかと思うと、悔しくて仕方がありませんでした。講義中に、その後の班別研修をどう運営しようかと考えたりすると、ますます講義に集中できず、班別研修もうまくいかないという悪循環をくり返しました。

しかし班で話をしているうちに、やはり冷めている自分や偏屈な自分に打ち勝ち、それを乗り越えていかねばならない。そしてそのためには、今、自分を支えてくれている人たちを大切にしていくなのだということを改めて確認しました。

これからも、自分に素直でいられるように、自分とのたた



合宿運営委員長の與島誠史氏が、四泊五日間の研修を過ごす上での心得を述べた。

かいを続けていかねばならないと思います。

この合宿に参加できて、しかも班長という貴重な体験をさせていただいたことに感謝しています。ありがとうございます。ありがとうございました。

加納先生のお話が心に残った

(早稲田大学 政経 四年 田中裕一)

この合宿に四たび出させて戴きましたが、今回特に心に残りましたのは、加納祐五先生のお言葉でございました。ご講義の冒頭、「我々の歩みこし道は『心を守る戦い』であった」と仰りました。実に至言であると思ひます。

海ゆかば水漬く屍山ゆかば草むす屍大君の辺にこそ死なめかへりみはせじ

海路にあつても山路にあつても「大君の辺にこそ死なめかへりみせはせじ」と絶唱なさった先人の方々。大君のおそば近くでまことをつくし申し上げ、大君のおそばで息絶えたいと云ふ、親しみの気持のあらはれであると加納先生はご指摘なされました。「大君の為」ではなく、「大君の辺にこそ」と言はれた先人のお心を拝察しますと、海にも山にも、吾が心の内にも大君のあたゝかきお姿があり、厳しきご境遇にあられながらも、安んじて征かれたと思はれます。

和歌創作について思ひて詠める

我が心くぐもり煩ふことあらばその都度歌を詠まむと決めぬ

時おかず思ひのたけをつづりなば心晴れゆかむその歌と共に

第四班 男子学生

語り合う楽しみ

(防衛大学校 二年 城尾和彦)

合宿時の生活は、本校の生活と比べると非常に緩やかであった。講義に関して、当初予想していたのとは異なり、知より情に訴える内容が主で、抵抗なく入ってゆけたが、内容面でわからないところもあつた。班別研修では、班員と打ち解けて忌憚なく話が出来るようになってからは、時間が足りないと思われた。その盛り上がりも最高潮に達した短歌の相互批評に於ては、皆、真剣に班友の歌を磨き上げようと努力しており、実に有意義な時間であつた。

最後の夜にいささか度を越して議論を行い、関係者に迷惑を掛けたが、このように真面目なことを夜中まで語り合うことは、学校に於いてもなかなかできることではなく、この合宿に参加して得られた最大のプラスであつた。

五日間友らと過ごせし学び舎を後にし帰らん人混みの中へ

熱き心を養ひたい

(熊本県立天草高校教諭 今村武人 35歳)

今回二度目の班長をさせて頂きました。前回同様、初めのうちは班員の興味・関心が何処にあるのか分らず、オロオロ

しましたが、時が経つにつれ、班員同士が打ち解け合ひ、講義に対する質問・感想など自然と、しかも真面目な言葉で語ってくれました。その時私は、安堵すると同時に班員諸君の真摯な態度に胸を打たれました。私は始め、進行はどうしたら良いか、小賢しいことを考へてゐましたが、自づと心は通じてゆくものだと改めて思つた次第です。

四班は夜の集ひで寸劇をしました。このことについて與島運営委員長が、「出し物がうまかつたのは、四日間の班別研修が充実してゐるからだ」と評して頂きました。班員の皆さんに感謝すると同時に、「熱き心」を養つていきたいと思ふ。

をちこちゆ集ひて語りし友とちとしばしの別れさみしと思ふ

互いに考えを深め合う喜び

(亜細亜大学 法 一年 神澤 徹)

私は合宿に参加するまで、四泊五日の厳しい日程を最後までやり通せるのか、全く知らない人達と話ができるのだろうか、大きな不安を抱いていました。しかし、先生方の御講義は大変興味深いものばかりでしたし、班の人たちとも最初から話ができ、それまでの不安はすぐに取り除かれました。

ところで、一番私の心に残っていることは、班の人全員で一つの疑問や稚拙な意見でも一生懸命に考え合つたということです。このことは大変意義深いことだと思ひます。私にとつて今まで経験したことのないことで、自分の人生において大きくプラスになると思ひます。



合宿導入講義。福岡県立門司高校教諭・坂口秀俊先生は「真の生きる力とは、自国の歴史、文化伝統への誇りを持つことから生まれてくるのではないか」と述べられ、歴史を正確に見直す必要性を指摘された。

ここでの出会いを今後の糧とし、これからもずっと大切にしていきたいと思えます。

遠近ゆ集ひし友と懸命に学ぶ楽しさ覚え初めけり

成長を感じた五日間

（駒沢大学 経 一年 小早川武徳）

私が合宿に参加して思ったことは「国のことを思う友が近くにいることは幸せなことだ」ということです。初参加の私がかこまで言うとは参加前では考えられないことでした。この合宿は自分で自分が変わっていくのがわかるくらいです。例えば、講義を受け、問題提起をされてから考えるという受け身の姿勢から、自分から疑問を見だし、師や友に聞くという積極的な姿勢になったことです。これは自分にとって大きな前進でした。

しかし、まだ先生方の考えを理解できてはいません。でもいつか心の中で、この日本はどうなるべきか、考えも形成されてくると思えます。合宿で学んだ日本人の文化や心の尊さを大事にし、これからの学生生活に役立てようと思えます。

敷島の土を踏みしめ立つ我は先人をしのびて今を生きまむ

日本人の心の在り方を学ぶ

（宮崎大学 教 三年 伊東讓二）

この合宿中に、幾つかの御講義を受けさせて頂きましたが、中でも竹本先生、加納先生の御話に大変感銘を受けました。

まず、竹本先生は、日本が誇りと伝統を完全なる形で戦後体制から回復することは、日本のみならず、他の国々でも強く望まれている事であり、意義ある事と話されました。私はこの話を聴き、非常に強い自信が湧いてきました。又、加納先生からは、戦前の日本人の生き方に誇りを持つ事と、戦場となった国々やその国民に対するいたわりの心は日本人そのものの心を表わしている事を聴き、非常に嬉しく思いました。恩を忘れず、誰にでも優しく、そして何より自分は日本とその伝統に対する誇りを忘れない日本人になりたいと思いません。

数日間心通はせ語りしはかけがへの無き生涯の友

自分の言葉を求めて

（日本大学 通信教育 四年 石井信博）

昨年引き続き二回目の参加でした。今回は昨年とは違うものを得ることができたように思います。例えば、創作短歌の相互批評にしても自分の心で感じたことが少しずつ自分の言葉で言い表わせるようになったことに喜びを感じます。

四日目の夜の集いで私たちの班は、レクリエーション時の様子を劇にして発表しました。自作の短歌と併せて発表しました。人前で劇をしながら自分の短歌を発表することは、大変はずかしいものでした。しかし、あえて心を開き、勇気を出して挑戦したことは正解でした。

長内先生のお話の中で一番初めに「私の話は明治天皇御製

と黒上正一郎先生のご著書から学んだことと自分の体験から学んだことだけでですよ」と話されたことが一番印象的でした。

私は来年大学院への進学を希望しています。無事進学できましたら、是非また合宿に参加させて頂き、何かしら貢献させて頂けるよう、又一年研鑽を積んでゆきます。

友どちと心を一つに出し物を考へせしは楽しみりけり

「真心」について学ぶ

(日本大学 農獣医 四年 安東高明)

初めて参加した時、知識と心の区別がつけず悩みましたが、友と本当に心が通じ合えたときは、何ものにも代え難い喜びを感じ、今回で三度の参加となりました。

今回は特に「真心」とは何か、「知識に基づく言葉」と「心からの言葉」の違いについて大変考えさせられました。長内先生は御講義の中で「本当に共生を体感している人は、初夏の頃、カッコウが鳴かなくておろおろする様な人である」とおっしゃったとき、私は愕然とし、反省させられました。

「正義」「人道」「使命」などの言葉を口に出す前に、自分が自然を体感し、心から行動しなくてはならないことを学ばせて頂きました。

自らの言の葉持ちたしと思ひつつ研鑽積みけりこの一年は

カメラ・レポート5



合宿教室の一日は「朝の集ひ」から始まる。阿蘇のさはやかな空気を胸一杯に吸ってラジオ体操。

第五班 男子学生

合宿で学んだ一番の基本

(同志社大学 商 一年 服部源樹)

私は正直なところ、普段の生活はかなりちゃらんぼらんぼ人間です。そして普段はどうしても安易な方へ、楽な方へと流れてしまいがちです。例えば、電車に乗っていて、自分は何とはなしに座っています。そこに荷物を抱えていかにも疲れた御老人が現れたりした時でも、どうしても立ち上がる勇氣のなかつた人間です。人の目を気にして……。勿論、この話は直接今回の合宿には関係ありません。しかし、今回の合宿で学んだ一番の基本は、この様な日本人としてごく当たり前のはずだった「心の回復」だと今、合宿を終えて思いました。そして、こういう他の人々への一つ一つの小さな想いやりを持っていったのが、日本人というものであり、その中心者として常に国民の事をお思い下さっていた天皇陛下のご存在の神聖さという意味が、合宿を通して少しずつですけれど思えてきた気がします。

しかし、班別短歌相互批評で明らかになった様に、まだまだ頭で理解しようというくせがありますので、これからも怠る事なく和歌を詠んだりして心を磨いていきます。

本当に心動かすものだけを真直ぐに見つめ歌を作らん

見つけた最も大きな課題

(東京法律専門学校 二年 浜田和彦)

私は、今回の合宿は二度目の参加ですが、参加する度に様々な事を教えられます。今回は最初に諸注意で言われたように「聴く」と言う事を心がけました。そして、どんな疑問・話題であっても真剣に噛みしめるようにしました。すると今までどうでもいいと思うような事柄の一つ一つが本当は大切であり、それを考えてゆく事が、実は相手に対する思いやりや真心というものにつながっていくのではないかと、思えるようになりました。そして、今回の合宿で見つけた最も大きな課題は、自分は何事を語り、考えるにしても、常に知識の範囲を出て、感情や真心の域まで到達しなければならぬという事でした。特に班別研修で来られた宝辺正久先生が共に戦争に征き、亡くなられた友の事を涙ながらに語られる姿を見て、自分には先生のように国家や国民のことを自分のことのように思いやる心がないことが分かり、愕然としました。しかし、私は今合宿に自分自身のこれからの課題を見つけに来たわけですから、非常に有意義な体験をしたと思います。又、班員も皆、思いやりがあつて団結力もあつたと思います。班員、班長、班付に恵まれた価値ある合宿だつたと思います。本当にありがとうございます。

慰霊祭に参加して

国のため短かき命ささげられし若人のいたつき憶はれて来ぬ

真剣に聞き真剣に答えてくれた「人」

（鹿児島大学 農 三年 織地孝幸）

私は「人」に逢うためこの合宿に来ました。御講義して下さる「人」、班で語るであろう「人」、この合宿でどんな「人」に逢うのだろうかと楽しみにして来ました。ここには声を震わせ涙しながら話す「人」がたくさんいました。自分の思ったことを勇気を出して話した時真剣に聞き真剣に答えてくれた「人」がいました。また歌が出来ずに悩んでいる時、声をかけてくれる友や一緒に考えてくださる先生、陰ながら応援し、僕に行動させ、そして、その行動を褒め一緒に喜んでくださった先生。僕はこの方々と逢えたことを本当に嬉しく思います。人の「心」を大切にし、人の「心」を思い、その人のために行動できる「人達」がここにはいました。

班別短歌相互批評を終へて

先生の批評を聞くも三日目に歌のできぬをくやくと思ふ

もう一度歌を作らんと決意せど思ひ通りに歌の作れぬ

提出の時間となるも歌できず歌を作るをあきらめんとす

一度は歌を作るをあきらめど時間をもらひまた作らんとす

苦しむも周りの友にささへられ歌の出来しがなんとうれしき

西洋の王室について勘違ひをしてゐた

（熊本学園大学 商 四年 喜多村純）

今回の夏合宿では、竹本忠雄先生の御講義が最も印象に残

カメラ・レポート6



二日目の午前、日本政策研究センター所長・伊藤哲夫先生による「激動する東アジア情勢と日本——日本国憲法を再点検する」と題する御講義。先生は、「我が国は戦後の固定観念を批判できず、眼前の事実を目を伏せる。まさに『裸の王様憲法議論』をしてゐる」と指摘された後、朝鮮半島「有事」の場合の問題点、「大国・中国」への対応等を語ってゆかれた。

りました。現代のフランス国民が、王（ルイ十六世）を殺すことによつて、同時に神聖なものまで失つてしまつた歴史に對して深く後悔してゐるといふ事実を知つて、大変驚かされました。欧米人が天皇陛下を皇帝と勘違ひしてゐたと同様、私もまた、西洋の王室について勘違ひをしてゐたことに気が付きました。大変親近感を持ちました。ためになりました。

様々な疑問や悩みを持ちたれど自分を信じて我は行くなり

国民のつとめとして

（福岡大学 教員講座生 小森 誠）

国文研の合宿、それは時を越えた戦友会だと思ひました。なぜなら大東亜戦争を戦われた方々や、後に残された方々と御一緒に、共に学べるかけがえのない集いだと感じたからです。そして、戦死された友や英霊の方々のことを、涙ながらに語られる姿に胸打たれる思ひでした。慰霊祭もあり、そのような世代の方々と御一緒に参加できることは、本当に私の人生の中でかけがえのないものとなりました。しかし、同時に、この世代の方々が、お亡くなりになられるときが「いつかは来る」という当たり前のことを思つた時、私達若者が、私達の世代が、祖国に殉じた方々の御霊をお慰めせずして、誰がしようかという強い思ひに駆られました。時代を越えた、世代を越えた、「国民のつとめ」としての慰霊というものを深く自覚せずにはおれなかつた合宿でありました。

国のため殉じられたる方々の御霊祭りを阿蘇で行ふ

阿蘇の地を後にしてより過さず日も御霊と共に吾は生きまむ

素晴らしい班員に恵まれて

（泉村立泉中学校教諭 坂本太郎 31歳）

今回、初めての班長といふことで、果たして自分に務めることができるのだらうかといふ不安がありました。しかし、その不安は開会式の前にもう消えておきました。なぜなら班員一人ひとりが大きな声で私に、「こんにちは」と挨拶をしてくれたからです。その時に彼等とならこの四泊五日の合宿もなんとかやつてゆけると思ひました。実際、素晴らしい班員で、自分の思つてゐること、感じてゐることを素直に話してくれました。小森君、濱田君は普段からよく本を読まれてをり、ずいぶん班別討論の折には助けていただきました。織地君は、わからない所はわからないとよく聞き返してゐましたね。また、短歌創作ではくやしかつたんでせうね、夜遅くまで本当に頑張つてをられて、歌ができた時には私もうれしく思ひました。服部君は、温厚な性格がその話しぶりには感心させておますね。講義等のメモの取り方、記憶力には感心させられました。喜多村君は、一日遅れての参加でしたが、すぐ皆ととけ込んで話しを盛りあげてくれました。こんな素晴らしい班員に恵まれて、本当に有難いと思ひました。このつながりを大事にしていきたいですね。最後になりましたが、班付の菅原先生、川上先生には本当にお世話になりました。ありがとうございました。

壇上ゆ思ふがままに話しける班員見つづうれしく思ふ
一人また一人と前に登り立ち話す姿のありがたきかな

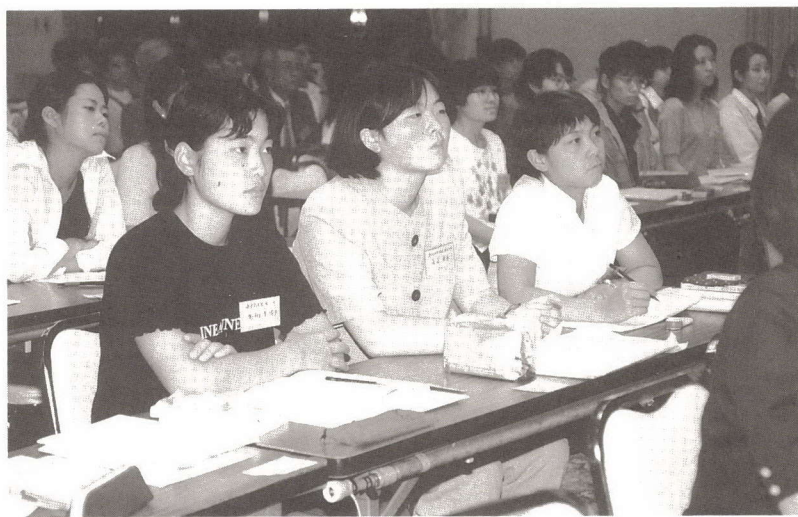
第六班—男子学生—

「敬ひ合ひ、助け合ふ」ことを実践したい

（日本大学 文理 一年 山内暁生）

今回、この合宿教室に初めて参加しました。参加したきっかけは、小さな頃より父から「大学生になったら、夏には合宿に行つてこい」と何度も何度も言はれて、「そこまで言ふのなら一度くらい行つてみよう」と思ひ参加した次第です。

実際に参加してみると、父があれ程熱心に参加をすすめた理由が分かったやうな気がします。僕がこの合宿において、一番心に残つたのは、長内俊平先生の御講話です。「敬ひ合ひ、助け合ひ、他人を思ひやり、同胞感情をもつことが、極く当り前の日本人の根幹をなすものである」といふ御言葉を聞いて、「心が洗はれるなあ」と思ひました。「敬ひ合ひ、助け合ひ」といふことは、本当に極く当り前のことです。が、この事を実践するにはどのやうにすればよいか、自分なりに考へてきました。その結論は、「他の人は、自分が何をすれば喜んでくれるのか」を考へながら他人に接すれば良いと思ひます。



心を集中して伊藤先生の御講義に聞き入る参加者。

ある夜更かしの晩に

友らとの別れを惜しみ語り合ひ厚木で会はうと皆誓ひ合ふ

感謝の気持ちをおぼれていた

(慶応義塾大学 総合政策 一年 松山聡一郎)

まず何よりも「ありがとうございます」そう言ってから始めたいと思います。「全体感想自由発表」の時、心から「ありがとうございます」と言っておられた参加者の方々を見てハッとさせられました。ああ基本をおぼれていた。そう感じました。そして横を見たとき、ようやく仲間の姿が見えました。私も「プライド」を持っていたのでしよう。これは人と人とのつながりを邪魔する嫌なものです。一步先きに行き、余裕のある立場から助言する人でなければ安心できないような所があったのだと思います。

この合宿は、心底有益なものでした。大きな糧となりました。日本の素晴らしさ、文化力、心から持ち望んでいたものを教えていただきました。宝辺正久先生が言っておられた、「自分の国の文化を信じる力、これこそが求められている。感動を頼りに、講師の先生方の一つ一つの言葉の意味を頼りに頑張りなさい」というお言葉を胸に、勉強していきたいと思えます。

複雑な思ひ抱きつつ旅路行くされど心にまづ「ありがとう」

人間の奥の深さに驚く

(ライセンスカレッジ 二年 高田信一)

近年にない充実した数日間でした。連日の班別研修においては、和やかさの中に厳格さを秘めた、白熱した討論を展開し、また懇談会の時間でも何気ない話から日本の教育の話に変わるなど、議論に明け暮れたと言つてもよい合宿になりました。

親とでさえも、これだけ語り合うという経験はありませんでした。そして、何より驚かされたのは、人間の奥の深さです。これだけ語り合った仲であるのに、最後の「全体感想自由発表」では、班員二名のどちらの話にも泣かされてしまいました。人の心に何があるのか、そしてどんな力があるのか考える時間を持つことができました。

言の葉に友といふ字は有りたれど心の友を我は知りたり

我が涙流す清き場与へける国文研と祖国に幸あれ

愛国の心持てるは我だけと思ふ傲慢気付かされけり

本当に美しい日本を感じた

(長崎大学 教 三年 本多康弘)

今回、私は初めての参加でしたが、改めて日本人として生まれ、日本人として生きていることに喜びを感じ、有難いなあと感じました。それは、天皇陛下の御製を拝唱した時に強く感じました。国民、国民と折りあることに詠まれている姿

は本当に祈られているようでした。また吉田松陰先生を始めとした先人の方々が、その大御心に励まされ、一体になろうと努力された姿に、本当に美しい日本を感じました。喜びも悲しみも日本という国全体で共有していた姿がありました。そのような精神のつながりの中から自らの生きがいや使命感を生み出していかれたのが日本人なのだと思います。今、私の中に最も欠けている、この同胞感を回復していく学びをこれからしていこうと思います。

また、加納祐五先生の御講義の中で、その温かく、何事にもまごころを尽していこうとする日本人の心が、政治的に思想的に利用されているということを言われ、本当に悲しく悔しい思いがしました。この事に関して宝辺正久先生は、「日本人一人一人が、どんなことがあっても信じ通すことのできる日本文化・歴史への信を持つことだ」と言われました。自分自身、しっかりとした日本への信を持って、社会に蔓延する「豊かな心を利用するもの」に処していきたいと思います。

「短歌全体批評」の折、我が班がほめられて

うれしさをかくしながらも微笑まる班長のをらるることのうれしき
お互ひに顔を見合はせほほみてる班員らの心一つなりける

加納先生の御講義をお聴きして

出征にあたりて先人は「はらからの情忘れじ」とふ詠みあげしかな
我もまたこの合宿で出会ひたる同胞と学ばむ我が日の本を

カメラ・レポート 8



講義の後は各班に戻り、講義のポイントを確かめ合ひながら感想や疑問を真剣に語り合ふ。

「真心」で人生を生きたい

(東京工科大学 工 三年 石澤 寛)

今回、合宿で一番感動したのは、日本人の心の美しさです。

明恵上人の月に語りかける姿、吉田松陰先生の国を愛する心と妹に宛てた手紙に溢れる愛情。天皇陛下の国民を、そして草や虫に至るまで愛される大御心。先生方の御講義を聞き、先人達が本当に清らかな心で生きていたのだと涙が溢れる思いがしました。私は、先人達がそうだったように「真心」で人生を生きたいと思い、真心とは一体何なのか必死に自分に問いかけました。そして班別研修では、友の語る言葉を聞くときは、友がどういう気持ちなのかを考え、自分が発言するときは、心の底からの言葉で語るようにしました。しかし、どこか自分の中に壁があり、本当の心を出すことができませんでした。しかし「全体感想自由発表」を開き、今までの合宿の毎日を思い起こしている内に、「実際には、こんなにも友の言葉に感動できる自分がいるのではないか。本当の真心とは、友が嬉しい時に、自分のことのように共に喜び、友が悲しい時には、一緒に悲しむような相手を思いやる心なのだ」と感じました。この大切な、大切な感動を忘れずに、多くの学友に日本の尊き美しい心を語り、共に感動し合うことを、自分は決意いたします。

先人の遺されし文に溢れたる大和心の美しきかな

親しげに言葉かけ合ふ友どちの触れ合ふ心の温きかな

合宿に来てよかつたと涙流し語る友らの心うれしも

自分は「当たり前前の日本人」になっているのか

(福岡大学 人文 四年 河野俊介)

今回初めて参加した合宿教室は、今迄参加したサークルの合宿と違って新鮮な気持ちで臨めたというのが正直なところです。伊藤哲夫先生の御講義をお聴きして、日本の政治家の考えている防衛面の甘さを知り、何故国際常識に沿った戦略防衛を行使しないのかと、防衛に関心があるため非常に悔しくも悲しくも感じました。慰霊祭では、小田村理事長の国難に殉じられた先人の皆様を一堂にお祭りなされる、お祭りなさらずにはおられないという御志が伝わって非常に感動しました。長内俊平先生の御講義の中で「当たり前前の日本人」という言葉を聴いて、私は自分自身が本当にそう言われているような日本人になっているのだろうか、己れの身を問う正されるような思いがしました。「短歌全体批評」では、自分の短歌が見事に指摘されてしまいました。折田豊生先生に、自分がこう詠みたいと考えている思いに近づけていただき、誠に感謝しております。最後となりましたが、初対面の方々

が快くあいさつする姿は、男性でも女性でも美しい。これも当たり前前の日本人の姿なのかと思うようになってきました。残りの学生生活は、まさに慶応三年の志士のように生きます。

会ふ人会ふ人にあいさつを交して詠む

会ふ人にあいさつを交してお互ひの心はもとよりさはやかなりけり

ひまあればあいさつされる人々と時間をかけてゆるりと話さむ

祖国日本への信を培ってゆきたい

（神奈川県立津久井高校 教諭 大日方学 33歳）

今回の合宿教室では、班長として班の中に入り、一参加者として原点に戻り、虚心になって先生方の御講義に、また班員の真摯な言葉に耳を傾けることができ、とても充実した生活を送ることができました。ただ運営にも若干携はってゐたため、班室を空けることも多く、班員の皆とじっくり語り合ふことができず、申し訳ない思ひがします。

加納先生の後の班別研修の折、宝辺正久先生のおっしゃった「祖国日本の文化と歴史に強い信を持つことが大切である」といふお言葉が心に残ってゐます。加納先生が歴代天皇の御製を絶句され涙を流されながら拝誦されたとき、先生のかなしき御心が私に伝はり、溢れる涙を抑へることができませんでした。歴代天皇の大御心を静かなお心でお偲びになられるその「一信海」に自分もつながらせていただいた思ひが致しました。自分の勉強は、この祖国への信を培ふことだと思つてをります。

與高誠史運営委員長の「合宿を顧みて」の折りに

壇上に立ちて参加者一同に顔みせ給へと先輩のたまひぬ

ほほゑみてこちら見らるる先輩に自づと涙の流れてやまず

人皆のわが身思はぬいたつきにこの合宿は支へられたり



二日目の午後、「明恵上人と現代の学問」と題して、神奈川県立百合丘高等学校校長・国武忠彦先生による歴史講義が行はれた。先生は、明恵上人が釈迦の呼びかける声にお答へたいと対象と一つになる主客融和する学問を実践されたことを示され、「対象との間に一定の距離を保って分析的に理解すれば宜しとする現代の学問のあり方に対する警鐘である」と述べられた。

第七班 男子学生

自分の感じたことを素直に言うことができた

(神奈川県大学 経 三年 和田一弥)

僕は今回初めての参加ということで、見ず知らずの人達とうまくやっていけるのか、そういう人達の中で自分の意見を素直に言うことができるのか、という不安がありました。一日目はさすがに戸惑いましたが、二日目からは言葉少なではありましたが、自分の意見、感じたことを素直に言うことができました。これは、班員全員がお互い面識がないにもかかわらず、腹をわって意見を出しあっている姿が、僕の気持ちを変化させ、すんなりとその輪に入っていたからだと思います。

この合宿で得たものは数多く、極端かもしれませんが、僕のこれからの人生の転機になったかもしれません。

合宿を終へて

財布みて帰る方法われ悩む電車かフェリーそれとも歩きか

心がうちとけるのを感じた

(鹿児島大学 農 三年 江藤秀夫)

この合宿に来るとき不安と緊張がありました、同じ班の人と会い話をしていく中で、心がうちとけるのを感じました。それは、互いにこの合宿に参加する姿勢が真剣であったから

だと思えますし、人の意見を真剣に考えることのできる、心を開いた人ばかりであったからだと思えます。

合宿で初めて短歌を創作し、感動を形に表すことの難しさ、それが他の人へ作者の意図どおりに伝わることの難しさを知りました。また短歌の相互批評により、自分の感動を他の人のアドバイスや質問によつて鮮明にのみがえらせることの凄さ、友の感動を自分の心の中でも感動できることのすばらしさを味い、感動しました。

阿蘇の地で友と語りひ吾心豊かになりてありがたきかな

ありがとう

(早稲田大学 一文 二年 川杉宏行)

班員のみんなありがとう／班長さんありがとう／講師のみなさまありがとう／学生みんなありがとう／社会人のみなさんありがとう／国文研の方々ありがとう／アルバイトの高校生の子たちありがとう／ビラパークホテルの人ありがとう／朝のあいさつをありがとう／浦島太郎をありがとう／起床の音楽をありがとう

阿蘇の山々ありがとう

そして自分にありがとう

全体感想自由発表にて

壇上に立ちて思ふはただ一つ父の心をわが心とぞせん

心を感じることを学んだ

(法政大学 経 二年 土生直樹)

私は今回が二回目の参加ですが、初参加のときは学びとろうという意識が強く、班別研修のときも人の話を聞くというよりも自分の意見を言う方に頭がまわっていました。しかし今回の合宿では、班別研修でも人の話を聞き、真剣にその人の心を感じようとしていたような気がします。そして自分の意見が正しかったと思える瞬間より、人が自分の話を真剣に感じようとしてくれているときに喜びが湧いてきました。

また文章や御製を読んでもいくにしても、何が書いてあるのかよりも、こういう気持ちで書かれたのではないかと考え、作者との心の対話をするのが大事であり必要なのだと感じました。このことは、私にとって驚きであり、また新鮮な喜びでありました。このような合宿に参加し、心を感じることを学ばせていただいたことに感謝しています。

吾が心汲み取らむとする班友の眼まなこに吾れは喜びあふれく
友どちと真直ぐに心語り得しは友のまことのあればこそと思ふ

極く当たり前の日本人

(島根大学 教 二年 三島 明)

この合宿で一番強く印象に残った言葉は「極く当たり前の日本人」という言葉である。長内先生は「同胞感情」と言われ、近所の人々に挨拶する例を挙げられた。僕は自分の身の



「吉田松陰に学ぶ」と題する輪読導入講義をされる(株)日本興業銀行勤務・小柳志乃夫氏。年譜をもとに松陰の足跡と時代背景を丹念に押へ乍ら、松陰の文章を紹介して行かれた。

まわりの人々にやさしい言葉をかけてあげること、その人達の気持ちをも自分の心に受けとめることの大切さを知り、それが「極く当たり前」のことであると思つた。また、当たり前のことというのは何て難しいのかと思ひ知らされた。

班別研修で「自然を大切にしたい」と僕は言つたが、その言葉は概念的で心の伴わないものであるということをも、松吉正資さんの「ゆく身にはひとしほしむるふるさとの人となさけのありがたきかな」の和歌を読み考えさせられた。人の思い、人の真心を知つてこそ、初めてそれらの人々の故郷を守りたいと思ふのだと思ふ。合宿で学んだことを心に留め、人の心を感じる事ができるように努めていきたい。

吾のうけし人の情を偲びつつ日々の営み行ひゆきたし

学友にまた故郷の人に会ふごとに温かき言葉かけてゆきなむ

心を開いて話し合える友ができた

(ライセンススカレッジ 二年 白岩友和)

この合宿のいいところは、班の人達と普通の友としてではなく、自分やその人の意見、疑問、悩みを心を開いて話し合えることだと思ふ。今回の合宿で初めて知つたこと、今までの自分の知識の勘違い、心を動かされた言葉など、たくさんを学べた。その多くは、もちろんいろいろな先生の講義の中でも学んだが、一番は合宿でできた友との会話、また班別研修での話し合いの中で学んだ。

僕には心を開いて話せる友は今まで少なかった。だが、こ

の合宿では短期間でたくさんの方ができたと思う。それは消極的な僕に積極的に心を開いてくれたからだと思ふ。積極的に心を開いて話すということは勇気のいることだと思ふが、それがとても大切で、また気持ちのいいことだと知つた。

合宿最終日の朝の集ひにて

朝の日を受け昇りゆく日の丸に別れを告げぬ最後の朝に

この夏の四泊五日の思ひ出を今後一生吾は忘れじ

伝統継承の灯を守り続けてゆきたい

(鹿児島市役所 有村浩明 34歳)

加納先生の御講義を拝聴することができ、まことにありがたかつた。和歌の伝統、皇室の伝統、そして日本の国がらが歴史をつらぬくひとすぢの流れとなつて、歴代天皇の御製の中に鮮かに継承されていく様を、先生の御言葉にしたがひつつ味はせていただいた。

山口先輩の慰霊祭導人講義も胸にこたへた。小堀桂一郎先生の文中の「ではその霊は誰が祭るのか」といふ問ひは、「君がおまつりしなければ一体誰がやるんですか」といふ痛切な問ひかけとして胸に響いた。慰霊の営みは伝統継承の基であり、その灯を絶やすことなきやう守り続けてゆきたいと思ふ。

夜の集ひに教育勅語暗誦せむとて

休憩のいとまをしみて友らみなみふみ寛むと声だしにけり

友らよむみふみの言葉はがらかに部屋ぬちひびくなんぞすがしき

第十一班—女子学生—

実り多い合宿でした

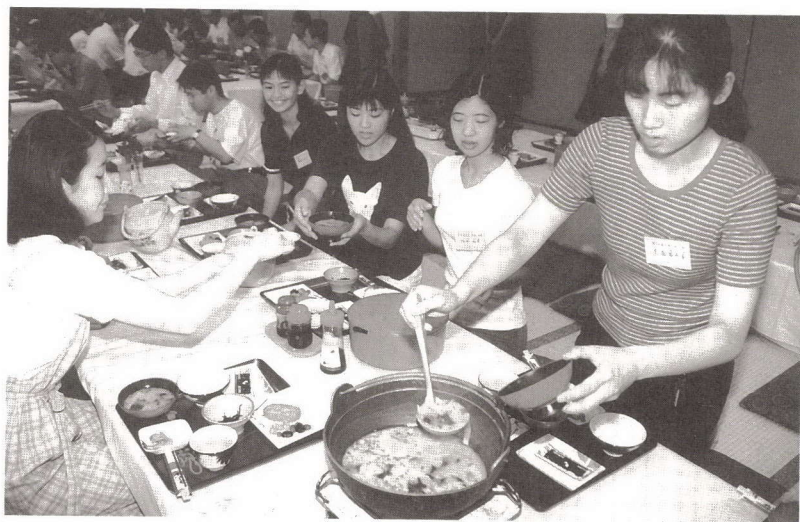
(桜美林大学 国際 四年 星野有佳子)

四度目の合宿参加ですが、最も充実したものでした。前年は戦後五十年ということ、先の大戦が果たして侵略と一義的に決めつけられるのだろうかというお話が多く、納得のいかない部分が多々ありました。今回は日本人の持つ「心」についての御講義が中心で、本当にしみじみと感心させられました。右とか左とかに関係なく感動できるお話だったと思います。理屈でものを考えたがる学生にも、こういう「心」についてのお話は、きっと日本人の良さを気づかせる機会になるのではないのでしょうか。今までは必ずしも納得して参加していたわけではありませんでした。これからは本当に友人にも参加をすすめたいと思います。実り多い合宿でした。

それと、毎年のことですが、今回は特に班員に恵まれ幸せでした。班長として責任を感じていただけに、皆のありがたさが身に沁みました。

昨夜決めし約束どほりに朝風呂へ行かんと皆で早起きをする

眠い目をこすりつつ入りし風呂場から阿蘇の山なみ美しく見ゆ



食事各班ごとに食卓を囲む。おいしい料理をいただきながら、会話を弾む。

最後の夜

指揮班から早く寝めと言はれしも時間ときを忘れてつい話し込む
叱られて気まづく思やへどみ友らと話せしことの何と楽しき

心を働かせることの難しさを知りました

(新潟県立看護短期大学 看護 一年 小林涼子)

こんなに自分自身と向き合つて自分の心を見つめる経験をしたことはなかったと思います。心を開く、心を働かせることの難しさを知りました。長内俊平先生の御講話を拝聴して真心の大切さ、当り前のことに感謝できる喜びを実感することができました。自分が変れば世界が変わるとはこのことかと思ふほどでした。ことに印象的だったのは、班友が真つすぐな眼差しで語ってくれたことです。その眼差しはあまり発言できなかつた私を支えてくれました。私には戦争のことや文化のことなど、お話の内容を理解するだけの土台がなく口惜しく恥づかしく思うことばかりでしたが、天皇陛下のお歌を拝読して日本人に生まれて良かったと心から思いました。これからは歴史や文化について学ぶ時、先人の感情や心を合わせ偲びながら励んで行きたいと思ひます。

「夜の集ひ」の折に

高らかに唱ふ友らの歌声を聞けば我が身に力湧き来る

身近なことを大切にしたい

(北海道大学 農 二年 服部泰子)

二回目の参加でしたが、あらためて日本という国を心で感じることができたように思います。日常生活では忘れかけそうな志に、息吹きを与えていただきました。今回、私なりに思つたことは、日本人としてどうあったらいいのかということの答えは、まず身近なことを大切にすることだということです。日本の文化は根底に、細やかな心があるということです。建築物や絵はその現れであつて、やはり大事なものは目には見えない心であると。加納祐五先生は、日本の心はしなやかで強いとおっしゃいました。私の心もそのようでありたいと思ひました。少しでもそれに近づけるよう、これからまた学び続けていきたいと思ひます。

朝もやの阿蘇の山並うつくしく心すがしくながめやるなり

わが国のこれぞ景色か山々をしばし無言でながめやるなり

何も知らずに生きてきたことが恥かしい

(福岡教育大学 教 一年 廣瀬正美)

「自分をもっと高めたい」「いろんな地域の大学生と友達になりたい」と思つて参加しましたが、自分の願ひになつた御講義や班別研修で、本当に心から感謝しております。特に印象深かつたことは「日本を愛する」ということです。国旗や国歌について正確な知識を持たずに、漠然とあまり良いイメージを持っていなかったこと、なぜ天皇が国民から尊ばれ現在まで続いているのかということ、年間十四日ある祝日の根柢は何かということ等々。自国のことを何も知らずに生き

てきたことを恥かしく思いました。自分の生きていて、そして愛する家族や友の生きているこの日本を知ること、日本を愛し日本人であることに誇りを持ちたいと思います。

またこの合宿で、素直に真剣に語り合うことができました。感動のあまり涙があふれてきたことや語りながら涙をながす男性の姿を見て、人は外見でわかるものではなく心を開いてじっくりと語り合っただけでわかるものだということを体験的に知ることができ深く感動した。

阿蘇の地に集ひし我らの行く道を照したまへり師の御言葉は

良き日本人、より良き人間になりたい

(東北女子大学 家政 三年 鳥谷聡美)

一つでも多くことを学ぼうと決意して阿蘇に来た。初めは頭で考えるだけだったが、三日目あたりから頭や理屈だけで考えるのではなく、本当は心と心の通い合いが必要であることを知ることができた。

日本国民として私自身が身に着けておかなければならないものとして、天皇と国民をつなぐ唯一のパイプとして和歌があるということを知ったことは一歩前進になると思う。これまで古典を学んで来たのは、天皇の「気持ち」「心」を知ることができ、さらに祖先の人達の様々な「心」を知る必要があるからであった。今までも多くのことを学んできたが、これからさらに良き日本人となれるよう一層努力し、両親を始め身近な人達を愛することができるより良い人間となるよ

カメラ・レポート 12



三日目の午前、「日本の神聖と現代世界」と題する筑波大学名誉教授・(社)倫理研究所客員教授・竹本忠雄先生の御講義。先生は「これからは、進歩主義的な考へ方ではなく『神聖なるもの』と人間のかかはりはどうであったかといふ視点に立って、近代史以前の歴史を見直す必要があるのではないか」と御指摘になり御講義を進められた。

う努めたいと決意している。

朝の陽の昇るを見れば将来の夢に向けての決意固まる

第十二班 女子学生

心から語り合える友を得た

(中村学園大学 家政 一年 藤田明子)

私は前から欲しかった「心から語り合える友人」をこの合宿で見つけることができ大変うれしく思っています。家族に対する今の自分の気持ちを涙ながらに語り合ったり、今まで誰にも言い出せなかった高校時代の辛い経験もこの班員には快く話せることができ、心のもやもやが晴れたような気がします。合宿はこれで終わりましたが、いつまでも合宿教室の十二班の仲間としてお付き合いしていきたいと思っています。

また、「吉田松陰に学ぶ」というご講義の中で「何かを経験する中で自分というものがわかる」というお言葉が大変印象的でした。学びの経験をたくさんしていこうというチャレンジ精神を強く心を持つことができました。この合宿で学んだ沢山のことをこれからの学生生活につなげていきたいと思えます。

阿蘇の地で知らぬ土地より集まりし友らと心を語る楽しさ

心のわだかまりが溶けていった

(尚綱大学 文 三年 吉本玲子)

初参加のため不安が胸いっぱい占め、最初自分が何を話しているのかわからない状態でスタートした。一つ一つの講義が発見、再発見の連続で、自分の知識の無さに悲観的に思ったりもしたが班別研修の中でそうした思いが溶けていくのを感じた。言いたいことを素直に言うことが大切であること以上に、班友の温かさ、やさしさが心のわだかまりを溶かしたのだと思う。

また、講義の中で一番心に響いたのは加納先生の「人の心を種として」という題でのご講義だった。その中で「謝罪の心は忘れてはいけませんが、それを利用してはならない」と理屈ぬきで訴えられた言葉をお聞きして、これまで戦争に対する私の思いの中に一つ光を差していただいたように感じた。この五日間の熱い思いを忘れず、これからの道を進んでいきたい。

朝露に輝く青草踏みしめて歩く友らに笑顔あふる、

日本人として当り前のことからやってゆこう

(鹿児島大学 農 一年 葉棚奈緒子)

先生方の御講義は頭にはなく心に響いてきて、先生方が日本の国を思う御心に大変感動し、涙がぼろぼろこぼれてきました。私は日常生活において日本人として極く当り前に生

活する事を忘れていることに気付かせていただき、本当にうれしく思いました。これからは日本人として当り前のことからこつこつとやってゆこうと思いました。そして和歌を学んでゆくことを通して先人方の御心を偲び、日本の歴史にまなぶべきことを見つけてゆきたいと思えます。

国文研の先生方や、班の皆さんに、この合宿で出会えたことを本当に「よかった」と思っています。また、私が今あるのはご先祖や先人方や父や母や私のまわりにいる人々のおかげであるということを痛切に感じさせていただきました。こうした感謝の気持ちを忘れずに日々過ごしてゆきたいと思いました。

日の丸に朝日照りはえ心地よき風にふかれてはためきてあり

日の丸の清き姿にわが心あらはてゆく心地ぞしたる

友らとの別れせまりてさびしさの思ひこみあぐ胸もふたぎぬ

自然や先人達に生かされて生きる私達

(東北女子短期大学 生活 二年 渡辺芳子)

私はこの合宿を通して「心」を知りました。私は自分の心は心臓という体の器官と同じ場所にあるものだと思っていました。しかし、各先生方の心のこもった御講義や、班別研修での班員と班付の方との討論を通じ「心」は目には見えないけれども、他人は自分の肉体ではなく「心」をありのままに見てくれているのではないかと思えました。先生方の御講義を聞くことによって、日頃なおざりにしていた大自然への感



三日目の午後、短歌創作の前に「短歌創作導入講義」が山口県立下松高等学校教諭・宝辺矢太郎氏により行はれた。氏は「心の動き、新鮮な感動を率直に、正確な言葉で詠んで下さい」と創作の心得を話された。

謝の心を持つことの大切さを思い出させて下さいました。私達は生きていくのではなく、自然や先人達に生かされているのだという思いをいつでも持ち、当り前の日本人になるようにこれからの一日一日を大切に生きていきたい。大人物になるのではなく、不断の努力を大切にして人を愛し愛される人になれば、私はこの世に生まれた意義を果たせると思う。私はまず最初に自分の生まれた小さな町を愛したい。そしていずれはこの日本を愛していきたいと思えます。

合宿で友のやさしき言葉聞き吾の心は清くうるほふ

そつと見る友のまなざしやさしくて女神のごとく大きくみゆる

班友と別れの瞬間ときの近づきて時よ止まれと悲しく願ふ

もつと足もとから正しいこう

(熊本大学 文 大学院二年 延塚恭子)

孝明天皇御製のなかに、今の私の気持ちが一番表わした御製があります。「天が下人という人こころあはせよるづのことにおもふどちなれ」加納先生の御講義で紹介されて心の中で繰り返し響いていたこの御製が、合宿運営委員長の與島さんから最終日にもう一度取り上げられて聞かされたときとても不思議な思いがしました。この御製の心で今回の合宿が貰われていたように感じられました。班の友一人一人が今の私の「おもふどち」です。この確かな実感から国を思うということを始めたいと思えます。

長内先生の御講話が胸にずうんとこたえました。二十四年

生きてきて私はまだ何も知らないと感じました。こんなにも心にしみ入るお話をされるのは「心」を守っていらつしやるからだと感じました。私は先ばかり急いでいる、もつと足もとから正しいこう、心の一つ一つ尽くしていこうと決心しました。当り前の日本人になることは生涯かけての目標になりそうです。

礼をつくす心持たし師の姿勢することに体すくみぬ

「全体感想発表」の壇上で語る友を見て

笑み浮かべ語り終へたる友を見て思はずつき拍手送りぬ

第十三班—女子学生—

きれいなもの

(早稲田大学 教 四年 伊藤佳恵)

四度参加させて頂いたこの夏合宿では、きれいなものをたくさん見せて頂いたと思います。先生方や参加者の方々から素晴らしいものを教えて頂きました。その事が今の私にとつてどんなに力になっていくか知りません。

中でも班別研修の折、小柳先生、加納先生、長内先生が、班室に来て下さり、お話しして下さった事は大切な宝物です。大切な事は、飾らず嘘のない自然なままの心。これからもその事を心に置いて頑張っていきたいです。

ありがとうございます。

毎日のあいさつと短歌を詠むこと

（東北女子大学 家政 三年 齋藤由紀子）

今回が初めての参加だったのですが、無事終わることができた今、心の底から来て良かったと思っっています。

この合宿セミナーでは、日本の歴史、日本の文化を友達と共に真剣に考えることで、自分を見つめ直すことができました。また、みんなの前で自分の思っていること、感じていることを口に出して表現することの難しさを知りました。

日本の文化のすばらしさ、日本人らしい心を自然に身につけていけるように、これから続けていきたいと思っっていることが二つあります。それは、毎日のあいさつ、そして短歌を詠むことです。自分の気持ちを素直に表現できる短歌のすばらしさにふれ、そこから日本の文化、日本の心を理解していきたいです。

美しと草花眺めて思ふかな友との語りひで育てし心を

物事の本質を見ぬく力

（東北女子短期大学 生活 二年 生田目優子）

この合宿教室では、様々な面から多くのことを学び、そして考えさせられました。まず「今まで学校でうけてきた教育が真実ではない」ということを知った時は本当におどろきでした。今でも今回の合宿でのお話を全てうけいれられずにい



短歌創作をかねてのレクリエーション。

る自分があるということも本当です。けれども今まで自分が見てきた視点とは、全くことなつた視点でのお話は私にもう一度多くのことを見直す機会を与えてくれたように思われま
す。先生方のお話の中にもあつたように、物事の本質を見ぬ
く力、物事の基本とは何かを考える力、そういうた力を是非
これから身につけていきたいと思つております。

心より言葉かはせし友がらと別るる今日のこのさみしきよ

いつの日かまた会へる日を友どちと約束かはし阿蘇の地を去る

胸中の温気

(実践女子大学 家政 三年 江副和美)

班友との語らいの中で大声で笑い合つたり、時には考え込
んで泣けてきてしまうこともありました。そのような様々な
場面でお互いに相手のことをじっくりと考え励まし合い、言
葉が つまつた時にもゆつくりと言葉が出るのを待つて理解し
あつていきました。その一つ一つの言葉以上に私は、その学
びあう中で共有できた温い心が通ひ合つた空気が本当に肌に
しみ込むように残りました。加納先生が「胸中の温気が大切
である」という小林秀雄先生の御文章を読まれましたが、ま
さにその胸中の温気の大切さを今回の合宿で学ぶことができ
ました。これから何を勉強するにしても、その根底にある心
をいつも大切にしてがんばつていこうと思ひます。

参加二度目の合宿の全体発表にて

一度目にまさる熱き感動を我れ今抱き涙こぼれる

去年こぞの夏誘ひくたされし先輩へ感謝の思ひさらに抱けり

心の共有

(武蔵野音楽大学 音楽 一年 小林祐子)

私は高校一年生の夏、初めてこの合宿にアルバイト生とし
て参加させて頂きました。それ以来二年三年とアルバイトを
させて頂き、その度に本部、指揮班、事務局などの方々の方々の合
宿運営に対する熱意を間近で見る事が出来ました。このよう
な心のこもつた合宿に、今回は学生として参加することが出
来、とてもうれしく思いました。ありがとうございました。

私がこの合宿で初めて体験したのは、「心の共有」でした。
班別短歌相互批評の時間、和歌にあるその人の気持ちに皆で
近づこうとしました。私がこのような気持ちを表したいと言
うと、班の皆が一生懸命になつて私の心に近づいて言葉を探
そうと悩んでくれました。私はその静かな瞬間に、友との心
の通ひ合いとはこういう物なのかなと思ひました。今まで
感じた事の無い、不思議な暖かな、しかしとても嬉しい気持
ちでした。

友どちと皆で創つた阿蘇うたの和歌喜びもまた八倍となる

班別短歌相互批評のすばらしさ

(亜細亜大学 法 一年 齊藤百合香)

四日目に行つた短歌創作は、この五日間の班別研修の中で
一番盛り上がりました。実を言うると私も短歌を作るのは初め

てで、果して時間内に出来るのかなとそれだけが唯一の不安材料でした。しかしそれは、この合宿に誘っていた先生の先生もおっしゃっていたように「良いチャンス」でした。班での相互批評はとて有意義です。その短歌を詠んだ自分の気持ちを班員に述べ、それに沿って歌を手直ししていくうちに、自分の気持ちも整理されてゆきました。最初の歌に比べて手直した歌が出来上った時には、班員全員で思わず笑顔で拍手をしました。短歌はとても身近なものです。

来年参加するかはわかりませんが、阿蘇まで一日半かけて来ただけの価値がありました。ありがとうございました。

夜のつどひにて我大学の第一学生歌を合唱す

学友と肩を組み合ひ大声で「おおアジア」と歌ひひとつとなりぬ

第十四班 女子学生

和歌の心をもち続けたい

(中村学園大学 家政 三年 丸山順子)

今回この合宿に来て、一番印象に残った時間は、短歌相互批評のときだったように思う。あの時ほど、お互いを認め合えた時間、相手の気持ちに近づけた時間はなかったと思う。短歌を作る過程では、一所懸命になれる自分が発見できたし、できあがったときはとてもうれしい気持ちだった。そうしてできあがった作品には「いのち」が吹きこまれていて、人を



贗塚でのスナップ・ショット。

感動させる力がある。私はこれからも和歌の心をもち続けていきたいと思う。

今、一人の人間が、ここに存在するためには、数多くの先祖がいたことを忘れてはならないと強く感じた。そう感じたとき、自分がかけがえのないものに思え、もっと生き生きとした自分になりたいと思った。この合宿で完全に心の扉を開くことはできなかったかもしれないが、これから大学生活に帰っても、心を磨く努力をしていきたい。

うまく言葉で言い表わすことはできませんが、これからは日本人としての心を大切にしていきたいと思っています。

みづからが生き生きとし日本のまことのころる伝へたきかな

個性は特技ではなく短歌に表れる、

(青山学院大学 理工 四年 山内眞起子)

今回が三回目の参加となりますが、今までで一番思い出に残る合宿だったように思います。自分は二日目から参加したのですが、班員は皆すでにうちとけあつていて、とても気さくで、部屋に遅れて入って昼食を食べるころにはもう、一日目からずっと一緒にいるようでした。

班別研修での皆のとて活発な意見は、自分に刺激を与えてくれました。先生方の御講義について、皆それぞれ深い意識と心をもって述べてくれるので、自分のつたない意見は恥ずかしく思ってしまうのですが、それをまた皆が真剣に聞いてくれるのでとても嬉しく感じました。

また、短歌創作がこんなに楽しかったのも今回が初めてでした。歌をつくること自体はけっこう苦しみましたが、互いに見せあい、気持ちや語りをつくりました。相互批評の時間も、作り手の気持ちや、人柄までおしはかつて感想を述べあう充実した時間でした。その時の高橋さん(班の友人)の「個性というのは特技や得意なものではなく、こういう短歌が出る」という言葉がとても印象に残っています。短歌というのは、どうしても自分をさらけだしてしまうものだ、嘘というのはつけられないものだと思います。

清水さんに和歌をもらつて思ふこと

「集まつて」と声をかけた班長の様子を伺ひ何かと思ふ班員の一人ひとりが手わたして歌をうけとり声つもらせる

手を握り涙押さえぬ友達の様嬉しくも淋しくもあり

座を囲み友の話にやさしげに耳傾ける姿徳ばるる

共に参加した弟の歌を集集より見つけし折に

なにげなく目にとびこみし弟の素直な歌にとこかくやしい

祖父の遺志を継ぎたい

(福岡教育大学 教 一年 宇佐美志都)

御縁あり五日間をこの阿蘇の地にて過ごした。ここで私は、自分の求めつづけてゐたものと、今は亡き祖父に出逢へたと感じた。

私は時々「女であり人間でありたい」と思ひ、自分の言動を考へ直すことがある。女であることをこびたくはない。し

かし、女らしさ、やはらかさは失なひたくない。また、自分は女であると共に人間である。一人の人間としてしっかりと確立したい。その両方の事実は変はらない。加納祐五先生の御言葉で「日本の心はやはらかでありつよい」といふものがあつた。私は自分が求めつづけてゐたものは「日本の心」なのだと思つた。

北部九州出身者の集ひの折、「元寇」といふ歌を聴いた。私の祖父も国文研と同じ様な思想で政治活動をしてゐた様である。しかしその活動も半ばにして他界した。私は祖父の活動する姿は目前にした事は無い。しかし歌を歌つてをられる諸先生方を拝見し、「祖父もかうやって志を一にする友らと……」と思ひ、気づくともう涙が止まらなくなつてゐた。祖父の果たせえなかつた思ひを、私は今、受け継ぎ、そして今、私は祖父と一の志を抱いてゐる同志なのだと感じた。

今は「き祖父をしのべば迫り来る大君おもふ大和魂

一言では言えない宝物を得た

(東北女子大学 家政 三年 工藤尚子)

今回私はこの合宿教室に初めて参加させて頂きました。同じ大学の友人も何人か参加して心強いところもありましたが、それでも皆が初めてということもあり、多少の不安がありました。けれども同じ郷土の長内先生の温かいお人柄とお言葉に、不安も吹き飛んでしまいました。

合宿では、本当に素敵な班員に囲まれ、笑いあり、真剣さ

カメラ・レポート 16



三日目の夜、(社)国民文化研究会常務理事兼事務局長・長内俊平先生は、「若き友らへ語りかける言葉——極く当り前の日本人に私はなりたい」と題された御講話の中で「当り前といふ事くらゐ有難い事はない。当り前の事の中にこそ人生の大事があるのです」と述べられた。

あり、暖かさありで初めて会った気がしないほどでした。又、先生方の御講義も心を打たれ感銘を受け、このような一言では言えないくらい宝物を得たと思っております。

今、私は大学で幼稚園教諭になるための勉強をしておりますが、この合宿で特に、日本の心、人間の真心がいかに大切かを学ばせて頂き、幼い頃から自然に、日本の心、真心を育てて行くことができたかと強く思いました。「三つ子の魂百まで」ということわざがありますが、この合宿での人との出会い、短歌のすばらしさなど、五日間という全ての中で学んだことを、幼い子どもに何らかの形で伝え、心に浸透してくれたなら、その子らが大人になった時には、外国に負けないう、日本の国を愛する心が形成しているのではないかと信じております。

最後に、合宿中裏方で支えて下さった多くの方々にも心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

出会ひには時の長さは必要なしと教へてくれたは心の友なり

自然と人間の共生を考えてゆきたい

（宮崎大学 教 一年 高尾泰子）

高校時代の恩師の紹介により、私はこの合宿教室に参加しました。大学は文系の学部にするかと思っていたのに、いろいろなハブニングで理系の学部に通うことになり、歴史や思想と接する機会が極端に減りました。将来、何について考え、大事なものは何か、そのために自分に何ができるか、そ

れを見つげるための時間を得ようと大学に行ったのに、今までのようにテストのための勉強に追われる羽目になり、「このままでは物を考える楽しささえ忘れてしまう！」と思い、この思索の場を訪れたのです。

私が社会を意識し始めたその入り口は、主に自然科学分野でした。小さい頃に環境汚染に興味を持って調べたため、「自然は良いのに人間は悪いんだ！」という考えが根づいてしまいました。そのため、政治や経済、平和についてなどは、しよせん「『悪い』人間が幸せに生きるためのもの」として、それについて考えるのを未来へ未来へと持ち越してしまいました。でもここに来て、私がとりあえず「おいておいた」ものが、どれだけ大きなものであるか、そして自分が興味を持つものにも、持たないものにも、密接につながっていたかを、気づくことができました。私は世にまかりとおっているものにも疑問を持つ。持たなければ、と思っているもので、いわゆる「マインドコントロール」（占領による）の根は深くなかなかったと思うけれど、それでも考えるべき問題についてそうしなかったことを勿体なく思いました。

自分が生涯かけて願う自然と人間の共生のためにも、合宿で得られた考えるべき問題について、これから自分なりに考えていきたいです。

友集まれる最後の夜に

新しき友と語らひ時わすれきれぬ朝もうれしかりけり

正しい歴史教育の必要性を感じた

(亜細亜大学 法 二年 高橋雅子)

昨年からこの合宿教室があることは知っていましたが、何となく不安感があり、それは参加する直前までありました。しかし、班の仲間と語り、諸先生方の講義をうかがっていく中で、それは無用であることに気がつきました。私の不安感とは正直言うと「天皇を尊敬する」イコール右翼的な思想と結びつけていたことです。そのため、慰霊祭の説明をうかがった時に、その場の雰囲気は圧倒され、具合が悪くなってしまいました。しかしその私のイメージは、誤った戦後の歴史教育によりマインドコントロールされていたのだということを教わりました。私は周囲の人と同様に、おごそかな気持ちになぜなれないのか、と戦争と関わり亡くなっていった人々に対し申し訳ない気持ちでいっぱいになり、動揺してしまいました。その私をやさしく包み励ましてくれたのは、まだ出会って間もない友でした。この合宿を通して何でも話せるかけがえのない友に出会えたことは、私の大きな財産となりました。天皇を敬うのは、花を美しいと思う感情と同じレベルであり、外国では子供でもごく簡単なことなのに、今の日本ではその気持ちに至るには努力を要するのだと班別討論で話題になりました。子供たちがごく自然に日本を大切に思う、そんな時代が訪れるためにも、正しい歴史教育を行う必要性があると感じました。

カメラ・レポート17



慰霊祭。戦時・平時を問はず、祖国日本の為に尊い御命を捧げられた方々の御霊を心静かにお慰めした。

阿蘇の地で多くの友と語りひて人のやさしさ我が身にしみたり

班長が仕事のため先に帰られた

班長の帰りし今にふと思ふいかに我らの支へとなりしか

英霊の方々が守っておられる合宿

(日本を守る愛知県民会議 清水久仁子 30歳)

この度の合宿では、伊藤哲夫先生がアジア情勢に絡めながら、憲法の限界を分かり安くお話しくださったり、竹本忠雄先生のフランスを中心に王室を失った歴史や、ジャンヌ・ダルクの愛国心など、今までとは違った感性で日本の皇室を見させていただき、大変勉強になりました。班の話し合いの中では、学生の皆さんと、先生方のお話の感想や、和歌の批評など行い、純粹で誠実な意見に、驚いているうち、いつの間にか楽しい時間が終わってしまうという状況でした。何かの出来事について、皆が本気で話し合うというのは、ただ受け身で勉強するのは違って、身に付く、すばらしいことだと改めて思います。大学も年齢も違う初めて会った仲間が、お互いを思いやりながら磨き合えたなんて、普通では、なかなか考えられない事かも知れません。私も合宿中、班の仲間がいてくれたからこそ、講義を聞くにも、食事をするにも、楽しくやり甲斐があり、班のみんなや合宿に参加された全ての方へ心よりお礼を言いたい気持ちです。きっとこれは、班の仲間や、班付きの先生方の力だけでなく、英霊の方々が守っておられる合宿なのではないかと思えます。吉田松陰先生の松

下村塾が、常に新聞を作り、その事件の問題点を盛んに話し合っていたことをお偲びし、この合宿が現代の松下村塾になるよう努力してゆかなくてはならないと思いました。最後に、来年も多くの仲間が集まってくれることをお祈り致します。

第十五班—女子学生—

またお会いできる日が楽しみ

(コロンビア学院講師 レイヴィン安希子 25歳)

長内先生が班にいらっしやりましたかお話されました。

「お母さんといふものは子供を守るために自分の身をのり出して守るものだ。みんなが『ただいま』と玄関の扉を開けて入ってきたその一言でみんなの気持がわかるんだ。そしてみんなの好きなおかずをそっと出してくれるんだ」と。その時、なぜかしら私も含めてみんながそっと涙を流しました。

班員一人一人がとてもすばらしいものを持っていました。残り時間はわづかとなり心さびしい気がします。それは自分とみんなが一つになってゐたからではないでせうか。でもこれからが本当の友になれるのです。

それぞれ違った場所で違った環境の中で生活してゆくのですが離れていても悩んでゐることがあればお互ひに支へ合つてゆければと思ひます。どうかみなさんくれぐれもお身体を

大切に又お会いできる日を楽しみにしてをります。ありがとうございました。

さびしさや別れをおしむ友達といつか会ふ日を約束かはす
宴にて浦島太郎を演劇す楽しみあふる友等のみ顔

合宿を終へて阿蘇路を後にする吾の心はこの青空のごと

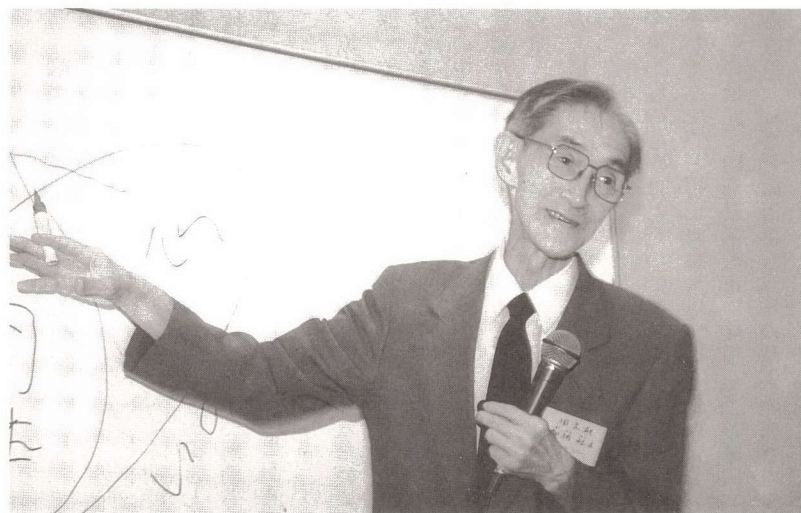
本当の学問にめざめた

(国立音楽大学 音楽 三年 羽生恵津子)

この合宿に参加させて戴いたのは、今回が初めてです。
『日本文化とはすなはち日本人の心である』といふことは、
以前から学ばせて戴いてゐた事ではありましたが、この合宿
では更に身にしみて感じました。

心から発せられた言葉といふものが人を感動させ動かすの
だといふことを班に来て下さった長内先生の言葉によつて感
じました。先生の言葉の一つ一つが心の深くに入り込み流れ
来る涙を止めることが出来ませんでした。それと同時に感動
して涙を流してゐる自分を大変愛しく感じ、うれしかったで
す。

もう一つこの合宿で印象に残った事は、それは胸中の温気
の話をしてゐた時ですが「書物といふのは水が凍った様な物
だ」と書いてありましたが、名越先生が「それを自分自身の
熱でいかに溶かすかといふことが大切である」とおっしゃつ
た言葉です。今の私は「本当の学問をしてゐない」といふこ
とを指摘して戴いたやうに思ひ、大変に感謝の念でいっぱい



四日目の午前、元日特金属工業常務取締役・国民文化研究会顧問・加納祐五先生は、「人の心を種として」と題する御講義の中で、和歌を日本の道（しきしまの道）と認識された後鳥羽天皇を始めとして歴代天皇の御製を読み上げられ、「御製に示される通り、日本の皇室は厳めしいものといふより、国民と密接に親しく結びついたものです」と語られた。

なりました。

ここで学びをこれだけにとどめず今後自分の人生の上に生かして行きたいと思ひます。

ともだち
班友とともに過ごせし五日間我の心の宝とならむ

五日間学びしことを胸にとめ日々なりはひに生かしてゆかむ

「ありがたう」この一言が本心に心の底ゆわきいづるなり

夜の集いで『浦島太郎』をやった!

(東北女子短期大学 保育 二年 新山美樹)

私は、この合宿に初めて参加しました。講義の中で理解できなかつたことを班別研修で友や班付の先生方と話し合つていくうちに自分の言葉として吸収できるようになりました。

時に思い出に残つた一つとして、レクリエーションで贅塚に登つたことが挙げられます。班員全員が童心に返り、自然の中の小さな花や虫にまで目を向け共感し合いました。

また夜の集いで方言劇『浦島太郎』をやつたことも思い出の一つになりました。班員が東北・東京・九州とそろつていました。長内・名越・小野先生の協力をも得て短い練習にも拘わらず自分達なりに満足できる劇を作ることができたと思ひます。

ここまで班員が一つの目的に向かいやつてこられたのも、一人一人が心を開き相手の気持ちを理解し合えたからこそだと思ひます。この合宿での師や友との出会いを大切にしたいです。

阿蘇の地で共に学んだ友達と別れることの淋しきに泣く

胸中の温気の熱さを知れ

(東北女子大学 家政 三年 本田由布子)

私は今回初めての参加で、合宿に対する期待と共に不安が多くありましたが、先生方のお話しをお聞きしたり班別での研修を行うことで、その不安は少しずつ解消され、喜びへと変わりました。「百聞は一見にしかず」と日本の昔からあることわざ通りでした。

坂口先生のお話しの中で、真実を知るためには「物事を複眼」で具体的に見るることによって初めて自分で見つけることができるのだということを知りました。また加納先生のお話しの中で「胸中の温気の熱さを知れ」という小林秀雄氏のお言葉から自分で苦勞して得ることが大切であるということをお聞きし、今の私には大切な言葉だと受け止めました。歴代の天皇方は自ら御苦勞なされ国民のためにと骨を折られました。私ほどの者がこれからどれくらいのことができるかは、今後の私の心がけしだいです。何事も自らの手で、目で体でそして心で感じ行い身につけていきたいと思ひます。

私の地元、山形県米沢市の開祖「上杉鷹山」の『成せばなる成さねばならぬ何事も成らぬは人の成さぬなりけり』の言葉とこの合宿で出会えた多くの言葉を大切に友等と共にこれからの生活をしていきたいと思ひます。

友どちの言の葉耳にし我思ふ心こもれる熱き声かな

期待以上の誇れる経験だった

(横浜国立大学 工 一年 坂東陽子)

私は初めてこの合宿教室に参加させて頂きました。前々から父に、大学生になったら合宿に参加するように勧められてきましたが、今回の参加は自分の意志で決心しました。

私は人見知りをしたり、また自分の意見を他人にきちんと伝えるということが苦手でしたので自分を鍛えるにはよい機会だと思ったのです。

しかしこの参加には私の想像以上の、いえ期待以上の豊かな経験となりました。特に班員の方々と心の交流は素晴らしい経験でした。班員の方々と御講義について討論をするにつれ、本当に様々な意見を持った人がいる。言いかえれば一人一人考えていることは違うのだとまざまざと感じました。そしてまったく別の考え方を持っている人同士が友になり家族になり、家族共同体になり『御国』となることに何ともいえない思いを抱きました。

この思いが何なのか私にはまだわかりません。ただそれは誇れるものだということは確かです。この『思い』を今回学んだ『真実とは自分の足でつかまえるものだ』という言葉の下に、自分自身でつかみとっていきたいのです。それこそが日本を日本人であるということを、そして自分自身を誇りに思えることへの第一歩であると思うのです。この機会を与えてくれた親に感謝しています。



「創作短歌全体批評」をされる熊本市役所勤務・折田豊生先生。参加者全員の短歌が掲載された「歌稿」の中から、各班一首づつ取り上げられ、作者の心情や実際に見た情景に合ふやうに言葉を選びながら懇切に添削してゆかれた。

合宿最終日の夜に

真夜中に友と語らば天空に光り輝く半月見ゆる

合宿最終日

早朝の阿蘇の大地に木霊する鳥のさへづり我は忘れじ

大切な一步をふみだせる

(尚綱大学 文 三年 吉村みふゆ)

私は日本人でありながら、日本の歴史について何の知識も持ち合はせてゐませんでした。合宿に参加してみて自分の無知さ加減にあらためて気づかされました。同年代であっても戦争や天皇、君が代、日の丸に熱心になつてをられる方々のゐるといふことを知り、また出会い、自分の在り様を非常に考へさせられました。

「偽眼でものをみるな、自分の足で確かめよ」と班別討論で名越先生に言はれましたが、全くその通りです。自分で出向いて、見て確かめて、そして理解し、そこからなにかを心で感じとらなければなりません。それを自分の中で消化できたとき、人は大きくなるのだと思ひます。

この合宿が終はるとき私はその大切な一步をふみだすでせう。

朝の集ひにて

夜更けまで友と語らふ翌朝の月ほのしるく眼にしみ入れり

様々な意見をもつ人と接し得た

(福岡大学 経 大学院一年 長府綾子)

今まで深く考えたことのないテーマについて考える機会を得てよかつたと思ひました。今までの生活では似通つた意見の人とついつい集まりがちになつていましたが、今回様々な意見をもつ人と接することができてうれしく思ひました。

ありがとうがございました。

阿蘇の夏新たな友と交はりて知らない自分に気づく喜び

第二十一班——社会人——

本当に國民文化を研究する会である

(青年自由党本部 近藤毅 26歳)

今回、全体を通して一番感じたことは、「ああ、本当に國民文化を研究する会なのだ」ということです。短歌などを通して、自分の内へ内へと入ることは、仕事では外へ外へと行動しているため、とても新鮮であつたと思ひます。

講義を受けた事で、世の中には色々な道があると気付かせて頂きました。そして色々な行動方法があるという事も分らせて頂きました。後は、私自身がどの道をと、どのような行動をしていくかを考え行動していきたいと思ひます。

本当に素晴らしい御講義、素晴らしい人々に出会わせて頂き、大変感謝致しております。

夜のつどひやつぱりうまいアルコール明日も飲むぞと心より思ふ

人生観が変わる程の収穫

(株はせがわ 黒川貴司 40歳)

七月中旬、社命により「日本文化の象徴たる和歌の心を学ばせて頂いて来い」といふ命令そのものは、誠に身に余る光栄でありましたが、最も繁忙なこの八月上旬の時期に何故……といふ疑念も正直ありました。

然しながら、セミナー初日の坂口秀俊先生の導入講義を聞き、忽ち、この機会を与へて頂いた上司、同僚に感謝しました。セミナーでの講義、班内での話、意見全てを是として受け入れることは出来ませんが、様々な説、情報を自分自身で分析し、且つ取捨選択を行ひ判断するといふことの重要性を認識することが出来ました。

セミナーの運営そのものに対しては確かに不満は残りました。一つにはスケジュールに余裕があり過ぎる事、一つには社会人と学生の交流の機会が無いこと等がありました。

最後に、今回のセミナー参加体験は、これからの私の人生観が変わる程の収穫があった事です。同時に、当初の主要目的であった短歌に対する認識を深めきれなかったことが心残りでした。

大阿蘇のカルデラの中駆けぬける雲みてをれば心なごむも

國思ふあまたの人の語らひを心し聞きぬ阿蘇セミナーに



「班別短歌相互批評」。友の作った歌を班員の皆で気持ちを推しはかりながらも一度考へ直してみる。お互ひの心が交ひ、思はず笑みがこぼれる。

カメラ・レポート 20

「当り前の事を当り前に話す」ことの感動

（九州不動産専門学院本部 原田和典 42歳）

昭和四十九年の参加以来二度目の参加であり、また今回はライセンスカレッジの「修身」の授業の一環として三名の学生を引率しての参加でもあった。

合宿が開始されると、二十二年前の記憶が蘇り、当時と変らぬ運営方針に安心すると共に、新鮮な気持ちで臨むことができた。十九歳の感受性豊かな時に比べれば、受容力がやや鈍化したとはいえ、諸先生の講義を素直に受け入れることができ、殊に長内先生と加納先生のお話には思わず涙してしまった。当り前の事を当り前の言葉で当り前に話すことがいかに人を感動させるかを改めて認識させられた。また慰霊祭を初めて経験し、厳粛な雰囲気感動し、班別討論の中で、班長、班付、班員の皆さん方より貴重な示唆を受けたことを感謝したい。

今回の参加を機に、私自身「失いかけていたもの」の復権を図ると同時に、若い学生達にこのことを語り伝え、素晴しい日本を再現してゆきたい。

雲間より薄日の差して青田映え秋に向ひて育てと祈る

価値観が違う

（株）多々良 近松敬倫 25歳

「なんでこんくそ忙しか時に、こがんとに行かんばとや、」

と思いつながら参加した今回の合宿教室。私は、この手の集りには全く興味がなく、自分とは無縁のものであると思っていました。当初から、かなり覚めた立場で参加というよりは寧ろ見学というような気持ちが強かったように思います。

然しながら、日常では考えたことのない難題を目前にし、母なる日本のことを真剣に論じあう中に加わらせて頂き、同じ人間として共感する部分もあった。

自分なりの結論としては「興味がなかったという訳ではなく、価値観が違うのだ」ということでした。同じ日本人として自分とは違う考え方を持つ人々がいるのだ、ということをお教えてもらった、ととらえる。

我が道と君の道とは違へども同じ日本に生きてあるなり

正直な意見を言えるのは同調者だけ

（株）電発補償コンサルタント 黒木光晴 24歳

研修前半私は非常に驚きました。研修内容は、講師の方、國文研の皆さんの一方的な意見を聞くだけで、それに相対する意見を発言すれば絶対に認められず、押さえつけられるだけでした。『心を開いて』と言いつつも、正直な意見を言えるのは、講義に同調した人間だけなのだと感じられました。

然しながら、研修後半、短歌を作り、批評し合った時間は、自分の思った事を素直に書く事ができ、非常に楽しい時間でした。上手に作れないけれど、歌というものは心がなごむよくな感じがありました。研修での講義については、多くの考え

の一つとして参考にしたいと思います。

都会にてすさみし私の魂を洗ふがごとき木々のささやき

心とは何か、を教えられた

(福岡県立春日高校 豊原晋一 40歳)

昨年に続き二回目の参加でしたが、今回もまた大きな収穫がありました。まずは長内先生の講話です。昨年も先生の講話に感動し、今年参加した目的の一つが先生の話を聞くことであつたと言っても過言ではありません。当り前のことに感謝する気持ちを忘れていた私は大いに反省させられました。また文明と文化の違いがよく理解され、頭デッカチになつていた私にとってまさに頭にガツンと一撃の感じでした。

そしてこの講話は加納先生の講義とも通じるものでした。つまり精神が心を駆逐しつつあるのが西欧文明の姿であり、現在の日本もそうなりつ、あるということでしたが、私自身にも当てはまるのです。クラークスの所説には大いに考えさせられました。

次に短歌創作についてですが、今年は去年以上に苦しみました。作品を読むのは好きですが、自分で作るのは苦手です。しかし短歌の創作を通して言葉を吟味したり心をはたらかすことの大事さを学びました。班別での相互批評は貴重な体験でした。経験や感情を歌にするやさしい心を身につけたらと思います。

外輪の山ふところ^{たの}にいだかれてすくすく育つ田表の稲は

カメラ・レポート 21



「夜の集ひ」。合宿教室も余す所あと一日となった。共に研鑽を積んできた友と腹の底から声を出し合ひ、歌ふ。

班員と批評し合へばわが歌もさらによくなりいとほしく思ふ

第二十二班——社会人——

短歌のすばらしさ

(朝電発補償コンサルタント 三枝祐介 24歳)

短歌という全然分らない世界を少しでものぞけたことがとても印象深いものになりました。三十一文字で、自分の心の中にある「感動」とか「喜び」というものを表現するすばらしさを知りました。相互批評の時間に班長らに批評していただいた時に、一字違う言葉に替えるだけで、文の引きしまりや本当に自分が言いたかった事に直されてゆく、その様に感動しました。この先もこの感動した心、新鮮な風を心の中に通し、人間的にも大きく、豊かに、社会に戻って頑張りたいたいと思います。

朝靄の立ちこむる庭に急ぎゆく道に聞ゆる鳥のさへづり

時間をかけて考えて行きたい

(株)日本ジーニス 白浜 隆 32歳)

このの一部だけで判断したり、理解することは危険で自分の成長を止めてしまうことになると思います。色々の立場の多くの方々の話しを素直に聞き入れ時間をかけ考えて行きたいと思えます。

雄大な阿蘇の山なみ教へてよ悩める我の行くべき道を

合宿を終えて

(南)今村曙事務所 坂本一俊 26歳)

毎日の生活のなかでふとこのま、でいいのかと思うことがありましたので、その疑問の答えを求めよう、あるいは、答にゆきつくための一つの道標を得ようと思っておりました。講義中、大東亜戦争、天皇、日本と言う、言葉が出て来てとまどいましたが、班別研修で先生方の熱い思いにふれるうちにだん／＼理解出来たような気がしますが、一方今までの自分の歴史認識や天皇観と大きく異なる所も多く、更らに自分なりにかみくだかなければわからないことも多かったです。仕事や家から四泊五日離れて、じっくり日本のこと、自らのことを考えたこと、いろ／＼な人を知り、いい経験を致しました。

遅くまで時を忘れて語りし友に出会ひたることの有難きかな

不思議なえにし

(株)はせがわ 甲斐昭二 42歳)

日本という国に生れ、日本人としてどう生きるか、日本の文化を知る、その爲の方法を短歌に求めるといふ目的でこの合宿に参加しました。

合宿の目的は概ね成果があつた様に感じます。ただ初めて参加した私には、終始違和感がありました。我々の日常と違

う世界が作られていて、その世界に溶け込めない自分がそこにいるからです。その世界が、真実だと、短い時間で理解させる事に無理を感じます。

私達の様な者に、日本の良さ、日本人の誇り、日本の文化を伝えてゆくには、長い時間がかかると思います。

阿蘇合宿を終へて

不思議なる縁えにしに集ひし友どちとまたまみゆるその日待たるる

真の国際人

(出光興産(株) 行成俊光 43歳)

各先生のお話をお聞きして感じたのは「国際人」ということです。国際人イコールボーダレスといった短絡した思考が、良き日本、信頼される日本人を壊しているのではないだろうか、今回の研修で、真の日本人とはどういうことを改めて考える機会を与えてもらいました。それは今の我々にすっぽり抜けている、家、郷土、民族、国家、伝統文化などです。加納先生のレジメに「私達のねがひ……伝統の相續と創造」とあります。この伝統の相續―日本の伝統文化の真価を正しく理解し、体現実践することにより日本のよさ、異文化のよさの分る人になりたいと思いました。来年も是非参加させていただきます。

教へられし敷島の道こつこつと学びてゆかむ今日この日より



趣向を凝らした出し物も登場し、集ひの雰囲気をも盛り上げる。

人生と短歌

(株)多々良 谷岡正秀 23歳

初めて二十二班の方達の顔を見て、色々な人が居るなど思った。どう見ても自分より先輩の人が多く、若者を受け入れてくれるのかと思った。しかし日がたつにつれて国文研の班長、班付、そして班の皆さんの話を聴き、人生について、自分についてのことにつくづく感じるものがあった。一番心に残ることは短歌作りであった。作った歌を皆で相互批評するときは短歌作りである。私は一人で皆さんの顔を眺めていたのだが、一生懸命他の人の作品を批評する姿を見て不思議な感にうたれた。本当にこれは不思議な縁また他の人では味えない貴重な体験が出来、出会を大切にしたいと思った。班長、班付、班の皆さんに本当感謝する。

あらためて日本に生れしを誇らしとしみぐ思ふ共に学びつ、

第二十三班 社会人

良き社会人班に恵まれて

(株)BBS金明 中田一義 52歳

ほんとうに良き社会人班に恵まれ、真に交誼が戴けたと実感できた。この想いを忘れず形であらわしてゆける自分でありたい。

四十一回目を迎え、理事長をはじめ、設立にかかわり給いし恩師の諸先生(自分の親の如き想いでございます)の御恩を兄弟一同(国文研会員)真に受けとめておるか、兄弟と言えども言いたい事が言い合えておるか、その場がほしい。それが親に対する愚息の成長の場でもあるはず。兄弟すべてが周りから見て「ほんとうによいお子様ですね」と言ってもらえる事が孝行の第一歩のはず。長兄は、そんな場を、常に愚弟に与えてほしい。今はそれしかないと思う。お願いします。

加納祐五先生の御講義を拝聴して

一言も聴きもらさじと見申せど涙あふれて御姿かすみ

理解し合う事は心を通わす事

(福岡県立春日高等学校 國崎昭則 43歳)

昨日まで見ず知らずの人々が今日は友達となって心を通わすということは、考えてみれば不思議な事である。考え方やものの見方は異なっている。人はそれぞれ理解し合える共通の部分を持っている。それが見えない時、人と人との間にいさかいが生じる。理解し合うという事は、心を通わすという事の様に思える。

心は全く不思議なものだ。合宿期間中、我が班の心は結ばれていた。辛くはなかった。苦ではなかった。ただ嬉しかった。有難かった。

講義の内容は忘れた。しかし、この合宿の一日一日の印象はいつまでも私の記憶に残ることと思う。

誘はれてはるる来たる大阿蘇に人なつかしく酒くみかはす

国文研全国学生青年合宿教室に参加して

(株)玄南荘 湖上高当 39歳)

初めて、国文研全国学生青年合宿教室に参加させてもらった。これほど内容の濃い有意義なお話や、素晴らしい仲間と出合えるとは、思ってもみなかった。年齢や立場を越えて各人一人ひとりが認め合い関わり合う。

日程が進むにつれ、自分自身の肩の力が抜けてゆき、心が晴れわたってゆく様子が手に取るように分かる。心が幼い頃の純粹無垢な時に戻ったようで心地いい。どうすれば、いつもこのような心で人と接し、仕事をすることが出来るのだろうか。言えることは、自分から心をハダカにし、「良いこと、正しいこと、あたりまえのこと」を相手に投げかけることではないだろうか。すると相手も必ず返してくれる。この連続した関係が良い人間関係を作り、お互いを高めてくれる。

そして友が生まれ、その輪が広がる。これら大切な点に、今回の合宿で気付いた。簡単な事ではないだろうが、あとは「勇氣」ではないだろうか。

最後に、このような素晴らしい班を創り上げてくれた同室の一人ひとりに、そして何よりも中田班長と国文研のスタッフの方、講師の先生方に感謝を申し上げ、心からお礼申し上げます。

本当にありがとうございました。



五日目午前、合宿運営委員長・與島誠央氏による「合宿を顧みて」。與島氏は「残された時間はわづかとなりましたが、話の内容よりも、話しぶりに注目してもう一度班員に向き合ってみてください」と述べられた。

阿蘇五岳釈迦をかんがみ旅永遠に母の面影同行二人

初めて当合宿に参加して

(社福岡県中小企業経営者協会 高田 哲 32歳)

初めて、当合宿に参加させていただいたことに感謝いたします。「国文研」というその言葉の響きに異和感を持ち、一種の先入観を持って参加した以前(五日前)の自分を恥かしく思うと共に、合宿を終えた今、自分の心を開いて語り合い、日本の歴史、物の考え方に共感し得る友を得たことを大変嬉しく思います。

日本の歴史を繙き、それに対する主張を世間の人は、右翼だ”左翼だ”と言いますが、かつての日本人の歴史、心を正しく認識せずに、知識だけで云々することがいかに愚かで、いかに浅はかであるかに気づきました。過去の歴史に対する”正しい””正しくない”という論議は今後も続くでしょうが、共感し合える日本人の心は、今後も大事にすべきであるし、自分の信ずるものを、自分の子供や子孫に伝えるのは、我々の義務であると思います。

忘れかけていた日本人の「心」「温かさ」を後世に伝えるためにもこの合宿教室を今後も続けて下さい。

そして今回同じ班になった方々と末長くおつきあいさせていただきたいと思えます。

遅くまで語らふ友の真心にまた会ひたしと心から思ふ

日本人であることに喜びを感じた

(株)はせがわ 長谷川大蔵 30歳)

この合宿ほど自分が日本人であることに喜びを感じる体験をしたことはなかった。すばらしい先生方、班員の方々に恵まれて、大変有難いご縁に触れさせて頂いたと思う。

中でも一番心に残ったのは、中田班長、服部先生、班員の皆皆と語り合えた日々である。感動したことを率直に語り合える仲間達、肩を張らずに付き合える仲間達、このことは僕の人生において大きい。ともすると理屈にこり固まり頭でっかちになってしまいがちな自分、人を比較対照で見てもいまいがちな自分、人を傷つけて気付いていない自分、このような愚かな自分もつたいない人生を送らせて頂いているなあと改めて感じた。「心のよりどころ」とは人の心が開けてほと、けているところを言うのでしょうか。名を挙げればきりがありませんが、風のように爽かな若き友、先輩達に触れる機会を与えてくれた国文研の方々、父、そしてこの世のご縁を頂く素になった母、先祖に感謝します。ご縁の有難さをお教え下さった仏様、そして万物を一切大調和させる御親神に万歳。

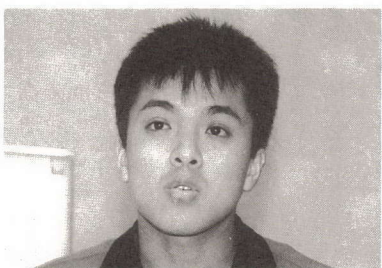
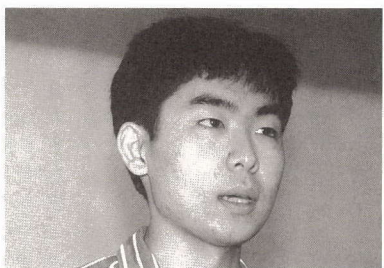
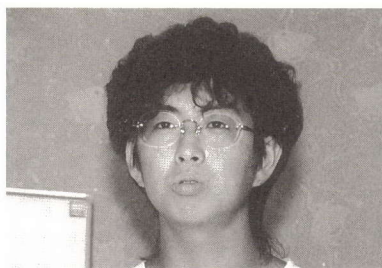
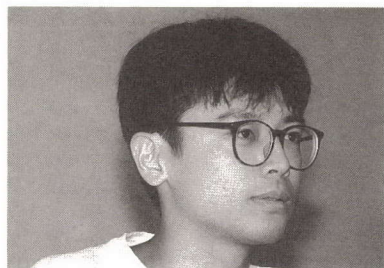
集ひ合ひ靖國を語りし神民の眼光鋭く夜はふけにけり

不思議な縁を感じた合宿

(佐野日本大学高等学校 荒木敏幸 27歳)

今年の合宿教室も気が付くともう最終日であった。

今回は私自身にとって、不思議な思いと新鮮さでいっぱい



「全体感想自由発表」。次々の登壇する友らは、合宿教室を振り返って感想を湧き上がる思ひそのままに率直に語ってくれた。

であった。昨年の合宿以降見聞きした事柄を知的には理解できても、その本質を理解できなかつたり、疑問を感じていたりして、心の中にわだかまっていたものが結われた紐をほどくようにすつとほどけたのである。また最近興味を持ち、勉強していた事柄について、深い知識や豊富な体験をお持ちになった方と出会つたりと、不思議な縁を感じた合宿であった。また、ご講義においても「心」についてのお話が多く、大変勉強になった。さらにもつと学んでいかなければならぬとも思つた。

大変有意義な五日間を有難うございました。

ともども同志の流しし涙に我が胸も熱くこみあげまなこ眼くもりき

第二十四班—社会人—

日本の心をわが子に伝えたい

(尚綱学園 中村敏郎 47歳)

嘗て三島由紀夫は、その著『文化防衛論』の中で、守るべきものとして「文化」をあげていた。

文化とは何か。日本人の心とは何か。答えがみつからぬまま、もやく／＼した気分の日々を過してきた。

この合宿で学んだものは「日本人の心」である。絶えせじなその神代より人の世にうけて正しき敷島の道

「日本の心は、人のまごころを大切にすること、心をかよい

あわせることである」

わが子に、このことを伝えたいと思う。

賢塚に息をはずませ登りきて友のひたひに吹くはそよ風

加納祐五先生の人柄に感銘した

(出光興産(株) 大三輪晃 37歳)

大変印象深い先生方の御講義を拝聴させていただきました。中でも加納祐五先生に大変感銘いたしました。御講義の内容は勿論ですが、何よりも加納先生のお人柄に感銘したのです。先生の静かな語り方、学生に対する大変思いやりのある暖かい答え方から、私は最近忘れていた徳というものを思い出させて頂きました。何よりも人の心、日本人の心を大切に決めて決して傲らず、高ぶらず、大きい声を出すこともなく、押し付けず、暖かい心で後輩に接し導いていかれようとする姿勢は、人の心どころか我身さえ顧みようとせず明らかにまで自己主張の多い昨今の風潮のなかでは謙虚すぎるとも思える程で、その尊いお人柄にはっと気付かされました。私も少しでも先生の境地に近づける様、努力していきたいと思えます。

合宿の終はりに全体感想自由発表にて

あふれくる思ひを語る学生の素直な心尊しと思ふ

純粹な心を思い出した

(宮崎神宮 木村速穂 33歳)

今回の合宿教室で感じたこと、それは参加学生の心の純粹さである。全体感想自由発表において次々と発言する学生の言葉には班友や家族への感謝等々、現代社会において忘れかけられている他人への思いやりの心があった。仕事に追われ時間に縛られている社会人にはその様な事を考える余裕は殆どない。考えてみれば自分にも幼い頃があった。大きいものは大きいと感動し、奇麗なものは奇麗と感動するそんな純粹な心をもっていたはずである。いつの間にかその心を無くしてしまっていた。合宿はそのなくした心を思い出す良い機会であった。感動した事に対し、人目を気にせず涙をながす。なんと素晴らしい事であろう。幼い頃の純粹な心は現代の日本においても無くしてはならない大切なものであると思う。

みもしらぬ友の集ひて語り合ふ阿蘇高原の暑き季節に

心身共にリフレッシュした

(社)福岡県中小企業経営者協会 井浦 猛 31歳

初めての参加であったが良さも悪しきも大変有意義であった。日頃あまり話し合うことの少ない話題について、ひざ付き合わせ、語り合えたことに感謝しながらも、こんな機会に、志を一つにもった仲間同士でしか話し合えないことに、不幸な日本を感じずにはられない。



閉会式で学生を代表して挨拶をする早稲田大学教育学部四年の伊藤佳恵さん。「この合宿で日本の美しいものをたくさん見せていただき、日本が大好きになりました」と語ってくれた。

ゆつくりとしたスケジュールに、心身共にリフレッシュさせて頂きました。

最終日好天に恵まれた朝の集ひにて

昇る日に元気なること感謝しつつ初心に戻り呼吸を正す

豊かな感性を育てていきたい

(榎エイコー 向笠高弘 30歳)

この合宿で感じたことは、先ず、当り前の日本人として日本の歴史を正しく学び、歴史に学ばなくてはならないという事である。学校で学んだ様な歴史ではなく真実の歴史に触れる事である。真実は何かを自分で探究し、歴史を知るという事は我々祖先の供養にもつながると思う。

次に、日本人が本来持っていた豊かな心の感性を育ててくなくてはならないという事である。日本人は豊かな自然と調和しながら感性を育て、日本文化を形成してきたという。この様な素晴らしい心を、なぜ現代の日本人は捨ててしまったのだろうか。私も今後は、いつでも心にゆとりを持ち、日々の感動を忘れないで持ち続け、私にとっても大切な感性を守り育てていこうと思う。

目に見ゆる草草木木に雲までもこれは真か疑ふ吾れ哀し

明日への活力を与へられた

(航空自衛隊 村山寿彦 59歳)

今年も充実した合宿を体験させて頂き、明日への活力を与

へられ、満ち足りた気分浸つてをります。

長内俊平先生や加納祐五先生のお話は本当に心に染みました。今年の諸先生の御講義では、日本の心、日本の文化について多くの示唆を頂き、改めて日本のこのころについて考へさせられ、認識を深め得た様に感じておます。

この合宿の成果を無にせぬ様、諸先生方の御指導をしっかりと受けとめて、私も極く当り前の日本人となれる様に、心を働かせた日々を生きてゆきたいと思ひます。

国武兄と同室になりて

久し振りに会ひたる友と寝起きして共に語るは樂しかりけり
友どちと共に寝起きし語りをれば青春の日々よみがへり来る

第二十五班―社会人―

友との語らいが楽しかった

(尚綱短期大学 武田栄華 21歳)

人前で話すことが苦手だった私にとつて、講義の後の班別研修が、最初は嫌な時間でした。しかし、諸先生方のすばらしい講義の後、班員のそれぞれの素直な意見を聞いて、何でも思つたことは、ありのまゝ率直に答えればいい、まとまりがなくてもはずかしいことではないんだということに気づかされ、また、話し合いを通して、様々なものの見方・考え方があり、人の意見を聞くことを受け入れることの大切さを改め

て感じました。そして何よりも班員との出会いをうれしく思いました。このハードなスケジュールを乗り越え楽しく学び過ごせたのも班員みんなのおかげです。班付きの先生方にも大変お世話になりました。この合宿で得たものを大切に、それを励みにがんばって行こうと思います。

さはやかな阿蘇の草原見渡せば朝日をあびて露輝けり

一生の友人ができた

(尚綱大学 劉 瓊華 27歳)

日本語はまだ未熟で、先生方の御講義を聞いても、なかなかその学問の深淵な境涯が理解できませんでした。しかし、周囲の皆から教えてもらって、又語り合ううちに、お互いの心聞き本音を話すことができるようになり、一生の友人が沢山できました。私は短歌を作るのが苦手ですが、何事も努力を惜んではいけないと感じました。回を重ねることによい短歌が詠めるようになればと思います。学べば学ぶほど、更に学ばなければならぬことが出て来ます。日本文学の勉強を続けて、もっと豊かな国際関係を築く力になればと思います。来月母国(台湾)に戻ってから、自分の目標に向かってまた一歩進むことになりました。そして、台湾と日本の文化交流の架け橋として活躍したいと思います。

清らかな心で紙に向へども作るに作れぬ短歌なるかな

カメラ・レポート26



主催者を代表して(社)国民文化研究会副理事長の上村和男先生が「合宿中に抱いた様々な疑問や思ひを心の中で育んで、友と心を開いて語り合ふ中から自分自身で解明していった」と語られた。

素直に「国を思う」気持を大切にしたい

(キューサイ柳) 稲田博子 28歳

「進めこのみち」「神洲不滅」この二つの歌に対して、私は今まで大東亜戦争時に戦意を高揚させるために意図的に使われた軍歌のようなものではないかという疑いと嫌悪感のようなものを持っていました。しかし今回の合宿を通して、そんな単純なものではないこと―昭和のはるか以前のあたり前の普通の日本人として素直に国を思う気持を歌ったものであること―を、頭でなく、実際に歌ってみて、肌で感じることでできました。このことは自分にとってかなりの驚きであり収穫です。二十歳を過ぎて未だに素直に物を感じる、ことができるのは恥ずかしい限りですが、この合宿を契機に、先入観なしに物事を感じる努力を続けていきたいと思えます。ありがとうございました。

合宿最終日の朝の集ひにて

朝風にはためく御国の日の丸を心新たに誇らしく仰ぐ

事実を追求する姿勢

(株)はせがわ 栗川恵美子 25歳

この合宿に参加していろいろな点で考えさせられる事が多かった。まず物事を見る角度は一つではないという事。日頃の生活の中で漠然とすごしていると、自己の主観の見方が先行し、それが当然であるかのような錯覚に陥りがちである。

それは大きな間違いだと痛感した。「常識」とは何か、大切なのは自分がどうとらえ、共感、反発等の過程を通して呼吸していかだ。自分自身納得の行かないまま全体に流されて生きていくたくはない。そのなれあいの繰り返しのなかでは、自分のすぐそばに存在する憂うべき事実に対しての問題意識は育たない。大事な事は、そこにおいて事実を追求していく姿勢だと思ふ。とても抽象的ではあるがそんな事を考えた。

班別研修にて

日いちにち経ちゆくほどに我が心語りたき事語るに語れず

真心を大切にしていきたい

(株)三井物産 松山知香子 23歳

昨年、班友のあたたかな真心に深く心を動かされた為今年も参加しようと決めていたが、もう一つの一歩大きな理由は、昨年は、自分の感動を掘りさげるのではなく、先生方の話された内容を追求する事で満足し、私自身の中に一つの価値観を別に構築し、それを持っている事が大切だと思い込んでおり、何か行動する時には、二つの価値観どちらに基づいたものかと思悩むようになっていた。それをすっきりさせたく、国文研合宿に参加したのだった。五日間様々な事を学んだ。少しだが自分が何に感動し、何を大切に思っているかがわかって来た。自分の信念と感動に嘘をつかない生き方をしていきたい。何よりも心をつかう真心も学んだ。大切にしていきたい。

友どちと心開きて語りあひ過こせし夜ぞ楽しかりける

真剣に心を尽くしていきたい

（熊本市立西原中学校 山方富美子 33歳）

国文研の合宿に参加させていたゞくときには、いつも、つい見失っていた懐しい「心」を思い起こします。日常生活の中では、忙しさを理由に、物事や人に対して真剣に心を尽くす事を忘れがちです。周囲の状況に不平や憤りを感じたり、欲や我が露出し、悶々とした日々を送ってしまいます。何に対しても感動する心を失ってはならないと思います。心で物事を感じ取るには、自分の心を開き多くの声に耳を傾けなければなりません。行動にうつすと勇氣が必要となります。その勇氣の原動力をこの合宿で与えていたゞきました。明日からまた仕事に臨むことになりましたが、今までの自分から一つ脱皮した形で、真心をもって日々過ごしていきたいと思っています。

何事も心動かし過ごすべく師の御言葉に教へられけり

カメラ・レポート 27



別れの時は来た。「お元気で！また会ひませう」再会を期して、暖かく友らを見送る。

合宿中に創作された「短歌詠草」

——しきしまのみち——



短歌創作について

この合宿教室では例年、主催者を含め参加者全員が短歌を作ることにしてをります。これは、この合宿教室の大きな特色であり、欠くことの出来ない大事な研修となっております。

短歌を詠むことを、古来から我が祖先たちは「敷島の道」と呼んでをりました。敷島とは日本のこと、日本人が踏むべき大切な道とされてゐたのです。千数百年の昔から、自分の内心を五七五七七の定型の中に、正直に、素直に、しかも人に訴へるしらべとしてうたひ上げることがを、人生の修業の一つと考へて来たやうです。ところが、現代においては、新聞歌壇等、その灯は消えてゐないものの、一般の人々には馴染みは薄く、殊に若い世代に至つては教科書で文学作品の一つとして学ぶくらのもので、自ら作つてみる対象とはおよそ見られてをりません。従つてこの合宿教室に初めて参加する学生青年諸君にとつては、いささか心の負担であるのも話なるかなです。しかし、合宿の日程を追ふにつれ、自らの心の動きを言葉にすることの難しさ、言葉に籠る奥深い味はひを多少なりとも体験して来たことで、実は短歌を作る上での心組みが已に各自の内に醸成されてゐたのでした。

人間にとつて最も根源的な心の問題を等閑に付してきた現代教育に対して、短歌創作のもつ意義はまことに浅からぬものがあり、「思想および表現の正確さを修練する」「人のこころを憶念する」といった学問の要諦が、短歌創作の過程で、またその後の班別相互批評でささやかながらも沁み沁みと実感されるのです。そして、短歌創作とその相互批評によつて、参加者同士の友情がどれほど深められるかは、体験者ならでは窺ひ知ることが出来ないのですが、学問と友情との分ちがたいつなかりをも、自づから感得せしめられ、参加者一同、言ひ知れない、ほのぼのとした喜びに包まれるのでした。

さて合宿三日目の午後、宝辺矢太郎氏（山口県立下松高校教諭）により短歌創作導入講義がなされ、短歌を作る上での基本的ルールが指導され、自分の歌を何度も読み直し、推敲・添削してゆく努力が強調されました。その後の散策を経て夕刻には短歌提出といふ忙しい日程ではありましたが、参加者は限られた時間内で一心に自分の真実の言葉を捜し、求めたので

した。壁に向かひ、天を仰ぎ、指を下りつつ自分の心と向き合つたのでした。提出された短歌は直ちに国民文化研究会の会員による選歌（原則として一人一首）、ガリ切り作業を通して翌日には三百首余りの載つた部厚い歌稿となつて全員に配布されました。そしてその歌稿をもとに、折田豊生氏（熊本市役所保健衛生局課長補佐）によつて、創作短歌全体批評がなされ、短歌批評のポイントとして、友だちの心を精一杯汲み取る努力をすること、元の言葉を出来るだけ尊重しつつ直してゆくことの二点が強調されました。正確に直されることによつて、歌がその「しらべ」と「いのち」を蘇らせてゆく過程を経験し、参加者一同、氏の厳しい指摘に驚くとともに心とむひとときを持つたのでした。その後、各々の班に別れて、班員同士の濃やかな相互批評が行はれました。合宿生活において寢食を共にし、胸中を披瀝し合つて来た班員にとつては合宿教室締め括りとも言ふべき時間帯です。自分の歌が組上に載せられるとは、自分の心を相手に向つて開け放つこと、まことに恥ずかしく面映いことではあります。自分の心をいろいろ汲んで言葉を直し直さうと心を碎いてくれる友の姿に気付くとき、有難いといふか、広やかな世界につながる喜びを、沁み沁みと実感するのです。短歌本来のもつ素晴らしい世界を経験できた、現代にあつては稀有な精神生活の体験といつていいでせう。

おたがひにうたのあやまちだしつつなごむ心よ何にたとへむ

この夜久正雄先生（『短歌のすすめ』の著者のお一人）のお歌にすべてが尽くされてをります。

ここに収録された歌の数々は、班員の心を結集して推敲・添削されたものです。その表現形式においては稚拙なところも見受けられますが、これらの短歌の中から瑞々しい貴重な魂の輝きをお読み取り下されば、と心から祈念する次第です。

短歌詠草（しきしまのみち） 合宿第一回目の創作作品

（参加学生の第二回目の作品）
（品は感想文の末尾に収録）

第一班

拓殖大外国語四 小林 広 幸

阿蘇の山我が見上ぐるは雄大にそびえ立ちたる阿蘇の山々

九州大経済一 石井 英 俊

重苦しく暗雲立ちこむる阿蘇山を悲しと思ふ姿見えねば

亜細亜大法三 黒須 武士

阿蘇を散策す

一面に広がる緑を見渡せば故郷の景色を思ひ出しけり

獨協大外国語三 斎藤 章 浩

若人に熱く語りて道示す我師の姿に我動かさる

第二班

ライセンスカレッジ二 江口 信一郎

あついなか汗かきながら見下ろした田んぼや家は気分爽快

成蹊大文一 中西 正 史

頂で景色を眺め息を吸ひ心たまらず空を吸ひ込む

早稲田大第二文一 浦 義 勝

霧雨に雲路ながめて見おろせば遙かに見ゆる雲間の光

福井工業大工三 増村 博文

阿蘇の地に学び語らふ友求め出会ひし事は真うれしき

亜細亜大法二 木内 博 一

天皇の御心思ひて我々は心豊かな日本へ帰らむ

第三班

東京大文三 東中野 多 聞

乗り遅れとり残されし恥づかしさ血の気引きつつ苦笑ひする

亜細亜大経済一 岸上 雅 之

我動く近くにとんぼ止まり来て此方を見をれり詠めとばかりに

京都大総合人間三 庭本 秀一郎

丘の上で歌を詠まむとしたれども心乱れて言葉出で来ず

高根大理二 新宮 一

私の近くとんぼ数匹飛び回り久々に見る夏の景色よ

早稲田大政治経済四 田中 裕 二

竹本忠雄先生のお話を聴きて雪にしなふ竹の如しと我が国ぶりを言の葉強く表はされたり

第四班

国民文化研究会 今村 武 人

台風のつめ跡見えず青々と伸びゆく稲の姿ぞうれし

宮崎大教育三 伊東 讓 二

雨露に濡れし草地を踏みしめて歩く我が身に涼風の吹く

日本大農獣医四 安東 高 明

国のため心くだきし益良夫のたけき姿に胸せ

まりくる

松陰の志をばしかと胸にきざりて生きむと我は決意す

駒沢大経済一 小早川 武 徳

阿蘇の宿に集ひし友と語りあひ山をし見れば心晴れやか

亜細亜大法一 神 澤 徹

あざやかに夏の田の色広がりに目にやきつきぬ阿蘇の緑が

日本大通信教育四 石 井 信 博

贄塚の頂で雨が降りて

だれひとり雨具の用意をせず来しに我れただひとりかさをさしたり

防衛大管理二 城 尾 和 彦

放送の言葉遣ひも丁寧にラッパも鳴らぬ阿蘇の楽園

第五班

国民文化研究会 坂 本 太 郎

一人また一人と集ひ来る班員のおもはを見やれば力出でにき

熊本学園大経済四 喜多村 純

竹本忠雄先生の御講義を拝聴して

国民とともに歩みし大君の御心永遠に忘れ

じと思ふ

同志社大商一 服 部 源 樹

仏座す遙か彼方の虚空より降りにし雨粒大地踊らす

鹿児島大農一 織 地 孝 幸

日文研の合宿に臨みて日々と金無駄にせぬため我思ふ何を学ぶかこの合宿で

東京法律専門法律二 浜 田 和 彦

大君の御光永遠に照り徹り日本の栄とならんと祈る

福岡大教員講座生 小 森 誠

班に來られし宝辺正久先生の語らるるお姿を拝見して

戦場へ言上げせず

涙せらるる流されし涙を押しわが胸に熱き何かごみ上げて來ぬ

折の天皇・皇后両陛下のお見舞ひのことをお聴きして

第六班

国民文化研究会 大日方 学

竹本忠雄先生の御講義にて阪神大震災の

励まししの御言葉聞きていかばかりいやされま

すか神戸の人々

国民の悲しみ苦しめみやし給ふ大御心に涙溢れく

東京工科大工三 石 澤 寛

雲間から差し込む光に照らされて青き稲穂は金色に輝く

日本大文理一 山 内 暁 生

贄塚でふと横見ればむらさきのおいと美しき花咲きたることよ

長崎大教育三 本 多 康 弘

全国のあまたの友らと阿蘇の地で出会へること胸はをどりぬ

福岡大人文四 河 野 俊 介

「大丈夫か」と疲勞極まる友を見て名前は知らねど思はず声をかけたる

ライセンスカレッジ二 高 田 信 一

日の本の誇りも高きもののふの猛き心を我も継ぎたし

慶応義塾大総政一 松 山 聡 一郎

真剣なる気持は常に持たまほし心の鏡澄まさん

がため

第七班

国民文化研究会 有村 浩明
贅塚にて

塚の上に友らと待てば雲されて夏日のひかり
さしそめにけり

島根大教育二 三 島 明

畑に出て働く祖父をにへづかに登る道々思ひ
浮かべし

鹿児島大農三 江 藤 秀夫

友とゆくこの道のりの短さよ歩き足りぬは我
ひとりかな

ライセンスカレッジ二 白 岩 友和

贅塚にのぼりて五岳眺むれば恥づかしからむ
雲に隠るる

法政大経済二 土 生 直樹

友どちと素直に心を語り合ふ喜び求めて再び
来りぬ

神奈川大経済三 和 田 一 弥

雄大に連なる山を見わたして自然のすごさを
痛感したり

早稲田大第一文二 川 杉 宏 行

にはか雨

皆々よいざよろこびてむきあはむ龍神さまが
降らすこの雨

第十一班

桜美林大国際四 星 野 有佳子
朝の集ひの挨拶をすることになりて

くたくたに疲れし体にむちを打ち夜更けし口
ビーで原稿を書く

悩みつつやつと仕上げし原稿を読み返しては
緊張高まる

北海道大農一 服 部 泰子

贅塚に登りて

雨にけぶる阿蘇の平野を見渡せば稲穂の緑の
うつくしきかな

新潟県立看護短大看護一 小 林 涼子

お日様のカンカン照りに目を細め犬は進むが
我は動けず

東北女子大家政三 鳥 谷 聡 美

草原を語り合ひつつ歩みては懐かしきこと頭
に浮かぶ

福岡教育大教育一 廣 瀬 正 美

発言に疑問の多き我を見る友の眼差し温かき
かな

第十二班

熊本大文院二 延 塚 恭子
贅塚よりの帰り道にて

高らかに汽笛鳴らし来SLに歓声あぐる先生
も友も

尚綱大文三 吉 本 玲子

遠くよりSLの音聞えきて我らが声も負けず
劣らず

東北女子短大生活一 渡 辺 芳子

吾が思ひ伝はらぬことのもどかしく涙あふる
るに友は目でうなづく

中村学園大家政一 藤 田 明子

それぞれの故郷への思ひを語りくる友らの
顔は自信にあふる

鹿児島大農一 葉 棚 奈緒子

先生方の熱き思ひにこたへむと学びゆきたし
しきしまのみち

第十三班

早稲田大教育四 伊 藤 佳 恵

仙台の祖父母に話さむ壇上で語りし父のその
言の葉を

実践女子大家政三 江 副 和美

はじめてと思へぬほどに親しまるる班友との
出会ひうれしかりけり

東北女子大家政三 斎 藤 由紀子

緊張と不安を胸にいだきつつも仲間
の笑顔に心安まる

東北女子短大生活二 生田目 優子

夏空に指をのびしてとんぼ追ひ友と笑ひし阿
蘇の思ひ出

亜細亜大法一 斎 藤 百合香

友どちととんぼに指を差しのべて自然ととも
にたはむるなり

武蔵野音楽大音楽一 小林 祐子

一面に緑広がるその中を友と楽しく語りゆき
けり

第十四班

国民文化研究会 清 水 久仁子

とんぼ飛ぶのどかなる道を歩みゆけばをさな
きころの思ひ出さるる

福岡教育大教育一 宇佐美 志 都

季節違ふしろつめ草は子を背負ふか細く強き
母のやうかな

中村学園大家政三 丸 山 順 子

「野いちご」と友の指さす方見れば草下かけ
に赤き実ありけり

東北女子大家政三 工 藤 尚 子

カルデラに一面広がる水田のその広大さに眼
細まる

亜細亜大法二 高 橋 雅 子

幼子も胸に手をあてて国を愛する新たなる時代
はいつ訪れむ

宮崎大教育二 高 尾 泰 子

一時の雨にあわてる人間をいだき悠然たるや
阿蘇の山々

青山学院大理工四 山 内 眞起子

あぜ道でとまつておくれと手を上に差しださ
ずとも寄りくるとんぼ

第十五班

国民文化研究会 レイヴィン 安希子

警報機あわてて走り近よらん列車の過ぐるを
心待ちにす

すぐさまにレールに耳あて音を聞く遠くへす
ざさる音おもしろし

東北女子短大保育二 新 山 美 樹

熊本の阿蘇に来たりて山に登る自然の中で友

と微笑む

東北女子大家政三 本 田 由布子

阿蘇の地を潤す雨が止みし時光り輝やく五岳
の姿

尚綱大文三 吉 村 みふゆ

雄大なる阿蘇の神々に包まれて吾の存在の微
微たるがごと

国立音楽大音楽三 羽 生 恵津子

先輩の声に振りむき見下ろせば葉の間にの
ぞく小さく赤き実

横浜国立大工一 坂 東 陽 子

雨空にタオル広がる友の肩の蠅も密かにお日
様を待つ

第二十一班

国民文化研究会 加 藤 善 之

贄塚の高みに立ちて大阿蘇の外輪山を飽かず
眺むる

遙かなる稲田美し風そよぐ阿蘇カルデラのう
まし国はも

安らげきこの国原の行く末の心にかかる世の
さまざまれば

さばへなすうからやからのさまざまえて時の間
おかず胸は痛むも

いかならむ世にはありとも立ち上る日本の神の力信ぜむ

(株) 多々良 近松 敬倫
生命ある人と人とははぐくむは生命宿りしこの大地かな

九州不動産専門学院 原田和典
小雨降る阿蘇の丘より北を見て夜泣させぬかと吾子を偲びぬ

福岡県立春日高校 豊原晋一
竹本先生の御講義を聴きて

西洋と違ふ日本の国柄を我が生徒らに如何に伝へむ

青年自由党本部 近藤 毅
アルコール飲みたいけれど禁止令夜のつどひを心より待つ

(株) はせがわ 黒川 貴司
さはやかな朝の光のその中に静かに登る日の本の旗

(株) 電発補償コンサルタント

黒木 光晴
阿蘇へ来て初めて外に出てみればはかつたやうに降り出した雨

第二十二班

国民文化研究会 松吉基順
不思議なるえにしに結ばれ若きらと集ひ語らふ大阿蘇の宿

いたらねど日の本心伝へむと若きらに語る思ひのたけを
声いだし若きらと共に「敗戦の克服」読みぬ心ひとつに

若きらの真摯なる言葉に正道まっぴらを求むる心の深きを思ふ

若きらの正道求むる心ありてゆくすゑゆるがじ我が日の本は

(株) 電発補償コンサルタント

三枝 祐介
先輩の熱き語りにふれるともその思ひまで受けとめられず

出光興産(株) 行成 俊光
宝辺先生の講義を受けて

大君の御歌に言葉つまらせし想ひに我もまた涙する

(有) 今村曙事務所 坂本 一 俊
費塚からの帰り

帰り道皆の列から外るれば子供は無邪気に水遊びせり

(株) はせがわ 甲斐 昭二
はるか北緑を知らぬ我が家族見せてあげたい自然の力

(株) 日本ジーニス 白浜 隆
友思ひ歩幅同じに進めども雨降りだせば我急ぐのみ

(株) 多々良 谷岡 正秀
山のほり来たたのほいいが雨降りてのほりてすぐに帰りて来たり

第二十三班

国民文化研究会 中田 一 義
かくまでも心に沁みる語りやうけい様兄ならではと唯唯うれし

(株) はせがわ 長谷川 大蔵
きつい道阿蘇でもどこでもきつい道早く帰りにてビール一杯

(株) 玄南荘 測上 高当
あまがへる道に飛び出し費塚にスクールを待ち歌を奏づる

福岡県立春日高校 國崎 昭 則
語らひて歩く友らの行く先に寝ておはします

釈迦の峰々

(社) 福岡県中小企業経営者協会

高田 哲

贄塚に友と登りて汗をかき美を美と言へる我を発見す

佐野 日本大学 高校 荒木 敏幸

贄塚に登りし道の草原に吹く風ほほに心地よかりき

第二十四班

国民文化研究会 村山 寿彦

贄塚の草をゆすりてすず風が阿蘇の谷間を吹きわたりゆく

ふるさとのにはひにもにてなつかしきいな田をわたり吹きさくる風は

尚綱学園本部 中村 敏郎

朝もやの阿蘇の大地をふみしめて友と語りし日本の未来

(株) エイコー 向笠 高弘

赤とんぼ自由を求めて飛ぶやうに己の道も導き給へ

宮崎神宮 木村 速穂

阿蘇の山見つつ贄塚にのぼり来てこのよきとさを友とわかちぬ

出光興産(株) 大三輪 晃

夏の日の蜻蛉群れ飛ぶ青田越え息をはづませる贄塚

(社) 福岡県中小企業経営者協会

井浦 猛

井の中の蛙と呼ばれ飛び出して渴きに負けて水を求むる

第二十五班

国民文化研究会 山方 富美子

松陰先生への母君の手紙

いつの世も子を思ふ母の御言葉は慈愛の心に満ちてあるなり

キューサイ(株) 稲田 博子

レクレーションに参加して

頂きに立ちて四方を見渡せば阿蘇の五岳は遙かに大きく

尚綱短期大学 武田 栄華

足もとに風に揺られて一輪のなでしこの花ものいいたげに

尚綱大学 劉 瓊華

まんまるなスイカ食らひてふと思ふビール腹した故郷の父

(株) はせがわ 栗川 恵美子

夏の田に泳ぐが如く赤とんぼ秋の気配に心静まる

三井物産(株) 松山 知香子

夏の稲ますぐにのびる水田の広がる阿蘇の道を歩けり

事務局

筑波大付属駒場高校二 青山 直篤

風邪の床にて

友がみなレクリエーションに往きにけるを独り床にて寂しかりけり

独り眠る床の上にて思ふのは封かんに追はるる仲間の姿なり

筑波大付属駒場高校二 小泉 守義

部屋で飲む一杯の茶に一息つき明日の仕事は何かと思ふ

筑波大付属駒場高校二 北岡 剛

草の上に友とうたた寝しつれども牛が来たりてあわてふためく

三池高校二 篠原 喜美子

長い旅お土産多く身につけてその後の自分の世界広がる

三池高校二西原葉子

雨の中みんなで歩く山道は自然のほひが満ちあふれてる

写真担当 田上富実子

ふり向けば刻々変はる阿蘇の峰あかず眺めて時間を忘るる

国民文化研究会

(社)国民文化研究会理事長 小田村寅二郎

伊藤哲夫・竹本忠雄両先生をお迎へして
ころろざし雄々しく気高き大人二人獅子吼せられきこの壇上ゆ

若きしも老いも挙りて聴き入りきみ心こもる
その雄叫びを

今のままの政治・外交・教育の正されざれば
み国危ふしと

同じ憂ひ国内になきにあらざれど要路の人ら
はいまだ気付かず

阿蘇の地に集ひしえにしかりそめと思はず進
まむ峻しき道を

元・日特金属工業(株) 常務取締役

加納祐五

合宿にて講義せむとて

わが思ひ若き友らに伝へむとひたにねがへど

いとつたなきを

つたなかれど六十とせあまり学びこし思ひま
すぐにただ語るのみ

(二回目の作品)

阿蘇の山けさは晴れつつ友の面輪さはやかに
見ゆけふ別かるるに

をちこちにわかれ住むともむすばれしころ
のきづなとけずもあらなむ

(株)宝辺商店代表取締役社長 宝辺正久

贅塚に登る

苧草の小野を登ればそこかしこ撫子咲けり路
のほとりに

驚が峯のロッククライミングを語る友の声を
聞きつつ汗垂り登る

霧雨の来たりて過ぎつ草山の頂きにして汗拭
ふとき

頂きに生える茅草の尖り葉に露おき光る夕立
のあと

阿蘇谷の広き青田を見さけつつ風に吹かれぬ
友とならびて

大阿蘇の根子岳の峰さやけくも空に立つかな
夏草の果に

(二回目の作品)

伊藤佳恵さん(早大・教・四年)の閉会
の挨拶

靖国の神の母達みまからばわれらまつりを継
ぎなむといふ

み子ささげし母のてがみを語りつつ涙のごひ
ぬ君もわれらも

大阿蘇の夏草の野を吹く風のさはやかに君は
のべをはりけり

元・九州造形短期大学教授 小柳陽太郎

山田輝彦大兄に

今もかもみんなみのみ空はるかにも合宿の友
らしのびますらむ

病癒えゆきませどさらにみなぎる力をと念じ
つ、思ふ君があけくれ

ほとばしるおもひ語りゆく若き講師のことば
を君にと切に思ひき(伊藤先生)

君まさば胸とどろかして聞きまさむたくひま
れなる今日の御講義(竹本先生)

合宿も三日目の夕べ迫りきてみたままつりの
時近づきぬ

ふたたびを合宿の地に学びあふ時をと祈る早
も癒えませ

(二回目の作品)

加納祐五先生の御講義

今日もまた君が教へに導かれすがしき世界に
ひたるうれしき

遠き日に思ひを馳せて切々と語りゆきます君
がみこころ

生涯のおもひかたむけて語りゆく君がみこと
ばに胸熱きかも

清らかのせせらぎ時に激しつづ流れゆくさま
偲びつ、聞く

(社)国民文化研究会事務局長 長 内 俊 平

妻への便りのはしに(二)(七月三十一日)

熊本空港着・徳水、白浜両氏迎へて下さ
る

降りたてる肥後の國原空澄みて阿蘇の群山
浮きたつ如し

友としはし佇ちて眺むる阿蘇山の深き緑の眼
に沁みつ

語りあひつ、憩ふしばしをひぐらしの森のか
なたゆなく声聞こゆ

風のまに山のなだりの草なびき頂さして移り
ゆくみゆ

妻への便りのはしに(二)(八月二日朝)
友と佇つあしたの庭の霧深く空にのこれる月
のすずしき

外輪山の裾野をこめて立つ霧のかつうすれゆ

く朝の風に

(二回目の作品)

大阿蘇を望む宿舎に営みし合宿教室今終らむ
とす

集ひたる人少なかれ心通ふ合宿なりしとし
みに思ふ

部屋に廊に礼を互に交し合ひし若きらの面
影心はなれず

それぞれの持ち場持ち場を努めりし友らの
姿もまた浮び来る

壇上に立たれし先生のみ姿も今ははるかなる
昔のごとし

おのおの心も心に期するもの一つ抱きて今日
を分れ行かむ

朝夕に仰ぎ望みし大阿蘇に深く礼して分れ
行かむ

尚綱学園監事 徳 永 正 巳

乙女等とカハラナデシコ乱れ咲く阿蘇の野山
を草分け登る

乙女等と笑みつ語りつ足軽く野山を行けば心
楽しも

そよ風の吹き渡り来る丘の上ゆ阿蘇の五岳を
見はるかすかな

(二回目の作品)

加納祐五先生の御来講に感謝して

老いの身をはるばるお越し給ひたる師の御姿
のいたましきかな

六十年の念ひのたけをしみじみと語らひ給ひ
し大人有難き

一筋の道を究めし六十年の御生命の炎継ぎて
行かまし

拓殖大学総長 小田村 四 郎

贅塚に向ふ小径の両側に田の面ひろがりあき
つ飛びかふ

緑なす田の面の中を樂しげに若き友らは語ら
ひつづゆく

高岳に雲のかかりて寝ほとけの阿蘇の五岳の
見えずくやしき

なつかしき汽笛一声ひびきたり此の阿蘇の地
に汽車の走るか

ややありて黒き煙を吹き上げつつ汽車走り来
ぬ懐かしきかな

走りゆく汽車に向ひて手を振れば機関士もこ
たへて我に手をふる

幼き日また若き日に亡き父と旅せしことの思
ひ出でらる

(二回目の作品)

この朝空澄みわたり緑なす阿蘇の五岳のあざ

やかに見ゆ

昨日まで垂れ下りたる日の丸も朝日に映えつ
つ風にひらめく

日の本に生れし喜び共にするこの合宿も今日
で終りぬ

みおやより受けつぎ来れるこの国の尊き手ぶ
り護らざらめや

(株)千代田コンサルタント専務取締役

上村 和男

野間兄を偲ぶ

鳴く蟬のはげしくなりしグラランドに齋庭をつ
くる君偲びつつ

幾年も齋庭づくりにはげみましし君はいまさ
ず淋しさつのる

心こめ齋庭づくりにあれこれと指図せし君今
はいまさず

友どちとつくりし今宵の齋庭べにみ祖先おやと共
に君も来まさむ

(二回目の作品)

阿蘇五岳の下で

カルデラの東の空ゆさしのぼる朝の光の五岳
を照らす

赤々と上る朝日のみどりなすみ山に映えて美
しく見ゆ

みどりなす五岳のみ山眺めつつすごせし五日

もなつかしく思ふ

をちこちゆ集ひ来し友どちも別れとなりぬ今
日を限りに

よき友をもつがうれしきこの集ひいついつま
でも続けゆかなむ

神奈川県立百合丘高校校長 国武 忠彦
涼風のさわやかに吹く大阿蘇の青田の道を語
らひ歩む

大阿蘇の峰仰ぎつつ友どちと語らひながら丘
に登りぬ

(二回目の作品)

白き雲外輪山に輝くととき友と別れのあいさつ
をする

日商岩井(株)ガス・石炭本部副部長

澤部 寿孫

合宿三日目、慰霊祭の準備をする

うす曇る空仰ぎつつみまつりの齋場しつらふ
友らとともに

去年の夏こつぜんとして逝きし友いまなつか
しく思ひ出さるる

友の指揮する声を聞きつつみ祭の齋場こしら
へし二年前は

「おい澤部」と友の呼ぶ声いまにしも聞こゆ
る心地するがかなしき

大阿蘇の麓のさやけき草原にトンボ群れ飛び

蟬鳴きしきる

(二回目の作品)

朝
澄み渡る空を仰ぎぬ合宿ははや最終日の朝あした

迎へて
「全体感想自由発表」
若きらの次々に立ち喜びを語るを聞けば嬉し
かりけり

伊藤大人竹本大人に告げまほし若き友らの語
りしことを

合宿の火は絶やすまじとこしへの生命にふる
る場ばにありせば

神奈川県立厚木南高校

山内 健生

妻もわれもともに学びし合宿に吾子らとみた
び集ひ来にけり

この夏もつねと変わらず合宿に集ひ来たるをみ
たまに告げん(亡き妻へ)

み友らと吾子らと居ならび御講義を聴きをる

折々すぎし日浮かび来
思はずも過ぎしことども蘇りうつつのわが身
がなほ夢のごと

(二回目の作品)

三番目の次男もここに集ひ来て我が家の五人
はみな経験者

いかほどに受けとめをるかはともかくも次男

もここに集ふがうれし
兄弟につづきて次男も合宿に集ふをよろこぶ
亡き妻思ふ

伊藤哲夫先生、十一班の班室に来たまふ
思はずも師の来たまへばたちまちに緊張感の
部屋内に満つ

学生の問ひに応へて熱をこめ手振りを添へて
ぞ説きたまへたり

国思ふ深きみ懐ひの自づから溢るるままに伝
はりて来る

閉会式を前に

すぎし日のことども思へばさらにまたわが
先々の想はるるなり

己が身の明日をおもへばさらにまた帰らぬ過
ぎし日蘇り来る

蘇る日々を思へば重なりてあすの我が身がま
たも想はる

(株)講談社広告局次長 磯 貝 保 博

ハイキングの折に

悠久のいにしへ思ひつつ眺むれば阿蘇の五岳
のおごそかに見ゆ

はるかなる外輪山のふもとまで青田つづきぬ
阿蘇の広野は

うつしゑを撮りかはししつづ班友の笑顔を見
れば心たのしも

遠くより汽笛とともに走りゆく列車の姿のど
かなるかな

(二回目の作品)

心よすあまたの人のみちからでいとなみつづ
くこの合宿はも

我もまた心あらたに合宿のいとなみつづけん
手だて尽くして

中島法律事務所 中 島 繁 樹

慰霊祭の準備のため阿蘇神社を訪ぬ

ひもろぎを借り受けむとて大阿蘇の鎮守の杜
を我は訪ひたり

訪れし阿蘇の社の広庭のここやかしここに詣づ
る人見ゆ

(二回目の作品)

世にぞ立つ力なるべし合宿はこころ通はせ学
び得たれば

福岡県立嘉穂高校 小 野 吉 宣

頂上をめざして登る真夏日に小雨降り来て涼
しかりけり

みほとけの眠れる姿さながらに阿蘇の五岳の
よこたはるみゆ

(二回目の作品)

「閉会式」で伊藤佳恵さん(早大・教・
四年)の挨拶を聞きて

大学の一年の夏父母は無理に勧むやこの合宿

に

泣きながら参加せしてふあの夏をふりかへり
つつ話しいだしぬ

すなほなる感謝の気持ちをも両親にあらはした
きと皆に語るも

ゆたかなる心の成長願はるるみ親の胸内し
ばるるかな

亜細亜大学教授 東中野 修 道

伊藤哲夫先生の御講義を聴きて

戦ひを何とか避けむと努めしも逆へ逆へと日
本は向かひぬ

かくぞして起ちし日本の戦ひは国難なりきを
説き給ふかな

最後まで脱落せず全国民戦ひけるは希有に
でありきと

(二回目の作品)

窓の外は夏の稲田の延々とみどりに映えて阿
蘇は美しくし

やうやくに合宿終る明日からは新たな思ひに
生きなむとぞ思ふ

不完全なるおのが世界ゆ一筋に工夫を凝らせ
力の限り

(株)大成建設 山 口 秀 範

朝の集ひにて

昨夜来の激しき雨に洗はれし朝の空気はいや

澄み渡る

雨露をしとど吸ひたる下草のさ緑色は目にも
やさしく

「さはやかにたまほしきはこころ」ぞと職
の御歌仰げばすがし

御歌よみ思ひを述ぶる乙女子の声はさやかに
広場に響けり

日の御旗捧げ持ちたる同窓の友の横顔頼もし
と見つ

熊本市役所 折田 豊生
緑なす阿蘇の国原すみわたる空をあふげば心
放たる

思ふこと思ふがままに語りつつただし合ひな
むはらからのごと

悲しとも思へどつつにまがごとはさはに起
これり国の内外に

(二回目の作品)
師の君や友らの力寄せ合ひて今年も集ひの実
りありけり

天がけるみたまのご加護もありぬべしうせた
る友を思ひ出でけり

熊本県立第二高等学校教諭

白濱 裕

與島誠央兄の「合宿を顧みて」を聞きて
「話し振り」に人のまことはあらはれむと述

べます君の面輪すがしも

くさぐさに心砕きてつとめ来し君の苦勞の偲
ばるかな

(株)中央塩ビ製作所代表取締役会長
星野 貢
散策の野道の丘のいたゞきにすゝ風わたる心
地よきかな

くばられしお茶頂きながら美しき四方の景色
をただに眺むる

汗ふきつゝ登りつきたる頂にしばし安らぎ友
と語らふ

(二回目の作品)
年ごとに相まみえては変りなきみ友の情けに
生かさしめらる

不動産鑑定士 松吉 基順
大阿蘇に集ひし友ら様々の生きのあかしか語
らひつきず

(二回目の作品)
集ひをはりさかりて暮せど正道まことみちを求めはげ
めや若き友らよ

正午自宅発、二十三時合宿地着
舞岡八幡宮 関 正臣

漸くに宿に着きけり此の年も亦合宿に加はら
んとて

年老いししなるらむ珍らかにいささか疲

れて宿に入りけり

明日よりは我を励まし若き等と共に究めむみ
民の道を

(二回目の作品)
「全体感想自由発表」での渡辺芳子(東
北女短大・生活・二年)、服部泰子(北
大・農・二年)両嬢の発言にふれて

さくままにおのづと涙にじみけりか弱き乙女
の歎へ言に

竹本忠雄先生の御講義を受けて
一人だも落伍者無かりしそのかみをともしと
思ふ平成八年に

福岡県教育協議会・事務局長
小林 國男

「国難」てふ言葉使ひて先輩の苦闘しのびゆ
く伊藤大人うしはも

「国難」にまともに当りたぢろがらず国守り来
し先輩達と

戦ひは敗れたれども全力を尽して戦ひし国に
あらずやと

大君のまけのまにまに一齐いっせいに戈ほこを収めしわ
がくになりと

「国難」てふ言葉かしこし戦前のみ国の姿の
よみがへりきて

(二回目の作品)

「班別短歌相互批評」にて

班員の短歌を見つめ全員で心ひとつに直しゆきけり

四苦八苦時間をかけて全員で一首の歌の言葉

探すも

一首一首に友の心をしのびつつ言葉を選ぶ作

業つづくも

一首一首の歌の姿の次々とよりよき姿となり

ゆくうれし

班員の各自の歌の仕上がりて協力の成果かた

ちとなりぬ

期せずして拍手おこりぬ一斉に相互批評の任

務終れば

高千穂商科大学講師 名越 二荒之助

いつかしき神の山なり根子岳は雲か煙か流れ

てやまず

大阿蘇に広がる原野は霧こもり神々の里うつ

つに偲ばる

万葉の昔思ひぬ班員の乙女子我に野いちごく

れたり

神聖の國づくりこそ日本の本の使命と説かれし

言の葉忘れじ

(二回目の作品)

若きらと阿蘇を集ひてあきらめしこのまごこ

ろの消ゆる日あらめや

日の本の津々浦々に遺りたるみおやのいのち

に光当てなむ

元・佐賀県立佐賀商業高等学校教諭

末次 祐司

母君より松陰先生へ送りたる書簡を読み

て

食たちしわが子憂ひてつゞりたる文をし読め

ば涙こみあぐ

母君の祈りこめたるみことばに先生の心いか

にありけむ

年老いて病の身をかへりみず走らせ給ふ筆

ぞ尊き

(二回目の作品)

「閉会式」にて

高らかに心ひとつに唱ひたる君が代の歌胸に

ひびけり

先だちし友を偲びつつつぎつぎにうけつぎゆ

かむわれらが道を

この道は消ゆることあらじ共々に心ひらきて

進みゆかなば

元・サンデン交通(株)・取締役

加藤 善之

(二回目の作品)

打ちなびく田の面の稲のカルデラに未安かれ

とたゞに祈るも

浄土真宗光隆寺 岡 棟

賢塚に登りて

なつかしき五岳みまほしく腰おさへ友らの後

を追ひて登りぬ

なき先輩もめでし五岳をながむれば高岳の頂

に雲たれ下りぬ

峯つづく山なみかなたに横たはり入道雲の湧

き立ちて見ゆ

(二回目の作品)

ひと年もこの合宿に思ひこめつくしましし委

員長なるかな

國思ひ若きら思ふ心より合宿開きし委員長と

ほとし

乃木神社宮司 松 吉 宣 和

いみ 斎竹に注連繩張り回り四垂さげて神霊迎へ

の神籬立てぬ

(二回目の作品)

合宿に参加して

なつかしき友に会ひたる合宿も終はりてかは

すあつきあいさつ

遠近ゆ集ひ来たりし友どちとけふ賢塚で歌を

よみたり

慰霊祭

目にみえぬみたま招きしみまつりに頭たれた

り心ひとつに

航空自衛隊航空教育隊生徒隊

村山寿彦

(二回目の作品)

国武兄と同室になりて

久し振りに会ひたる友と寝起きして共に語る
は楽しかりけり

友どちと共に寝起きし語りをれば青春の日々
よみがへり来る

(株)B S 金明代表取締役 中田 一 義

(二回目の作品)

加納祐五先生の御講義を拝聴して

一言も聴きもらさじと見あぐるも涙あふれて
御姿かすみぬ

(株)福岡県中小企業経営者協会

小早川 明德

雨あがりの朝の集ひのすがしさに夕べの大人
(理事長)の宣言を思ふ

「いい顔をしたやつ(青年)ばかり」とほめ
られて共に来し友を誇りに思ふ

(二回目の作品)

着席し息子はいづくと目で追ひて心安らぐう
しろ姿に

廊下にて無言のまま目を交はす吾子のしぐ
さも面はゆく見ゆ

しみじみと息子は語りぬ班別で心通ひし短歌
の批評を

大阿蘇で人の誠にふれし吾子は涙ながらに師
友を語る

拓殖大学教授 松本 幹 男

朝の集ひの星野有佳子さんへ

のびのびと思ふがままに述べらるる飾らぬ姿
すがすがしく見き

(二回目の作品)

中田一義先生にお目にかかりて

師の君のはほゑむを見てひととせの心の重荷
吹き飛びにけり

亜細亜大学 山田 健 一

昨年の合宿以来の再会にたちまちにして心か
よひぬ

(二回目の作品)

夜の集ひ

師と友と声をあはせて歌ひけり「進めこの道」
「神洲不滅」を

若さらに負けじと声を励ましつ歌ひてうれし
最後の夜に

全体感想自由発表

若さらに声をつまらせつ話しける言の葉草は
心に染みぬ

この幾日共に学びし若きらのそのすなほなる

言の葉忘れし

(株)講談社校閲局校閲第三部部长

藤井 貢

朝の集ひにて

朝露を踏みつつ友と集へれば待ちかねしごと
夏あかね舞ふ

雲の間ゆ外輪山を照り染むる朝の光のおだや
かにして

福岡県立門司高校教諭 坂口 秀 俊

與島誠央君へ

こまやかに心くだきて運営をつかさどる君の
ありがたきかな

伊佐ホームズ(株)取締役社長

伊 佐 裕

伊藤哲夫先生の御講義を聞きて
師の君は祖国の行末案じつつ若き友らに語り
賜ひし

霧はれて大き稜線げざやかに緑さやけき阿蘇
の山々

熊本県立球磨農業高校 田之上 正 明

短歌創作導入講義にて「敗戦国の君主が
国民を励ますために全国をめぐるしこと
ありしや」と問はるるを聞きて

かかること外国にてはなかりしと声つまら
せて話されにけり

話さるる君の言の葉聞くうちに昔見たりし映像浮かびく

天皇のみ歌と国民の迎ふる姿の重なりて胸内あつくこみ上げて来ぬ

(二回目の作品)

山口秀範さんがナイジェリアで建設工
をする前に地鎮祭を執り行つたお話を聞
きて

地鎮祭をとりおこなふ前の夜に祭文一人で書
きあげしとふ

祭壇のまはりの竹は木の枝で代へて作りて齋
庭にせしとふ

当日は現地の人で黒山の人垣できて祭り見し
とふ

外国で仕事始むる人々の心に張りや出来しな
らむ

山口県立下松高校 宝 辺 矢太郎
田村亮子選手を映画に見る

メインボールのまなかにある日の丸をあふ
ぐ口もと切りむすびたり

そだてくれしあまたの人ら日のみ旗にかさな
りくるとぞなみだぐましも

日のみ旗あふぎつつきく君が代に日の本にあ
れし幸をし言ひき

国のためにあらずたのしみてこよといふ人ら

きけよかしをとめの言葉

国背負ふつらさにたへてはげみすをとめを
をしきただにたたへり

(二回目の作品)

伊藤佳恵さん(早大・教育・四年)の閉
会挨拶を聞く

このくににたねのこさずてちりましますら
をのたまだれかまつれると

やすくにねぶるふたりのかなしごにかたり
かくるる老いははに泣く

久留米大学付設高校 名 和 長 泰
朝露の光る芝生に広がりて体操すれば土やは
らかし

(二回目の作品)

今朝は晴れ澄みわたりたる大阿蘇の山の緑の
うるはしきかな

心こめ合宿教室運営につとむる友らのありが
たきかな

亜細亜大学 平 横 明 人
贅塚に登りて行けばをちこちに可憐に咲きし

ピンクの花見ゆ
ホテルに帰りて

フロントで花を見せつつ名を問へば電話をか
けて調べたまひぬ

ややありて「シエリーベビー」と花の名を教

へてくれしホテルの人は

(二回目の作品)

女子十三班の班付になりて

早乙女は心の思ひをめぐらせてまどめがつけ
ばまづうなづきにけり

うなづきて思ひの丈を伝へんとかみしめる様
に述ぶる早乙女

乙女らのまなこ光りて語り合ふそのさまいと
ど美しきかな

大牟田市立橋中学校 西 原 正 博

紙折りと封筒詰めの仕事なれど高校生等は楽
しげにしつ

要領を得れば仕事も早まりて談笑しつつ拂り
てゆく

(二回目の作品)

霊祭の準備もすべて整ひて心静かにはじまり
を待つ

霊前に供へまつれる海山の幸しか手に持ちつ
ぎへと渡しぬ

福岡県立水産高校 菅 原 亨 二
短歌創作導入講義(宝辺矢太郎先生)を
聴きて

誰にでもやまとの歌は詠めますと笑みをうか
べて語り給ひし

(二回目の作品)

全体感想発表を聴きて

つぎつぎとおもひのたけを語らるる班員ともの姿をうれしとぞ見ゆ

まずぐなる心で語る班員ともどちに共に学びし合宿をおもふ

日産自動車(株) 内 海 勝 彦

山口秀範先輩の「慰霊祭の説明」を拝聴して

目に見えぬ存在ありしを実験で示されし試み斬新にして

この歌を聞くたびいつも泣けますとふ先輩のことば胸に迫りぬ

くさぐさにくふうをこらし心こめ語らるる姿尊かりけり

(二回目の作品)

最後の班別懇談で浦 義勝君(早大・二文・一年)の話すを聞きて

思ふこと伝はざりしを人のせゐにしてゐたと君は友に語りぬ

何故に伝はざりしとくやしさに涙流して黙せし君が

己が身を思つてくれる友がある喜び切に語る君はも

かくまでに深き思ひの合宿を送りしことをし

のべばうれし

北九州市立八幡病院 森 田 仁 士

二年ぶりに再会せし後輩へ

久しぶりいかにありしと問ふ我にまだ四年生とはにかみし君

就職のきびしくあるもおのが道をきりひらき行け心鍛へて

(二回目の作品)

「慰霊祭」の折、電気系統が故障して

ごぞの秋うせにし父もこの庭におとなひ来ますかこころ待ちにす

阿蘇の地のしじまの中にこころ鎮めみ霊祭りの時を待ちたり

さはあれど予期せぬ障りに驚きて我の任務と駆け出だしけり

くちをしき電気故障に應ぜん走り廻れば息のあがりぬ

心しづめみ霊求めんと努めども息のあがるが口惜しかりき

(株)日本興業銀行 小 柳 志乃夫

講義を終へて 今日この話の為に数々の助言をくれし友を

し思ふ(東京・山根兄) 弱き生を送れる吾に松陰を語る資格のありやと悩みき

松陰をしたひ生きこしわが友の助けにやうやく講義はなりぬ

つたなかる話なりしも「よかつた」と若きらいふを聞けばうれしき

(二回目の作品)

與島運営委員長の「合宿を顧みて」に母君の話聞いて

熱出せし幼き君を裸にし裸のせなかに負ひませしとふ

ふれる肌を通して熱はうつりゆき母君はしはし寝込みませしとふ

体弱き幼き君を身を捨てて育みませし母君思ふ

羽後信用金庫 須 田 清 文

鳥海山の山肌緑にかがやきてそびゆるみ姿はるか望みぬ

雲の間ゆそびえたちたる富士の嶺気高き姿望みつ、ゆく

(二回目の作品)

夜の集ひで亜大学生歌を皆で壇上で歌ひて

学生も卒業生もあひつどひうたひゆくかな亜大学生歌

もろともにはげみあひたるときのこと思ひ出ださる皆とうたへば

おもはずに涙こぼれぬさまさまの思ひ出むね
にあふれきたりて

福岡大学医学部 古井 博明

松陰に思ふ

行ひしことはことごとやぶれしも言葉はのち
まで生きてありけり

(二回目の作品)

小柳志乃夫兄の「輪読導入講義」を聞き
て

松陰のなほき心が活き活き浮び来たりて涙流
るる

松陰の残せし言の葉ちからに充ちて我の迷ひ
も晴るるここちす

為せしこといや次々に破れしも言の葉のちま
で生きてありけり

(株)日立製作所日立研究所エネルギー第一部

松井 哲也

小柳志乃夫先輩の輪読導入講義をお聞き
して

憂ふとも事益なくば真実の憂ひにあらずと松
陰は記しぬ

真実の憂ひであれば為す所必ずありと松陰は
記しぬ

松陰の厳しき言葉せまりきて思はず汗のじ
み来たりぬ

拓殖大学 服部 朋秋
湯舟より望みし阿蘇の山々に心和ぎ疲れも忘
る

(二回目の作品)

貴かる神を仰ぎし民族の誇り覚ゆる阿蘇の字
び舎

先人の成せし偉業を次世代に伝へ守らん敷き
鳥の道

新たなる友を得たりし喜びに阿蘇の煙も高く
見ゆるも

日章工業(株) 藤 新成 信

ホテルより贅塚まで散策して
花つけし稲穂の道を友とちと語らひ乍ら歩む
楽しさ

青草をふみ分け坂をのほり行く涼しき風を肌
に受けつつ

のほり来てふりかへり見ればかなたなる阿蘇
の五岳はつらなりて見ゆ

出光興産(株) 山田 幸治

国武先生と散策
こちよき風ふきとんば舞ふ道を師と語らひ
つつ歩む喜び

(二回目の作品)

最終日、川杉宏行君(早大文二年)の所
感発表を聞きて

こみあぐる思ひのたけをとつとつと語る言の
葉胸せまりくる

今はなき父に生きざまみせたと涙こらへて
語る君はも

福岡県立春日高校 與 鳥 誠 央
次々と席に着きゆく学生の中になつかしき教
へ子の見ゆ

朝夕は新聞配り睡眠も削るとふ君たくましく
見ゆ

「浦君」と声をかくれば吾に気づき「先生」
と応ふるなつかしきかな

ゑまひつつ交はず握手はおのづからうれしき
ままに力こもりぬ

(二回目の作品)

夏合宿終了
友みなのおつきみ情謝しまつり心の中で手を
合はすかも

(株)熊本製粉 吉村 浩之
徳永先生を御見受けして

老いし身をおしてゆかれし師の姿別れし後も
忘らえぬかも

(二回目作品)

外輪の峠越ゆれば大阿蘇の緑の山裾あざやかに見ゆ

タマボリ(株)ラミネート営業部

吉川 理夫

ご講義の後の伊藤哲夫先生、班別研修会に参加される。

祖父母から気持ちの離るる学問は学ぶ価値なしと師は宣へり

尚綱高校 大塚 千春

あきあかね群れ交ふ野辺は夏もはや過ぎゆくしられ名残惜しきかな

(二回目作品)

何を思ひ鳴きわたりなむひぐらしにわれを忘れてしばし聞き入る

人のため尽せし人の思ひ聞く我を生ませし父と重ねて

熊本県立菊池高校 川上 良尚

宝辺正久先生のお話を聞く

先人の戦ひのさま聞きながら熱き思ひが体に溢るる

湯上がり阿蘇の山なみなむれば一日の疲れ流れ去りゆく

若者のはつらつとした語らひに励まされつつ

学び深むる

慰霊祭の準備に参加して

汗流し準備に励む先輩の教へ大事に心に刻む

(二回目作品)

「吉田松陰に学ぶ」のご講義を聞きて

師に習ひ憂ふる時にも喜びを感じて生きる心持ちたし

長内俊平先生のご講義を聞きて

先生の声高らかに響きわたり心の糸もともにふるゆる

安信住宅販売(株) 松吉 基光

宝辺矢太郎先生の講義

歌の心かみくだきつつとつとつと話すみ姿清々しきかな

とつとつと話すことばに聴き入れればおのが心も清しくなりき

(二回目作品)

加納祐五先生のご講義をお聞きして

伯父の歌涙とともに読みあぐる師のみ心のありがたきかな

伯父の五十回忌に諸先輩を迎ふる(山口

県の大島にて)

大島を巡る車中で人々は昔話に花を咲かせり山頂ゆ瀬戸内の海を歓声を挙げつつ皆は眺めやるなり

二とせ前島内めぐりし森田大人みまかりぬると聞けば悲しも

森田大人は大島の旅を思ひ出し常々うからに語りをしと

五十回忌に伯父の友の来ませるをただひたすらにありがたしと思ふ

熊本県立天草高校 今村 武人

(二回目作品)

をちこちゆ集ひ語りし友どちとしばしの別れさみしとぞ思ふ

鹿児島市市役所企画調整課 有村 浩明

(二回目作品)

加納先生のご講義を聞きて

澄ましえぬ水にわが身は沈むともとみうたよみあげ黙したまひぬ

すめろぎは御身を水に沈めさせたまひぬと師はのたまひぬかな

吾がために御身を水に沈めさせたまひぬと師ののたまひしごと

師の君のみおもひ胸にせまりきてあつき涙のこみあげてきぬ

神奈川県立津久井高校 大日方 学

(二回目的作品)

與島運営委員会の「合宿を顧みて」の折りに

壇上に立ちて参加者一同に顔みせ給へと先輩

はのたまひぬ

ほほゑみてこちら見らるる先輩に自づと涙の流れてやまず

人皆のわが身思はぬいたつきにこの合宿は支

へられたり

(株)新井組・千葉営業所 垣 迫 太 市

小柳志乃夫先輩の「輪読導入講義」を開

きて

妹の手紙を読みとむせび泣く松陰の姿見が

如しも

妹のみこころ偲びて「よもすがら寝入り申さ

ず」と記すますらを

熊本市立西原中学校 山 方 富美子

(二回目的作品)

何事も心動かし過ごすべく師のお言葉に教へ

られけり

熊本地方法務局 徳 田 恒 稔

をちこちゆ集ひ来たりて合宿を成功させむと

努むる友らは

夜更けまで友らと語る学生の元気なる声遙か

に聞こゆ

(二回目的作品)

もろもろの障りを越えて集ひ来る人らのため

にと我は努めり

熊本県立宇土高校 久保田 真

朝日さし晴れ渡りたる大空に緑映えたつ阿蘇

の山々

(二回目的作品)

加納祐五先生が御講義の中で「心を動か

せる努力が最近の若者には足りない」と

語らるるを聞きて

やはらかき口調で語らる師の君の言の葉つよ

し胸にせまり来

八代郡泉村立泉中学校 坂 本 太 郎

(二回目的作品)

全員感想発表の折りに班員ほとんど発表

してくれて

壇上ゆ思ふがままに話しける班員みつづうれ

しく思ふ

一人また一人と前に登り立ち話す姿のありが

たきかな

(株)RKKコンピューターサービス

寺 岡 伸 純

雄大な阿蘇の山々仰ぎみて我の心もかくの

如あれ

(二回目的作品)

雄大な阿蘇の山々仰ぎみておのが心もかくあらまほし

(株)神戸製鋼所 北 村 公 一

吾一人部屋に残りて流れくるしらべに合せて

君が代唱へり

友

(二回目的作品)

いとまなきなりはひの中かけつけてくれたる

友の心根うれし

明日の朝また長崎に帰るとていくばくもなく

夜半に発ちゆく

(二回目的作品)

野良犬に我が手を出せば歩み寄り我の匂ひを

嗅ぎまはるなり

その頭そつとなでれば喜びて尻尾振りつつ我

が手を嘗むる

慶応義塾大学 西 山 博 文

雲たれて夕立の降るにへづかの坂ひたすらに

登りゆくなり

緑こき草海のごとあをあをと広がりをりに

へづかの丘

(二回目的作品)

友どちとむかしのことども語り合ふ直会の

御神酒みかみいただきながら

大牟田公共職業安定所 古川 広浩
しげりあふ草のあひ間に桃色のなでしこの花
あいらしく咲く

(二回目の作品)

加納祐五先生の御講義を拝聴して
師の君の御言葉胸にあたためてこれからの
日々を過ごさむとぞ思ふ

(株)アプライト マテリアル ジャパン

草野直樹

竹本忠雄先生の御講義

国民が死すら辞さずに護らむとするものこそ
が「神聖」なりけり

(二回目の作品)

指揮班

やうやくに閉会式は終れどもなすべきことの
あまたありけり
参加者のいとまを告ぐる声を背に事後の仕事
をこなし励めり

日本青年協議会 松岡篤志

開会式の小田村先生の御挨拶
百年も二百年も合宿を続けてほしいと師は語
ります

夫婦相和し朋友信する日の本の美しき姿あ
らはし出さむと

(二回目の作品)

長内先生の御講話

師の君は「ひとしめりするといいですね」と
お百姓さんに語りかけよと

高知市立城北中学校 中川 つぐみ

うたを詠む心は吾のゆく道をそまつにせぬた
めと師は語りゆく
さくさくと足音たてて山道を連なり歩くこと
の楽しき

(二回目の作品)

感じたることは言葉にならずとも友の涙はす
べて語れる
あいさつを交はす友らの笑顔にも学びしこと
の多くありけり

わが道を正しゆきたる合宿のためることなき
を心より願ふ

尚綱短期大学 講師 竹内倫子

(二回目の作品)

やさしさの奥に秘めたる迫力が言の葉となり
わが胸を打つ

久し振りに胸一杯に吸ひ込みし朝の空気はな
つかしきかな

(株)東芝製造システム営業部 丹羽 冬紀子

(二回目の作品)

いかにせば我も保てむ真実を掲げ続ける不屈
の精神

コロンビア学院 レイヴィン安希子

(二回目の作品)

わかれゆくことを惜しみて友どちいつかは
会はうと約束かはす
合宿を終へて阿蘇路を後にする吾れの心はこ
の青空のごと

合宿に寄せられた会員の短歌

前・厚木市長 足立原 茂徳

ひと日をへ眠りもとらず合宿の準備に注ぐみ
心尊し

合宿をすゝむる成果あがらずに只々恥ぢいる
わが思ひかな

長野県駒ヶ根市文化財団理事

宮脇昌三

尽すべき国の命の見ゆるまで若き心のたぎり
祈らむ

香川 亮二

当地雨降らず、西国は大雨の降るといふ
に(七月五日)

梅雨に入れど相模の国は雨ふらず水不足の便
りしきりに聞こゆ

すぐる日の阿蘇合宿は大雨の降りて開始の遅
れしことあり

窓の下を川の如くに雨水の流れゆくを見たり
合宿のはじめの日

雨風の中次々に集ふ参加者をたゞうれしくて
迎へたりけり

心つくし力つくしてなす業のみのり給へや陰
しかるとも

佐世保市役所 朝 永 清 之

ふりそそぐまなつびずしきあそだににこと
しもひらけるつどひうれしも

たゆまざるともらのはげみをいしずゑにささ
へられきしこれのつどひの

かたりあひまなびあひつつもるともにこころ
ふれあふつどひなれかし

くだちたるよをたださむのみともらのおもひ
をたばねてつとめますらむ

われはいまさかりてあれどひたすらになすべ
きことをはたさむとおもふも

国立病院九州医療センター 小 柳 左 門
行かざれば心は渴く師や友の懐かしき顔胸に

浮かびて

夏空に広がる曇を眺むれば阿蘇に集へる友ら
偲ばる

美しき大和言葉を噛みしめて豊かなる心育み
たまへ

あとがき

吹く風にも秋の深まりが感じられる今日この頃ですが、皆さんにはその後如何お過ごしでしょうか。雄大な阿蘇山麓で共に学び、語り合った「合宿教室」から早や二ヶ月半が過ぎようとしてをります。このたびやうやくこの『感想文集』を皆さんのお手許にお届け出来る運びになりました。この『感想文集』は、「合宿教室」の最後に「走り書き」して戴いた感想文と短歌を編集したものです。

編集作業は、まづ、それぞれの班の班長又は班付の方々（国民文化研究会会員）に、感想文と第二回の創作短歌を添削・編集していただくことから始めました。

皆さんお一人お一人の心のこもった文章・短歌を丹念に読み返し、編集してゆくことは神経を使い、時間のかかる作業ですが、皆さんがお書きになった生々しい言葉に心打たれ、同時に皆さんの緊張したあの時のお姿も思ひ出されました。それぞれの皆さんに編集していただいた編集方針は以下の通りです。

(一) 「感想文」について

原文をできるだけそのまま掲載することを

基本方針としました。ただし、ページ数の関係で執筆者のお心のうちが最も強く表現されてゐると思はれるところを摘録しました。文章の不明瞭なところは、執筆者のお気持を辿りながら、原文のニュアンスが損はれないやう慎重に加筆しました。なほ、「かなづかひ」については、原文を尊重し、漢字及び文法上の誤りについては訂正してをります。

(二) 「短歌」について

合宿では二回にわたって短歌をつくりましたが、第一回のもものは、全参加者それぞれ一首以上を洩れなく巻末の「短歌詠草」ところに収めました。また、この感想文の執筆の折につくつていただいた第二回目の短歌は、それぞれの感想文の末尾に入れました。感想文と同じく、文法上の誤り等は訂正いたしました。

この『感想文集』作成のためには、班長および班付の方々以外にも多くの方々のご協力を得ました。お忙しいお仕事の中で、休日や勤務終了後の時間をさいてご協力いただきました

市、大日方学、秋山信之、吉川理夫、土井郁

磨、茅野輝章、松田裕幸他の各氏に心から御礼申し上げます。

最後に、この『感想文集』の「あらまし」作成および第一回目の短歌の編集にご尽力いただいた国民文化研究会会員の諸氏に厚く御礼申し上げます。またカメラ・レポートの写真は福岡の田上富美子さんにお世話になりました。

いろいろな方々のご努力によって出来上がった『感想文集』を、ご精読下さるやう切願してやみません。

読み進むにつれて、「合宿教室」の四泊五日間の様々な経験が鮮明に甦ってくる事と思ひます。二ヶ月半前に阿蘇合宿で得た感動を単なる「思ひ出」に終らせることなく、起居を共にした真に語りうる友との交流に、また新たな学問の求道への出発点とされるやう切に祈つてをります。なほ、ご精読後には、是非とも班長や班付の方々、班友に一筆御便りを差し上げていただきたくお願ひ致します。

(藤井貢記)

〔資料〕

第四十一回 “合宿教室（阿蘇）” 感想文集

非 売 品

平成八年十月三十一日発行

編集兼発行者

東京都中央区銀座七―一〇―一八 柳瀬ビル

電話 〇三―三五七二―一五二六(代)

FAX 〇三―三五七二―一五二七

社団法人 国 民 文 化 研 究 会

理事長 小 田 村 寅 二 郎

編集委員

藤井 貢・大日方 学

秋山 信之・土井 郁磨

